始点

383-28

國譯密教

大正
12.7.12.
東文軒

國譯密教經軌第五

目次

一、國譯聖迦抳忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經上中下……塚本賢曉國譯……一
一、國譯阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌上中下……塚本賢曉國譯……七五
一、國譯轉法輪菩薩摧魔怨敵法……塚本賢曉國譯……一三九
一、國譯金剛頂瑜伽金剛薩埵五祕密修行念誦儀軌……塚本賢曉國譯……一四五
一、國譯佛說虛空藏菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法……塚本賢曉國譯……一六三
一、國譯觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門……塚本賢曉國譯……一七一
一、國譯葉衣觀自在菩薩經……塚本賢曉國譯……一九一

一、國譯佛母大孔雀明王經上中下……塚本賢曉國譯……二〇三
一、國譯大寶廣博樓閣善住祕密陀羅尼經上……塚本賢曉國譯……二八一
一、國譯一字奇特佛頂經上中下……塚本賢曉國譯……三五三
一、國譯菩提場所說一字頂輪王經自卷一至卷五……塚本賢曉國譯……四五九

國譯密教經軌第五目次 終

坎三、縮閉十四、藏廿六奎十。
(一)說　和本の題は說の下に迦樓羅の三字あり。阿尾奢は譯入の韻なり。
(二)香醉山　七金山の頂一なり。
(三)摩醯首羅　第四禪頂の天なり。和本には自在宮の字なし。
(四)時に　或は附の時に作る。
(五)闍記　面に黑子あるなり。和訓にホクロなり。
(六)素食　菜食肉なきを素食といふ。
(七)三白食　粳米の飯、乳と酪と牛蘇とに和するものを三白食といふ。
(八)淨衣　或は新の一字を冠す。

國譯速疾立驗摩醯首羅天說(一)阿尾奢法

唐北天竺三藏沙門大廣智不空　詔を奉じて譯す

爾の時、那羅延天、(二)香醉山の頂に在りて、(三)摩醯首羅を(四)自在宮の中に請して供養し、頭面をもて足を禮し、摩醯首羅に白して言さく、我が乘ずる所の迦樓羅使者は能く世間所求の事要を成辨するも、且く速疾なること能はず、惟だ願くは大天、未來の有情のために、速疾立驗阿尾奢法を說きたまへ。(五)時に摩醯首羅、那羅延に告げて言く、汝當さに諦かに聽くべし、我れ汝がために速疾成辨使者の法を宣說し、能く息災增益降伏敬愛を作し、亦た能く夜摩界に於て往來し使役して、能く未來の善●惡●吉凶●成敗●旱澇調はず、隣國の侵擾惡人の叛亂種種の災祥を知らん。若し未來の事を知らんと欲せば、當さに四り五りの童男或は童女、年七八歲可にして、身上に瘢痕(六)闍記なく、聰慧靈利なるものを揀擇すべし、先づ一七日(七)素食或は(八)三白食を服せしむ。凡そ作法せんと欲せば、要らず吉日或は鬼宿或は歲宿の直を須ひよ、甘露の直日は最勝なり、沐浴せしめ獨身に香を塗り、(九)淨衣を著し、口に龍腦荳蔻を含ましめ、持誦者は面を東

に向へて坐し、身前に白檀香を以て小壇を塗り、一肘量可にせよ、童女等をして壇上に立たしめ華を童女の前に散じ、一閼伽器を置き(一)安息を取り、大印眞言を以て加持すること七徧して、燒いて童女をして手を熏せしむ。又た赤華を取て加持すること七徧して童女の掌中に安き、便ち手を以て面を掩はしめよ、則ち持誦者は大印を結べ、二手を以て合掌して外に相交へ、(二)左は右を押し、其の掌を虛にせよ、即ち成す、此の印を以て自身の五處を加持せよ、所謂る、額●右肩●左肩●心●喉なり、頂上に印を散して即ち眞言を誦して曰く　娜謨婆誐囉底、一摩賀引母捺囉二合迦比攞施棄底哩二合施囉、三底哩二合路左伊、四伊捨引伊、跋輸跋帝、娑囉二合賀五。

則ち此の印を以て其の童女の頂を按へよ、則ち想へ、頭上に於て三角にして赤色の熾盛の光輪あり輝光ありと。眞言を誦すること七遍せよ、火輪の眞言に曰く　唵、一阿儀你、二合施棄、娑囉二合引賀引一

則ち此の印を以て童女の口の上を按へよ、彼の口中に於て水輪を想へ、白色にして半月の形なり、眞言を誦すること七徧せよ、眞言に曰く　唵一惹攞祖哩二合拏引摩抳、娑囉二合引賀。

(一) 安息　或は安息香に作る。

(二) 左は右を云云　右を以て左を押して結ぶ印なり。之れ定法なり。

次に印を移して彼の心中を按へて、地輪を想ふべし、形方にして黃色なり、誦すること七徧せよ、眞言に曰く　唵、一摩訶引摩囉、跋囉訖囉二合麼、娑囉二合賀。

次に印を移して彼の臍中を按ふべし、(一)輪を想へ、其の形圓黑色なり。誦すること七徧せよ、眞言に曰く　唵、一尾曩多引句攞曩那、娑囉二合引賀引二

次に大印を以て彼の兩の腳を加持すべし、迦樓羅を想へ、誦すること(二)七遍せよ、眞言に曰く　唵、一跋乞史二合囉引惹跋那娑囉二合引賀引三

次に大印を以て甲冑の眞言を誦して、童女を加持し、徧身旋轉すべし、眞言に曰く　唵、一迦囉左(三)摩部引多引地跋帝、娑囉二合引賀。

行者次に自身を摩醯首羅天と爲すべし、三目あて頭冠瓔珞をもて莊嚴せり、頭冠の上に仰けたる半月あり、頂上は青し、十八臂なり、手に種種の器仗を持す、龍を以て神線となし(四)角絡して繫けたり。又た血を塗れる象皮を披る、須臾の頃に自身を觀じ已れ。次に大印を以て彼の童女の一百八の命節を護るべし、眞言に曰く　唵一密哩二合體尾野二合比多二合惹囉引檢囉迦苦三

其の大印を結び及び眞言を誦し、徧身に旋遶して加持すれば、則ち(五)八種の命節を護

(一) 輪　或は風輪に作る。

(二) 原本になし、或は脫せるか。

(三) 摩　或は摩賀引に作る。

(四) 角絡云云　曼荼羅の時は角み違ひなり、今は纏ひ繫くるなり。

(五) 八種　一百八種か。

するなり。　次に又た大印眞言を以て華香及び閼加等を加持す。　次に又た大印眞言を以て十方界を結せよ、則ち此の童女の前に對ひて摩醯首羅使者の眞言を誦すべし、曰く　唎齊吒迦、一摩多那引誐、二尾灑娜跛拏、三薩摩那誐囉、四尾訖囉二合摩、五尾羅引薩誐底、六嚂齊吒迦、七布囉二合哩跛引擔覽、二合八左囉左囉、九左哩左哩、十跛拏跛拏、十一跛尼跛尼十二伴爾伴爾、十三羯恥羯恥、十四阿尾捨阿尾捨、十五嚂齊吒迦、十六嚕奴嚕二合枳孃二合跛野底十七娑嚩二合賀十八引

此の眞言七徧を誦すべし、則ち彼の童女戰動せん、當さに知るべし聖者身に入ると。則ち更に彈指して眞言を誦す、若し現驗なくんば、次に催迫使者の眞言を誦せよ、曰く　嚂嚂耶、一摩嚕嚕多、引二素囉素囉、引三布爾多、賀那賀那、四沒囉二合　憾麼二合引五那尼

(一)那覩嚕二合尼、覩嚕二合尼六謨尼謨尼、七伴上聲爾伴上聲爾、八羯恥羯恥、九阿尾舍阿尾舍、十嚂齊吒迦、十一嚕奴嚕、二合枳孃二合跛野帝、娑嚩二合訶引十二

此の眞言を誦すれば、必ず速かに應驗あらん、未來善惡一切災祥の事を問ふに、若し語らず、或は語ること遲くば、則ち(二)捧印を結べ、二手をもつて合掌して、二無名指外に交へ、二中指並べ立て、二頭指各の無名指の頭を鉤し、二大指各の中の文を押さ

(一)那　那尼か。

(二)捧印　此の印は前の金翅鳥の銀本印にして內師子の印なり、唯し前の印は二空二火の間を口の形と爲す今は二空を二火の節に付くるこれ異なり。

しめよ。眞言を誦して曰く　唵一母那誐二合囉、二都嚕都嚕、三娑嚩引二合賀。

此の捧印を結び、則ち種種の事を諮問し已て、大印眞言を以て閼伽を加持し、三たび童女の面に灑げ、即ち結解せん、此の使者の眞言は先づ一萬遍を誦すべし、則ち法成し則ち身を見し來らば閼伽を獻ずべし、乞願せよ、願くは聖者、一切處●一切時に使用皆な辨せよと。則ち隱れて現れじ。已後使はんと欲せば一の小壇を塗り、香●華●飲食を著き、眞言を誦すること一百八遍せば則ち身を現せん、則ち言ふべし、龍宮の中に、長年藥、如意寶珠を取れ、或は夜摩王の處に使はして、命を延し壽命を增益し、或は天上にして妙甘露を取らしめ、或は佗國に其の善惡を問はしめ、亦た能く軍陣を助けて佗敵を摧破せよと、種種の使用悉く能く成辨す。此の法は一切迦樓羅法の中に最も殊勝なり、祕密は得がたし、汝當さに法器の傳授するに堪へたる者を揀擇して、之を傳與すべし、若し非器の人に傳ふれば、即ち他を損じ、已にして後此の法成せじ、是の故に極祕密にすべし、妄りに之を傳授する勿れ。大自在天迦樓羅陀羅尼に曰く　那謨、婆伽嚩底一嚕駄囉野、二瞋那、劫波攞野、三薩嚩、微那延迦囉野四薩嚩、羯摩、涉駄那野、五薩嚩、嚩尸迦囉拏二合野、六薩嚩設都嚕、二合尾那捨那野、七唵迦波羅、質擔、瞋

那入聲八迦波羅、部擔、嚕訥嚕、二合枳孃二合跛野帝、娑縛二合引賀引九

(一)此の陀羅尼をもて人を(二)調伏せんとならば、赤色の芭蕉の葉を取て、彼の人を畫き、心上に名字を書して陀羅尼を誦すること一百八遍して、即ち牛糞の中に埋めよ、即ち調伏せん。竪子をして對して相憎ましめんと欲せば、(三)多羅葉に彼の男女の形を畫き、名を書し相背けて線を取て繫ひ、鼠狼の毛、山鷄の毛、蛇の退皮を取て燒き熏じ、陀羅尼を誦すること一百八徧して刼波羅の中に安し、即ち屍林中に於て埋め著け、便ち相憎まん、除卻せば依舊ならん、(四)若し相ひ憐しましめんとならば、還た多羅葉の上に於て彼の夫妻の形を畫き、名を書して(五)相ひ合せ、白線を取て繫ひ、雀兒の毛、蛇皮を取て燒き熏じ、陀羅尼を誦すること一百八徧せよ、即ち相ひ(六)憐しまん。

又の法。人をして相ひ打たしめんと欲せば、大蟲の皮に於て、或は牛皮に於て二人の頭髻を相ひ把るを畫き、名を書き著け、線を取て纏著し、火の上に於て熏じて(七)碓臼の下に埋めよ、即ち日日に相打つことを得ん、除卻せば止まん。

又の法。若し人を調伏せんと欲せば、貝多葉を取て、上に人形を畫き、名を書して陀羅尼を誦すること一百八徧し、即ち牀の下に於て埋めよ、即ち調伏するを得ん。

(一)此の陀羅尼云云 相增法。
(二)調伏 人を祈るなり。
(三)多羅 此には岸と翻ず、書寫に用ゆる葉なり。
(四)若し云云云 相愛の法。
(五)相ひ合せ 面合なり。
(六)相ひ憐 憐愛なり。
(七)碓臼 カラウス。

又の法。血を尿りせしめんとならば、多羅葉を取て彼の人を畫き、姓名を書し、釘を取て陀羅尼を誦すること一百八徧して、上を釘つこと七七日すれば即ち得、除けば去らん。

次に眼藥の法を說かん。若し竪子を調伏せんとならば、蛇頭●(一)竭羅●(二)安善那●青木香●象の甲●蜂二箇を取り、黑月十四日に於て擣いて末に作り、肉を和して眼角に點せよ、一切の竪子隨逐す、天上のも亦た來る、但だに人間のみに非ず。

(一)竭羅 或は得竭羅に作る。
(二)安善那 眼藥なり。白銀の出る石なり。

國譯速疾立驗摩醯首羅天說阿尾奢法 終

國譯聖(一)迦抳忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經卷上

蘇悉地經大明王敎中第六品に出づ。

(二)唐三藏沙門大廣智不空　譯す

爾の時に、金剛手菩薩、座より起ちて佛足を頂禮して退いて一面に坐し、合掌して佛に向ひて佛に白して言さく、世尊、我を哀愍し加持し已て蘇悉地諸眞言の軌則律儀の敎法を說きたまふ、我れ今、未來の有情及び末法の時、福德なき者のために、前世に於て善品を修せず、諸の罪業を作すを以て、今世を致し、貧匱を招感し、惡人に逢遇し、鬪諍言訟して有情を殺害せんと欲す、亦た爲れ未來に諸の國王有て、正法を以て國を治め、淸淨の信を生じ、三寶を尊敬するに、隣國の小王のために國界を侵擾せられ、正(三)法に遵はず、或は外道ありて因果を信ぜず、三寶を毀謗し、佛敎を滅壞す、是の如き等の種種の有情あり、今佛前に於て彼等の類のために(四)以息災增益愛敬降伏等の法を說いて、佛法に大威德神通自在あるを知り、諸の菩薩の、一切智を具するこ

巽四、縮閏十四、藏十六奎十。

(一)迦抳童子と飜ず、下の註に蘇悉地經を出すと雖も、現流布經の中には無し。

(二)唐　和本には大興善寺とあり。

(三)法　和本化に作る。

(四)以　或は和本此に作る。

とを知らしめんと。或は復た諸の修眞言行者あり、衆生ありて常に惡心を懷いて佛法を破し、師を興して善を害せんと欲するを見ては、大悲愍の念をもて降伏の法を作して、而して彼の人をして惡業を逐はざらしめ、亦た未來に三惡趣に墮するを遮す、是の故に此の無比大威德聖迦抳(一)忿怒の法を說く、此の法を修する者は、當さに舍利ある塔前に於て、或は河岸の淸き流水の側に於て、或は空閑及び天廟或は山間に於てすべし、是の如くの處に於て、或る時は乳を飲み菜を食ひ、或は復た食を乞ひ即ち眞言を誦すること六十萬遍に滿すれば、即ち先行の法みな成就することを得、大効驗あり、或は能く縛撲し事を問ふに皆知る、諸の鬼魅を摧き邪見にして正法を毀謗し、國を壞するの人、闡提等の類を滅除す、眞言の威力をもて悉く能く彼れに善心を發さしめ、毒蟲●毒藥も傷害する能はず。又た復た餘部の諸の持誦者のために、能く此の法を破せられず、若し持誦者、設ひ此の法則に依る能はず、或は增し或は減ずることあれども、亦た滿足することを得、又た能く諸の伏藏を開いて阿修羅の關鍵を破し、江河を枯竭し流水を廻らし止む。又た先行の法あり、自身の嚕地囉及び牛黃酥を取り、相ひ和して千盞の燈を然し、聖金剛童子を供養し已るに即ち空中に(二)聲あり是の如くの

(一) 忿怒和本には忿怒金剛童子儀軌さあり。

(二) 聲あり　和本になし。

言を作す、汝の法已に成ずと。便ち閼伽香水を取て額に當て奉獻すべし、此れより已後、所求の事成就せざることなし。

又た若し阿修羅窟門に往いて妙樂を受けんと欲せば當さに阿修羅窟門に住し、茅草を以て鈎を作り、金剛童子眞言を誦すること七遍し、徧ねく茅鈎を加持し、門邊の空中に於て右に旋轉し、專ら眞言を誦して間斷せしむること勿れ、窟中に於て大火聚を生ずべし、彼の中の修羅の男女等、皆な燒然せられ哭泣し惶怖して呵呵の聲を作さん、阿修羅女當さに一一皆な出で、身を現じて持誦者に告げて言ふべし、惟だ願くは尊者、我が窟中に入りて意を恣にして遊戲したまへと、入るを得て已後住すること一大劫を經て天の妙樂を受く。又た伏藏を取らんと欲するに宿曜日時を擇ぶべからず、齋戒を限らず彼の伏藏の邊に於て當さに一足を翹(つまだ)いて立て眞言を誦すべし、右に旋らして顧視し、四方に徧てし即ち結界を成ず（大壇を作るも亦た此の法に準ず。）專心に足を翹(つまだ)いて立ちて眞言を誦すること一百八徧するに、其の伏藏の中、伏藏を守る者若し障難を作さば、即便ち燒かれて一火聚と成る、哭泣して持誦者の前に來至して跪かば即ち彼に告げて言く、汝等此の伏藏を開いて、藏の中の所有、皆な悉く我に與へよと、彼等即ち開いて持誦者に與

へん。若し彼等慳惜して與へずんば即ち是の言を作せ、梵王那羅延●摩醯首羅及び鬪戰の女神訥伽等來りて汝が伏藏を(一)厭はん、汝等應さに速かに我に此の物を與ふべし、若し然らずんば忿怒聖者金剛童子、汝が家族を滅したまはんと。彼等若し此の如きの語を聞き已らば皆悉く順伏して即ち是の言を作す、尊者意を恣にして任意に此の物を取れ、我れ悋む所なけんと。即ち彼に告げて言く、汝等自ら藏を開いて我に與ふべし。彼則ち藏を開いて恭敬して持して與ふべし。

又たの法。雌黃或は雄黃●牛黃安膳那眼藥を取て金●銀或は熟銅器の中に置き、舍利ある塔の前に對ひ、香を以て一の方壇に塗り、聖金剛童子の像を置き、壇中に於て種種の香華●飲食●閼伽を以て敎に依て迎請して之を供養し、此の壇の前に對ひて眞言八千徧を誦して前藥を加持せよ、即ち三相現ずることを得ん、所謂る煖相●煙相●光相なり、若し煖相現せば用て額の上に點し、或は眼の中に塗れ、一切の人見る者親附して心に歡喜を生せん。若し煙相現せば、前の如く之を用ふるに安但但那成就することを得、若し光相現せば亦た前の如く用ひよ即ち飛騰虛空自在なることを得。

又たの法。恒河或は海に入るの河に至り、此の河の側に於て持誦者或は淨食し或は食

(一) 厭　或は壓に作る。

はず、眞言を誦すること三十萬遍して阿修羅窟に至り、印契を結んで眞言を誦すれば、其の阿修羅の關鍵自然に破し窟門即ち開く、阿修羅王引いて宮中に入れ天の甘露を食せしめ、壽命一劫なり。

又たの法。若し大海の岸邊に於て印を結び眞言を誦し、大海水を擬すれば其の水即ち減ずること二十五肘ならん、其の減ずる處に隨つて地即ち乾燥せん。

(二)又た海岸の(三)間に於て目を閉ぢ、綿を以て其の兩耳を塞ぎ、印を結び眞言を誦すること一千遍すれば、則ち自身楞伽山の頂に至るを見ん。又た一千遍を誦すれば、羅刹王微毗師那ありて端嚴の身を示現し行者の處に至て持誦者の驅使走使するに任せん、若し伏して駈使せずんば、持誦者即ち想へ、彼の羅刹左の足の下にありと。足を擧げて地を踏まんに其の羅刹王悶絕して死に至らん、所住の楞伽の城悉く皆な燒かれて、大火聚の如し、持誦者慈悲心を起して眞言句の中に於て娑嚩賀の字を加ふれば、其の羅刹等即ち蘇息して、行者に歸伏し驅使せしむるに任せん。

又たの法。(四)俱摩羅天の前に於て(孔雀天に乘ず)食せずして眞言三十萬遍を誦せば、俱摩羅天當さに即ち身を現じ行者の前に於て行者の願を與ふべし、行者即ち閼伽香水を取て眞

(二) 又　或はいふ又の法か。

(三) 間　或は邊に作る。

(四) 俱摩羅天　此には童子と云ふ。

言を誦し加持すること七徧して以て奉獻じ、是の言を作さく、善く來る俱摩羅、惟だ願くは我をして俱摩羅摩醯首羅天所說の眞言に於て、皆な成就することを得せしめよと。俱摩羅言く、汝成就することを願ふやと、是の語を作し已て身を隱して現せず、此れより已後、一切金剛部の中、及び餘天の所說の眞言、みな成就すること得。又たの法。摩醯首羅天の廟に至て食せず、眞言十萬遍を誦するに心に願求する所みな滿足することを得。

又たの法。梵天●那羅延天●摩醯首羅天●帝釋天●俱摩羅天●日天●諸餘の天等の形像の前に於て、眞言を誦すること十萬遍すれば、心に求願する所悉くみな成就す。

又た、惡人を降伏せんと欲せば、芥子を取て鹽と共に相ひ和し護摩して、眞言を誦すること十萬遍し、一徧に一たび彼の名を稱し、芥子及び鹽を火中に投ずれば、天修羅等も尙ほ損壞を被る、何に況んや諸餘の人類の惡心を興す者損壞せざらんや、先に功業あらずと雖も、誦するに隨ひて成ず、何に況んや常に受持する者をや。又た(一)密里得迦を變じて金及び珠寶となさんと欲せば、密里得迦を取て左脚を以て頭上を踏み、手印を以て之を打ち、眞言の中に吽字を幷せよ、其の密哩得迦即ち自ら起たん、補沙

(一)密里得迦密里は死なり、得迦に未詳なるも屍か加持すれば金寶となる。

鐵の刀劒を用て之を斫るに即ち全身變じて金軀と成る、若し爾らずんば持誦者告げて速吐速吐と言へば即ち如意寶珠を吐く、珠を取て自の頸の下に懸けよ、思念する所の事みな滿足することを得ん。

又たの法。舍利塔の前に對ひて眞言六十萬遍を誦せよ、即ち先行成就す、然して補沙鐵を以て劒を作れ、長け六指或は八指、或は十六指、或は三十二指、或は餘の眞言敎中の劒の指量、劒成じて後五淨を以て之を洗ひ、右の手に劒を把り道場の中に於て念誦し乃し劒光燄を現ずるに至れ、持誦者則ち身を變じて持明仙となり、虛空に飛騰することを得、持劒明仙と名く、或は補沙鐵を以て金剛杵を作れ、量は蘇婆呼經に說くが如し、念誦すること前の如くならば則ち變身して毗那夜迦(一)主仙と爲り、諸の魔衆に於て而も自在なるを得。或は以て輪を作り念誦すること前の如くせば、則ち持輪仙と爲り、諸明仙に於て主宰たることを得。若し鉞斧を作て念誦すること前の如くせば、文變ずるを得て毗那夜迦主仙となる、若し斧を作り念誦すること前の如くせば則ち鬼神王仙と爲り、諸の鬼神に於て主宰たることを得。若し刀子を作らば天女主仙と爲り、諸の天女に於て而も自在を得。若し羂索を作らば則ち龍主仙と爲り、諸龍の中に於て

(一)主和本に王に作る。

自在を得。若し鑠底を作らば、則ち勇健大力を得て能く俱摩羅天に敵せん、若し佉吒網迦を作らば則ち摩醯首羅天の如く、三界の中に於て而も自在を得ることを得ん。前の諸法に於て若し一法成就するときは、則ち能く一切の壇場に入ることを成じ、亦た能く一切の諸法を成就し所有る明仙、彼と共に來往し、壽命一大劫ならん。

又たの法。持誦者曾し經て入る所の修羅窟の前に於て、眞言十萬徧を誦せ、先窟の中の持誦の成就者、窟を出で來り迎へて頂戴し、引入して修羅宮中に至らん、若し來らずんば即ち摩醯首羅天廟の中に至て吽字を幷べ稱し、眞言一千遍を誦すれば、先きより修羅宮に入る者皆な窟を出で來らん。

摩醯首羅に獻ずる所の萎華を取り、又た畫ける摩醯首羅の像を取て、左脚を以て其の頭上を踏み、萎華を火中に投じて護摩を作せば、則ち吉祥天女、修羅女と共に眷屬と爲り窟より出でゝ、持誦者の前に至り、是の如くの言を作さん、身を終るまで尊者に奉事せんと。行者拍掌すること三遍して告げて言へ、汝我れに隨順せば即ち慈心を起せと。眞言の句の中に於て娑嚩賀の字を加へよ、彼等みな迷悶して醒悟することを得ん、若し此の法を作すとも由は入らずんば、持誦者即ち目を閉ぢ眞言八遍を誦せば、則ち聖者金剛童子、身を現じて行者に告げて言く、子來れと。

又たの法。羅刹を召して使者と爲さんと欲せば、應さに先づ曼荼羅に入り灌頂を受けよ、然して後作すべし。怖畏恐懼心を離れ常に諸佛菩薩●聲聞●緣覺を觀念し、三時に懺悔し、隨喜し勸請し發願し廻向せよ。前の像を所將て塚間に於て塗拭し、猛利の壇を作り、身に赤衣を著し、赤華をもつて花鬘に作り自身を莊嚴し、頭上に人の劫波羅を安し、眞言を誦するに遍數に限りなく、常に以て甲冑を印し身に擦ぬけ、猛利の壇の中に於て四印の曼荼羅を畫いて、初め念誦の時惡形にして狗牙上さまに出づるを見、或は惡形にして髮を豎て舌を出すあらん、或は一足或は二足、三足或は臂あつて或は四臂、或は八臂或は兩頭、或は三頭或は四頭、持誦者或は大風雷雨を見ん、第二七日に美貌端嚴の女人衣服瓔珞をもて其身を莊嚴し幻惑するを見て、持誦者慈心を起して觀せば、彼れ退散し隱れて現せず、第三七日に即ち毗那夜迦を見、及び羅刹極惡の形容を見、即ち降伏して使者と爲らん、若し餘の成就持誦の人悉地を得る者を見て、彼に於て少しき忿怒を起して彼の人を視れば、彼の所有る成就の法悉くみな退失す、彼の羅刹等、誓を立てて所爲所作一切驅使する所の處に皆悉く成辦して而も使者と爲る。

又たの法。故園の中、或は迥なる一樹の下、或は池側或は山間に於て、愛樂する所の處に隨ひて語らず或は乞食し、或は乳を飲み、或は菜を食して身命を支持し、三時に此の像前に對して懺悔して、眞言八十萬徧を誦すれば、所爲の所作みな成就するを得。

又たの法。佗敵を禁止して彼をして昏迷し執る所の器仗害を爲すこと能はざらしめんと欲せば、三日食せず、四印曼荼羅を畫け、或は吉祥器經中の壇を畫く法に依て力に隨て供養すべし。壇の中一髻尊菩薩の位處に於て竹竿の青旛を置き、上に自の魯地囉を取て毒及び白芥子を和し、(一)三股底里商俱金剛杵を畫き作れ、杵の心に聖忿怒金剛童子形を畫き、竿の下の地上に於て劫波羅末を以て泥に和し、獨股金剛杵の形を捏り作り、護摩鑪を作り、鑪の中に又た泥を捏りて一小獨股金剛杵を作て爐を繞りて亦た獨股金剛杵を作り、棘刺ある木を取て火に然し、人骨の末を取て毒を和し一たび眞言を誦して一たび彼の名を稱へ鑪中に擲げ、軍陣の前に對ひて作法すれば、彼の軍衆兩目皆な盲て一切見えず、手中の器仗みな自ら落ち、各の當處に於て動せず、杙の如くならしめむ。

又たの法。他の陣を破せんと欲せば、彼の軍逼らんと欲するに、且らく縱して相ひ近づけしめよ、近づき已んなば前の如く四印壇を作り、或は餘壇を畫くも亦た得。前の青旛を竪て彼の軍の前に對して護摩鑪を作り、行者裸體にして髮を被むり、印を結んで被甲護身し、(一)摩訶莽婆を取て毒と嚕地羅とに和し、日に三時念誦するに毎時各の一百八遍して火に投げ、前に準じて彼の名を稱へよ、是の如くの法を作し已るに、彼等梵王那羅延摩醯首羅俱摩羅天等の威德自在の如きも、七日の中間に互相ひに諍訟し相鬪し殺害し、互相ひに間構して悉く皆な命を殞し、二七日の間に磨滅して餘りなけん、念誦の時語するを得ず、若し寢息せんと欲する時は牛皮に臥すべし。

又たの法。彼の麽羅をして明醫(二)自の頭上の五脉の處に於て嚕地羅を刺し取らしめ、護摩を作し眞言一徧を誦し彼の名を稱せば一切の佗敵須臾の頃にして頑癡なること杙の如くにして、自ら捉へ縛して殺害するに任す、彼れ若し順伏せば即ち悲愍の心を起し、息災法を作し酥を取て蜜に和し、龍華藥を以て搵れて彼の名を稱して、眞言を誦すること一徧して一たび火中に擲げば、彼の苦皆な息む、(三)前の諸法に於て若し一法成就するときは則ち能く一切の壇場に入るに成る、亦た得たり、一切の諸法を成就し、所有る明仙彼と共に來往して壽一大劫ならん。

(一)三股云云 梵漢並べ擧げたり。

(一)摩訶莽婆 大肉なり。

(二)自の頭上云云 百會の處なり。

(三)前乃至一大劫ならん 和本になし。

(一) 七の蚯蚓云云　七の蚯蚓の糞を取て天の形を作る。

(二) 根本印金翅鳥の印に似たり。(三) 二中の上、高本に「其の印相は」とあり。(四) 即乃至根本高本にあり。

又たの法。天帝釋の擁護を欲せば、(一)七の蚯蚓の糞を取て彼の天の形を作り、右の脚を以て心上を踏み、毒藥を取て嚕地囉及び白芥子に和し、眞言を誦すること一千遍して、護摩し眞言を誦すること一遍して一たび火中に擲げば、則ち天帝釋敬愛し、並に天の眷屬常に來て擁護することを得ん。

又たの法。若し華果をもて眞言を誦すること七遍して加持し、以將て人に與へば則ち歡喜することを得、此の金剛童子の眞言を舍利塔の前に對して念誦せよ、餘處にては念誦すべからず、作法成ぜず。若し常に念誦して間斷せずんば、一切の所求皆な成就することを得。菩提心を發して慳悋の想を離れ、無益の世間の談話を遠離すべし、一切の勝願みな現前することを得、諸魔の便りを得られず。人のために病を治し及び鬼魅を治し、以て大法を妨く應らず。

我今聖迦抳忿怒金剛童子眞言印契念誦次第法を說かん。

(一)根本印。(二)二中指を以て相ひ背け豎て、二無名指を中指の中節の外に於て橫たへ交へ、二頭指●二無名指の頭を鉤し、二大指は中指の前の中節に於て頭相ひ拄へ、二小指頭相ひ合せ、下に向へて豎てゝ針の如くせよ。(四)即ち成ず、根本眞言に曰く　曩謨引囉怛

(一) 獨股杵　不動の獨股杵の如し、但し二空互に二小の甲の上を捻す。

(二) 努　或は弩に作る。

(三) 諾賀の下、或はいふ諾賀の二字あるか。

(四) 寶山印　內縛して二頭屈して頭を合せ、圓らかにす。

怛曩二合怛囉二合夜引野一曩莫室戰二合拏嚩日羅二合播引拏上聲曳二摩訶藥乞灑二合細曩引鉢多上聲曳四怛你也二合佗去聲引五唵六迦抳度顎七吽引八娑吒半音娑嚩二合賀九引

又た第二根本眞言。阿修羅宮を開いて前の根本印を用ひよ、眞言に曰く　曩謨一囉怛曩二合怛囉二合夜引野一曩莫室戰二合拏嚩日羅二合播引拏上聲曳二摩訶藥乞灑二合細曩引鉢多上聲曳四怛你也二合佗去聲引五唵引六度曩尾度曩七迦抳矩嚕二合引駄八薩嚩演怛羅二合引抳九吽十

次に(一)獨股杵の印を結べ。二手內に相ひ叉へて拳に作り、二大指互に二小指の甲の上を捻し、頭指並べ豎て合せよ即ち成ず。前の第一の根本眞言を用ふ。

次に護身印を結べ。前の根本印を用ひ、身の五處を印せよ、眞言に曰く　唵引一薩嚩(一)努瑟吒二合嚩商識量の羯囉二迦抳矩嚕二合引駄三囉乞灑二合引嚩引娑嚩二合引賀四

次に甲冑の印を結べ。前の根本印に準じて二頭指を舒べて相ひ拄へ、二大指は二頭指の下の第一文を捻せよ即ち成ず、身の五處を印せよ。眞言に曰く　唵引一紇哩入聲二合引迦抳二野摩(二)諾賀吽發吒半音娑嚩二合引賀三

次に(三)寶山印を結べ。前の獨股杵印に準じて、二頭指微しき屈して頭相ひ拄へ、頭上に安せよ即ち成ず、眞言に曰く　唵引一阿佐羅吽引二

(十)牆界印嚩前の根本の印、二風申べ立つ。

(十一)囉　高本堀に作る。

次に(一)牆界の印を結べ。前の根本印に準じて、直く二頭指を舒べて頭相去ること一寸許り即ち成ず、眞言に曰く　唵引一紇哩二合引入迦捉二諾賀諾賀三鉢者鉢者四吽五發吒六中聲

次に網印を結べ。前の根本印に準じて、二大指外に向へて散し開く即ち成ず、眞言に曰く　唵引一嚩日囉二合半惹(十一)囉吽發吒二

次に縛毗那夜迦の印を結べ。前の根本印に準じて、二頭指。二中指屈して掌に入れ、二大指は各〻二中指を押し、掌中に於て申べ相ひ背け合せ拳に爲れ即ち成ず、眞言に曰く　唵引一度曩尾度曩尾度曩怛囉二合引娑引野引尸引灑野三薩嚩尾曩引野迦引南引四吽引五娑嚩二合賀引六

次に迎請聖者の印を結べ。前の根本に準じて二大指を以て身に向へて招け即ち成ず、眞言に曰く　唵引一一度顎發吒二

次に請聖者眷屬印。前の迎請の印を用ひよ、眞言に曰く　唵引一娑婆哩嚩引囉二麼引嚩引賀野三婆去誐去聲鑁四迦捉矩嚩引二合駄五三麼野麼弩鼻聲娑摩二合囉六娑嚩二合引賀引

次に獻閼伽の印を結べ。根本印に準じて、二大指は二頭指の下第一文を捻せよ、即ち成ず、眞言に曰く　唵引一嚩日嚕二合引娜迦吽引二

次に獻座の印を結べ。前の獨股杵の印に準じて、二大指は二頭指の下第一の文を捻し

て頭外に向へて出すこと少し許り、即ち成ず、眞言に曰く

唵引一嚩日囉二合尾引囉引野二娑嚩引二合賀引三

次に獻塗香の印を結べ。前の杵印に準じて、二大指は微し屈して頭指の下第一の文を捻し、二大指相ひ去ること二寸許り、能く闕する所の儀軌を滿す、眞言に曰く　唵引一迦捉矩嚩引二合駄二薩嚩薩怛嚩引二合娑去聲羯囉三囉乞灑四三合薩嚩產駄引顎五娑嚩引二合賀引六

次に獻華の印を結べ。前の獨股杵の印に準じて右の大指を出す、即ち成ず、眞言に曰く　唵引一迦捉捕澀波二合母納婆二合嚩吽引二

次に燒香の印を結べ。前の獨股杵の印に準じて二大指の面相ひ合せよ、眞言に曰く

唵引一迦捉矩嚩引二合駄二塢孽囉二合能上瑟吒嚩引三合得羯二合吒佩引囉嚩引三孽囉二合恨拏二合孽囉二合恨拏二合度奔四、娑嚩引二合賀引五

次に(二)獻食の印を結べ。前の獨股杵の印に準じて二大指。二小指を出して頭相ひ拄へ、餘の六指は內に相ひ叉へて拳に作れ。眞言に曰く　唵引一迦捉引二吽吽三娑嚩引二合賀引四

次に燈明の印を結べ。前の獨股杵の印に準じて、二大指を身に向へ並べ竪てよ即ち成ず、眞言に曰く　唵引一迦捉你泥以の切、引跛你跛野二吽三發吒四中聲娑嚩引二合賀引四

(二)獻食印內縛して二小二大申べて端を合はす。

次に頭印を結べ。前の根本印に準じて、二大指は二無名指の甲の上を捻せよ、即ち成ず、眞言に曰く　唵引一吽引吽引二麼麼𑖭吒中聲三

次に頂印を結べ。前の根本印に準じて、二頭指直く舒べて頭相ひ拄へよ即ち成ず、眞言に曰く　唵引一紇哩二合引二戰拏迦抳三諾賀鉢者四吽引五𑖭吒娑嚩二合引賀引六

次に前の根本の印を結んで心上に安き、心眞言を以て加持せよ、心眞言に曰く　唵引一迦顎吽引𑖭吒半聲二

次に(一)甲冑の印を結べ。多羅菩薩の印の如くして、二頭微しき開け、即ち成ず　前の甲冑の眞言を用ひよ。

次に最勝の印を結べ。二手内に相ひ叉へて拳に作り、二小指頭相ひ合せよ即ち成ず、前の第二根本眞言を用ひよ。次に念珠を捧げて心に當て、隨心眞言を以て加持すること七遍せよ、隨心眞言に曰く　唵引一迦顎度麼二吽引三𑖭吒四

次に奉送聖者の印を結べ。前の根本印に準じて二大指外に向へ撥せよ、眞言に曰く　唵引一迦抳娑嚩二合引賀引二

我今復た(二)阿修羅窟門を開くの立印を說かん、持誦者當さに迅速に地を踏んで行歩し喜躍し恐悚(シヤウ)し頻伸し、眉を蹙め其の兩頬を皷(う)ち、二手高く擧げ其の十指を曲げて師子爪を爲り、二目下に向へて師子の顧視するが如く、時時に兩手を以て師子爪を作り、更互に上下して以て地を踏み師子の行くが如くし、(三)阿里荼立を作して舞て旋遶すべし、想へ自身は本尊の如しと。此の印は一切の印の中に最勝なり、能く一切阿修羅宮の關鍵を摧く。

金剛藏菩薩の言はく、我今(三)金剛童子の像を畫くの法を說かん。截らざる白氎を取て毛髮を擇び去り畫師は當さに八戒を受持すべし、菩薩の身を畫き、種種の瓔珞をもて莊嚴と爲す、身は火色の如く身上に遍くして火焰を流出し、右手を以て金剛杵を持し斜に擧げて上に向へ、左手は施願の手を作し、脚は阿里荼立になして磐石の上を踏む、施願手の下に於て持誦者を畫け、右膝は地に著け、手に香爐を執る、像既に成し已んなば、當さに像の前に於て種種に供養すべし、安息香を燒いて無間に念誦し、乃至成就の相現ずることありて、空中の聲を聞き、及び鈴の聲を聞く。復た光現ずることあり、光流星の如く壇の内に墜下し、聲は雷震の如くならん、即ち其の處に於て先きに置く所の賢瓶香水を用て閼伽を獻せよ、其の像或は動き或は復た光を放たん、當さに

(一)甲冑の印は多羅の印は獨股の如し、之を青蓮華の印と名く、此の印は二風の峯を少し開く。

(二)阿修羅云云二羽師子爪の印に作し互に上下すること師子の行く勢を作し阿里荼立を作す。

(三)阿里荼　丁字立なり。

(三)金剛童子云云　聲形は遍身に火焰あり、種々の瓔珞を以て莊嚴し右手に三股杵を持し斜に左手を擧げ施願の印を作す、脚は阿里荼立を作す。

知るべし即ち功効ありと。已後此の像前に對ひて念誦せば、意樂する所に隨ひて事皆な成就せん。

又た畫像の法を說かん。前の如く織斷ち截らざる白氎を取て、牛尿を用て洗ひ、復た香水を用て之を濯ひ、閑靜の處に於て或は佛前に對し、或は舍利塔の前、或は精室に於て、皮膠を用て彩色に和すべからず、筆(一)色盞は並に新しき者を須ふ、畫師は必ず澡浴清淨にして新淨衣を著し八齋戒を受くべし、口を閉ぢ氣を呑み、(二)氣を吐いて以て其の像を衝かしむる勿れ、亦た畫人と其の價直を論ずべからず、彼此和同して以て功力を賞せよ、其の像の獨身、海より涌出して大海中に住める身、吠瑠璃色の如し、身に六臂あり、臂膊(ひじ)脛(すね)しく亭(たて)て相貌充滿し、面に三目あり、其の目赤色にして首に寶冠を戴き、狗牙上さまに出づ、口は下の唇を咬へ眉を顰め威怒す、又た海中に於て一の寶山を畫け、像は左の足を以て寶山を踏ましめよ、山の上に妙蓮華あり、以て其の足を承く、右の足は海水の中に在て立て其の半膝を沒す、右の第一手には(三)底里賞俱金剛杵を持し擲勢を作す、右の第二手には(四)母娑(ボサラ)羅棒を持す、謂く棒の一頭鐵杵の形の如し、右の第三手には鉞斧を執る、左の第一手には棒を把り、左の第二手は擬ぎる勢の

(一) 色盞　繪の具を入るゝ器なり。

(二) 氣を吐云云　繪像に息の懸かざる用心なり。此等の經說に依りて覆面を用ゆべし。

(三) 底里云云　三股。

(四) 母娑羅棒　如意寶棒の如くにして、杵の棒の形は上の頭は獨股の如く下は杖頭の如し、緒あり、

如くし、(一)金剛拳に作り頭指を舒べ、左の第三手には劍を持す、一大蛇を以て身上に於て角絡結繫せり、又た一切の毒蛇を以て膊釧●臂釧●腰條(トウ)●瓔珞及び耳璫●繫髮と作し、又た一大蛇を以て腰に遶すこと三帀す、身背に圓光あり、火焰圍繞せり、火焰の外に於て其の雲電有りて以て相ひ輔翼す、應さに是の如く像を畫くべし、成心已て持して河岸或は迥樹の下或は天廟の中に於て、或は池の側に於て、若しは念誦せん時、或は伴あつても或は獨自にても一切みな得、常に乞食すべし、默然として人と與に語らず、乃し成就するに至れ、常に慈心を起し三時に諸罪を發露懺悔し、專ら自ら策勵し勇健の心を生じて怯弱すべからず、常に樂んで捨施し、每月須らく灌頂を受けて護身すべし、念誦の處に於て方隅界を結び、及び曼荼羅界を結せよ、香水を加持して身と衣服にそゝぎ、每日三時に聖者を迎請し、閼伽及び塗香●時華●燒香●飲食●燈燭を獻じ、此の像前に對して眞言を誦すること九十萬徧して先行の法を作せ、正しく持誦する時惡人有りて來て降難を作さば、忿怒を以て眞言を誦して相ひ顧視せば、彼れ即ち癲癇狂亂せん、若し彼の名を稱して念誦して之を視れば、其の人身肉片片に圯裂せん、或る時は死を致さん、世醫は救はず、須臾に右の脚の大指を以て極めて其の地を按して眞言を誦

(一) 金剛乃至舒べ　高本には注となす。

せば、即ち空中より火を雨らして熾然として燒かん、若し慈心を起して念誦せば、水の火を滅するが如く、即ち惺悟することを得、若し外賊境を侵さんに、彼の(一)魁帥の名を稱して念誦せば、彼の軍衆盡くみな疫病せん、或は彼迸り逃竄し或は枯死すべし、或は迷睡覺めず、或は癲癇・瘧病・或は偏身痛惱せん、彼れ若し順伏しなば慈心をもて念誦せよ、還て故の如くなることを得。又の法。殊勝の果を成就せんことを求めんと欲はば、(二)神通月白分に於て、海に趣く河側に就き、或は沙を印し泥を印して塔をつくれ、塔の中に(三)緣起の偈（即ち法身舍利偈なり）を置け、像を塔前に置き、念誦の行者水を以て麨に和して之を食し、遏迦木、柴廣、府潘隅、賸有を取て酥に搵して火に投げ護摩し、眞言を誦すること十萬徧し滿ち已んなば地動せん、則ち身を轉じて飛騰し忉利天の主と爲らん、若し地に徧して火炬あらば、則ち四天王の主と爲らん、若し大雲雨を注がば大地の所有の伏藏一時に踊出せん、若し金色の光徧ねく現せば、則ち轉依して菩薩と爲り、壽命一劫ならん、一切大威力ありて能く沮壞する者なからん、若し一切有情の身より火焰を出すを見ば、即ち一切三乘の佛法を證悟して、菩提心成就せん、若し像及び塔光を放てば則ち一切持明仙中に王となることを得、若し十方に遍して光焰あ

(一) 魁帥　軍中の大將たるも今は賊中の大將なり。

(二) 神通月　三長齋月是なり、正五人之れなり。

(三) 緣起の偈　諸法從緣生、如來說是因、此法隨緣滅、是大沙門說。

らば即ち普賢菩薩を見、所求の世間若しは出世間の一切の勝願悉くみな滿足せん、此の像成就の法は、小人にして智慧なく悲愍少き者、福資糧を積集することなき者、師長を敬せざる者、事務多き者、曼荼羅に入らず灌頂を受けざる者に應せず、是の如き等不平等なる者、事務多き者、曼荼羅に入らず灌頂を受けざる者に應せず、是の如き等の人念誦する時は、則ち顚狂し夭壽を招かん、金剛手菩薩誠言をもて是の如くの說を作したまふ。

又たの法。若し鄰國、境を侵し惡臣亂を作さば、此の像前に對ひ、人の(一)劫波羅を取て搗いて末となし、揑ねて彼の人の形を作り、塚間に於て或は池の側に於てすべし、像の面を以て北に向へ、持誦者は面を南に向へて坐し、三角の壇の中に於て像を安置し、語を斷じ乞食して忿怒にして無悲愍の心を作せ、右の手を以て金剛拳に作り、小指を舒べて彼の人形の心上を刺して、眞言を誦して間斷なければ、此の威力に由て彼の人をして大寒熱病を得せしめん、行者時に應じて壇中に於て忿怒王當さに身を現じて、大拇指節の如く、火聚融金の色の如く周圓して金剛火焰を流出すべし、右の手の頭指を以て期尅の勢を作せ、即ち迅速に彼の處に至りて告げて言く、某甲の持誦者、

我をして來て汝が命を斷せしむ、汝今命存せずと。彼れ是の語を聞いて即ち熱噂地囉(一)寐語を吐いて(二)即ち命盡きん。若し歸順して過を悔いなば、持誦者慈心を起すべし、速かに以て香水を加持して彼の頭上に灑がんに、即ち苦惱を離れ蘇息することを得ん。金剛手菩薩是の如くの說を作したまふ、(三)若し餘成就の人悉地を得るを見ば、彼に於て少忿怒を起して彼の人を視るに、彼の所有る成就の法悉くみな退失せん。

又たの法。惡人を驅逐し遠く去らしめんとならば、朗伽離藥を取り眞言を誦して、彼の名を稱へ加持すること七遍して、彼の人の門閫の下に埋めば、即ち自ら遠く逝く。

又たの法。白檀香を以て三指許りの金剛童子の像を刻み作れ、右手には獨股金剛杵を把り、左手施願の手にし、忿怒形にして下の唇を咬へ、金剛杵の形を用ひ以て瓔珞莊嚴とす、毗梨勒木を以て合を作て之を盛り、蘇合●白檀香を燒いて供養し、合前に對し念誦三十萬徧すれば、即ち一千種の大事を成就す、時日宿直を擇ばず、齋戒を限らざれば、不成就の人も亦た成就するを得。若し人厄難あらんに、彼の人名を稱して念誦すれば、則ち解脫することを得。

又たの法。菜を食し或は乳を飲み或は乞食し(四)念誦し、應さに禁戒を持して一ら比丘

(一) 寐語　和本には夢に作る。
(二) 即　高本は今の字に作る。
(三) 若し乃至退失せん　和本此の文を缺く。
(四) 念誦し　或はなし。

の如くして眞言三十萬遍を誦すべし、所爲の所作は此の像の前に對せよ、前の如く縛撲するに問ふ所みな應驗を得ん。(一)

又た雄黃の法。前の畫像法の如く、雄黃を取て熟銅器の中に置き、持誦者は五淨を取て之を飲め、身即ち淸淨なり、像を舍利塔の前に置き、根本の眞言を用て其の精舍を淨め、方隅界を結び身を護し、(二)前の眷屬の眞言を用て塗香●燒香●時華●飲食●燈燭を加持し以て供養を伸べ、或は黑月八日或は黑月十四日に、四箇の菩提葉を用て雄黃の器を承け、三箇の菩提葉を用て之を覆へ、菩提葉なくんば夜合葉も亦た得。念誦して乃し三相現ずるに至れ、煖煙光あり、若し煖相現せば取て足に塗れ即ち地より離すること一尺、日に行くこと千里ならん、若し煙相現せば安怛但那を得、若し光相現せば則ち虛空に飛騰して、一切能く沮壞するものなからん、若し路中に於て逢ふ所の、象●馬車乘自ら路を開いて之を避けん。行者作法の時應さに黃衣を着すべし、及び次び黃神線を角絡して、袈裟を披るが如くせよ、若し安膳那成就を求めば、靑泥を以て衣服を染めて著、或は赤衣を服せよ、神線も亦た是の如し、金剛手菩薩是の如くの說を作す、我今曼荼羅を說かん、當さに(三)五月九日を用て黑分に於て先づ應さに念誦せんと欲する

(一) 此の次に五十八、五十九、六十の三件なし。
(二) 前の云云　塗香等の呪支分を眷屬と名く、童子の人の眷屬にはあらず。
(三) 五　高本は正に作る。

上巻總計六十二法あり。

者をして、慇重に師を供養せしむべし、然して後吉祥木を取れ、長け十二指、眞言を誦して加持すること一千八徧して、念誦せんと欲する者のために護摩を作せ、護摩を作し已て方さに曼荼羅に引入し灌頂を受けよ、其の師曾て先行を作す者を以て應さに曼荼羅を畫せしむべし、五色の粉を用て四門を撚成し、門の外に標を畫いて曼荼羅を分ちて三分となせ、三分中半分を取て門とせよ、上門に當て香粉を以て佛世尊を畫き蓮華座に坐す、右邊に觀自在菩薩を畫き、左邊に金剛手菩薩を畫き蓮華上に住す、下門に當て聖迦抳忿怒金剛童子を畫け、蓮華上に住す、徧身に光焰あり、四角に三股金剛杵を畫くべし、蛇を以て杵を纏へ、並に光焰あり、門門に賢缾を安せよ、壇の中心に一缾を置いて香水を滿ち盛り、細繒帛を以て缾の頸に繫け、各の眞言を以て加持すること一百八徧して、金剛水を變成して以用て弟子の頂に灌げ、此の漫荼羅の中に於て此の灌頂を得已りぬれば、一切の悉地みな現前することを得、此れより已後纔かに契を結んで念誦すれば、頓に無量の功德を集め、求むる所みな成就することを得ん。已に漫荼羅儀軌品を說き竟んぬ。

音釋

抳女夷巨偃の切鍵戶鑰なり股公戶の切抓五忽の切樹枝なきなり膊音は博膊丑容の切、圓直なり。條刀の切、絲なり。狂病なり。坨符鄙の切、毀なり。寬七亂の切、匿なり。變尺小の切、乾したる繩なり。

國譯聖迦抳忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經卷上終

國譯聖迦抳忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經卷中

唐三藏沙門大廣智不空　譯す

我今復た先行を作す法を說かん。舍利塔の前に於て本尊の像を安し、三月十五日に於て壇を塗り、力に隨ひて供養し、沈香を取て酥●蜜●酪に搵し、晝夜火中に擲ちて護摩し、一たび眞言を誦し一たび爐中に擲げよ、若し道場の中の旛華搖動せば、持誦者當さに知るべし効驗ありと。即ち晨朝に於て三寶を供養すること七日せば、財寶の豊饒なることを獲得し、求むる所の榮官みな意に稱ふことを得、及び金銀●珠王●七寶等を得ん。又た空中より火を出さしめんと欲せば、(一)空を視望して、眞言を誦すること二十遍して意に念すれば、即ち空中より火出づ。

又たの法。天より雨をふらさしめんと欲せば、虛空を觀じて眞言を誦すること二十一遍せば即ち甘雨を降す、雨水を取て佛に獻せよ、已後の所作みな成就することを得。

(一)空を視望し　和本高本には空中を視るに作る。

又たの法。空中より華を雨らさんと欲せば、虛空を觀じて眞言を誦すること二十一徧せば、即ち虛空中より種種の華を雨さん。

又た、若しは男若しは女をして歡喜せしめんと欲せば、安息香を以て丸と作し、眞言を誦すること二十一徧して、一たび彼の名を稱して火中投ぐれば、即ち歡喜を得ん。

又たの法。菖蒲を加持すると二十一遍して、口中に含んで人と共に論議せば、即ちみな勝つことを得ん。

又た若し毗那夜迦相ひ逼惱して障難を作さば、纔かに眞言を憶念せよ、一切みな消散することを得ん、若し常に念誦して間あらず、意を彼に注げば、障者並に親族眷屬皆な自ら滅壞す。

又たの法。黑月一日より起首め、此の像前に對ひて每日三時に眞言を念誦し、時別に一千八十遍して、安息香丸を燒いて護摩し月(一)盡に至らば、所求みな得ん。

又た像の前に對して蓮華を以て酥●蜜●酪に搵し、眞言を誦すること一千遍して、一たび火中に擲げて護摩すれば、即ち伏藏を獲。

又た衣服を求めば、海に趣く河に於て水に入り、立ちて胸に至り、藥ある華を取て眞

(一)盡　又は末に作る。

言を誦すること一千八徧、一徧するに一たび水中に擲ぐれば、即ち衣裳十副を得ん。

又たの法。迦膩摩華を酥●密●酪に搵して護摩し、眞言を誦すること一千八徧して、一徧するに一たび火中に投ぐれば、一切の有情みな歡喜順伏するを得ん。

又たの法。像の前に對して蘇摩那華を取り酥●蜜●酪に搵して護摩し、七日の中に於て日に三時、時別に眞言一千八徧を誦して、一徧ごとに一たび火中に擲ぐれば、一切の人恭敬して邑主となることを得ん。

又たの法。設咄嚕を摧伏せんことを得んと欲せば、人骨を取りて以て槥を爲り、彼の人の形を作れ、或は畫き或は揑ねて加持すること一百八徧して、心上に釘てば、即ち摧伏することを得ん。

又たの法。彼の設咄嚕を摧き(一)麽囉せしめんと欲せば、屍を燒きたる殘木を取りて槥を作り、紫檀香を磨し以て槥の上に塗り、屍林中の帛を取て槥に纏し、彼の設咄嚕の如前の形の頭上に釘てば、彼の設咄嚕即ち(二)母駄す。我今復た畫像の法を說かん、或は白氈に於て或は素の上或は板の上に於てし皮膠を用ふべからず、畫師應さに潔淨にして八戒を受くべし、聖金剛童子の像を畫いて忿怒形に作り、虎皮を裙と爲し、右の手に

(一) 麽囉せしめん　死せしむるなり、麽囉此には殺者と云ふ、殺の故に死の義か。
(二) 母駄　死するなり。

金剛杵を把り、左の手は施願に作つて此の像に對ひ、舍利塔の前に於て先の行法を作し已て、香華を以て此の像を供養し、此の像の前に於て應さに方爐を作り增益の法を作すべし、沈香木の長さ大指節可なるを取て酥合油に搵し、七日目ごとに三時、每時眞言を誦すること一百八徧し、一徧ごとに一たび火中に擲げ護摩して、七日に滿ち已れば、持明仙安怛但那を得、足地を離れて行くこと疾きこと風の如し、聞く所永く忘れず。

又た藥丸を成就せんと欲せば、羯扼迦羅華の藥、龍華の藥、白檀香を取り、此等を細かに擣いて熟く研り、又象の脂を取れ、其の象は年廿、額上に自ら文あり、即ち流脂ありて異種(一)極香　此の脂を取て上み件の藥に和して丸と爲す、藥に和する時は鬼宿の日に取て、童女をして沐浴し新淨衣を著せしめ、香藥を擣き篩ひ、及び丸めて七丸と作し、丸うして梧桐の子の如く陰乾にせよ、藥を丸むるの法　大指・頭指を以て藥を撚す、其の指に蘇蠟なる(二)土に塗り、又た竹筒を取て蠟の上に貼し意に指文を藥上に印するこさあらんさは欲せざれども、若し指文有らば藥に靈驗なきなり。其の藥丸は生沈香木を取て合子を作り盛りて像前に對し、結淨して三時に念誦し、乃し合子中に(三)佉吒佉吒の聲を作すに至れ、即ち一丸藥を取て本尊に供養し、一丸を師に奉り、一丸を先成就の者に供養し、又た一丸を取りて助伴に分與し、餘れる三丸は熟

(一) 極香　和本には香氣に作る。
(二) 上　高本になし。
(三) 佉吒佉吒云云　未だ詳かならず。

金銀の薄を以て重重に之を裹み、口中に於て含めば即ち安怛但那を得、影を滅し形を藏す。

又た彼の敵を破せんと欲せば、華を取りて死人の身上に置き、然して後に屍を燒ける殘木を收め取り、火に然いて護摩すること七日し、月の黑分を取り、或は中夜或は日中、時ごとに眞言を誦すること一百八徧して、三角の爐の前に對ひ、面を南に向へて坐し、彼の將帥の名を稱し、前の華を用て、眞言を以て加持すること一徧して一たび火中に擲ぐれば、彼の軍即ち破す。

又た淨行の婆羅門をして歡喜せしめんと欲せば、俱嬾拏迦華を取り、常に彼の人の名を稱し、七日の內護摩を作し、眞言を誦して華を火中に投ずれば、即ち歡喜することを得。(一)

又たの法。舍利塔の前に於て牛黃を取り、加持すること一百八徧して、用て額に點すれば、行履する所の處、一切見る者みな敬愛して歡喜す。

又たの法。(二)骨屢草の嬾苗を取り酥に搵して護摩し、眞言を誦すること一千八徧して、一徧ごとに一たび火中に擲ぐれば、即ち一切の災難悉くみな殄滅し、及び壽命を增す

(一) 此の間に二件を脫す。

(二) 骨屢草 烏瓜の若き苗なり。

ることを得。

又たの法。先に已に降伏せし者、彼の苦を息めんと欲はば、三時に乳を以て護摩すれば、彼の苦則ち消除することを得。

又たの法。聞持不忘を求めんと欲せば、日に萬言を誦せよ、聖迦抳金剛童子の像前に對ひて種種に供養し、銀器の中に於て酥を盛れ、酪を取るの法は下に當さに明すが如し、念誦して乃し三相現ずるに至れば、みな聞持不忘を得。

又たの法。雄黃成就延壽を得んと欲せば、持誦の人、乳を飲み大麥を食し、眞言を誦すること十萬徧して、摩醯首羅の像前に對ひ、雄黃を取て熟銅器の中に盛り、七箇の菩提樹葉を以て前の如く上下に覆蓋し、兼ねて(一)八方天に施し、粥を供養し誠心に念誦せよ、或は伴あるも伴なきにも、自身を護し甲冑の印を結んで念誦すべし、乃し三相現ずるに至れ、若し光相あらば壽命萬歲ならん。

又たの法。敬重を得んと欲せば、鐵を以て輪或は三戟叉を作り、舍利塔の前に於て金剛手菩薩の像を安し、廣大に供養し壇中に置き、右の手を以て上に按し、間斷することなく念誦して乃し(二)質質致致の聲あるに至らば、當さに知るべし成就すと。手に叉

(一) 八方天 神供なり。

(二) 質質致致 未だ詳かならず。

或は輪を把れば、一切の天人即ちみな彼の人に順伏し敬重して佛の如くして異なることなし。又た河の兩岸の土を取りて頭指の形に揑り作り、壇中に安し金剛杵を以て上に按し、念誦して乃し金剛杵及び指、身に來り近づくに至れ、當さに知るべし成じ已んぬと。後手に此の指を把り、天龍八部若しは男若しは女及び畜生禽獸等を鈎召せんと欲し、眞言句の中に彼等の名を稱せば、迅疾なること風の如くにして、即ち行者の所に至て使令し、所作みな順伏せんことを得ん。

又たの法。若し牛黃延壽法を成就せんには、金剛童子の像前に對ひて壇を塗りて供養し、熟銅器の中に於て牛黃を置き、念誦して乃し光出づるに至りて手に把らば、即ち壽命五千年ならん。(朱)上中下等知るべし。

又たの法。七箇の蚯蚓の糞泥を取て加持して圓壇に塗り、圓壇の上に於て坐して、念誦して乃し空中より天妙藥下り來ることあるに至れ、幾かに此の藥を執るに、身金剛手菩薩の如くならん。

又たの法。蓮華法を成就せんと欲せば、紫檀木を取り雕りて開敷蓮華を作り、舍利塔の像前に於て念誦し、乃し光現ずるに至れ、則ち變じて持明仙となることを得、最も尊貴たり、若し持明仙の居する所の住洞の處に所至らば、一切の天龍八部みな隨順することを得ん。

又たの法。毒蟲に嚙まれ、鬼魅の病等、或は瘧或は毒藥に中てらるれば、水を取て加持すること七徧して彼に灑ぎ、或は飲めば即ち除愈することを得ん。

又たの法。縛撲して、事を問ふことを得んと欲せば、一日一夜食せずして念誦せよ、其の法即ち成ず、或は童子或は童女、澡浴して新淨の衣を著せしめ、(一)泥(トシヨ)圓壇を塗拭して坐せしめ、縛して過去●未來の事を問ふに、みな悉く知ることを得、持誦者當さに須らく三寶を淨信し敬重すべし、金剛手菩薩一切の有情を愍念して安樂利益ならしめんと欲したまふが故に此の經を說く、蘇悉地大明王敎中の第六品一品は是れ此の法なり、南天竺の國境苾芻訶哩拔摩、此の法の中に於て持誦し大効驗を得て成就す、此の法は設令ひ四重五無間の罪を犯して現生に成就の分なき者も、曼荼羅に入り灌頂を受け已て後に念誦するに由て、現生には則ち一切成就することを得、何に況んや餘の淨住具戒の行者をや。

又たの法。牛黃の末を取て加持すること一千八徧して用て額に點すれば、一切の人見

(一)泥　異本にな し。

てみな歡喜す、若し軍陣にあらば刀箭身に著かじ。

又たの法。晨朝に水一掬を取て加持すること七徧して之を飲め、飲食求めざるに自ら至らん。

又たの法。左手に袈裟の角を把り、加持すること二十一徧して人と共に論議せば、みな悉く勝つことを得、辭辯無礙ならん。

又たの法。賊境を經過せんに、一心に念誦すれば即ち劫奪し傷害せられじ。

又たの法。佉陀羅木の灰を取て彼の持誦の人に散ずれば、彼れ即ち持誦するも効なし、若し解せんと欲する時は、心に眞言を誦すること一徧せば即ち解せん。

又たの法。婦人產し難きには、酥一兩を取て加持すること二十一徧して服せしめば、即ち產し易きことを得、諸苦を受けず。

又たの法。惡人をして歡喜せしめんと欲せば、蠟を取て彼の人の形を揑り作り、脞の上に安して加持すること一千八徧せば、暴惡忿怒の人みな敬順し、歡喜することを得ん。

又たの法。本尊の像前に對ひて白華一千八枚を獻せば、即ち一切恭敬し順伏せん。

又たの法。持誦者乳を飲み或は大麥を食し、蚯蚓の糞を取りて和修吉龍王の像を揑り作り、持誦者彼の王の上に坐して念誦せよ、若し動搖せば當さに知るべし法成就すと。龍王毎日十二人の食を供し、亦た過去未來の事を說かん。

又たの法。月の一日より乞食して以て自ら存濟し、白月十四日に至て一夜此の像の前に對ひ、廣く供養を設け念誦して乃し像動するに至れ、即ち安怛但那を得、安怛但那成就の中に最も尊上たり、心に百味の飲食を念ずれば、則ち壽五千年を得。

又たの法。持誦者恒河に入り水に立ちて胸に至り、眞言十萬徧を誦して然して後に、恒河の洲の中に於て沙塔を印し加持し、即ち本尊の像を將て河岸の側に置き、酥・蜜・酪・を以て相ひ和して護摩せよ、一切の龍即ち來りて降伏し、處分する所の事みな成就することを得ん。

又たの法。船に乘じて海に入り、眞言十萬徧を誦せば、海龍王即ち來りて身を現じ、所求みな得、海龍王行者に摩尼寶珠を獻せん、受け已て便ち持明仙となりて、即ち虛空に飛騰せん、一切持明仙の中、最尊たり。

又たの法。(一)金銅の匠をして八戒を受けしめ、熟銅を取て賢絣を作り、中に於て少分

(一)金銅の匠　冶工なり。

の穀麥等の一切の種子、及び諸の靈藥、及び金●輿●七寶等の少分を置き、曼荼羅を塗拭し毎日三時に供養し、緋を壇中に置き、(一)神通月に於て月の一日を取り、起首めて念誦し十五日に至りて、間斷なく念誦して緋を加持せば、其の緋光焰現ずることあらん、則ち手に閼伽を持して聖衆に供養し、敬謝して即ち緋を取り淨處に置き、所須の物を手に內れて緋中に入れよ、所須一切の財寶●車乘●衣服●世間受用の玩具、意求する所に隨ひてみな悉く獲得せん、緋の中より出す所の得物を先づ本尊に供養せよ、其の緋は須らく眞言を誦して加持防護すべし、爾らざれば恐くは諸魔來りて竊かに緋を盜み將て去らん(二)應さに知るべし。

又たの法。海に入る河に於て水に立ちて胸に至り、眞言十萬徧を誦して、然して後ち塔或は泥或は沙を印し、即ち像の前に於て廣く供養を設け、水精を用て如意寶を作り、或は泥を用て作り、右の掌中に安し結跏趺坐して念誦して、乃し光を放つに至れ、即ち如意寶を成じ、持明仙となることを得ん。

又たの法。舍利塔の前に於て像を安し、神通月の十五日に於て、像前にして法に依て廣く供養し燈を燃し、右手に寶幢を持し、幢の上に帛繒を繫けて垂れ下し、念誦して乃

(一) 神通月　正●五●九月。

(二) 應さに云云　和本に依て加ふ。

し光を放つに至れ、即ち如意幢成就することを得て、持明仙とならん。

又たの法。神通月十五日に於て、像の前に對ひて廣く供養し、般若波羅蜜の經夾を取て、香泥を以て夾を塗り、華鬘を以て纏ひ供養し、左手に置いて結跏趺坐して念誦し、乃し光を放つに至れ、則ち一切の佛法に通達することを得、無礙解の辯ありて持明仙となり、徧ねく六趣に遊んで廣く無邊の有情を利し、無上菩提に至らん。

又たの法。乳を飲み大麥を食し、大海の岸獨樹の下に於て七日三時、時別に眞言を誦すること一(一)千徧せば、大海の中の所有る珍寶悉くみな踊出せん、意を恣にして之を取れ。

又たの法。菉豆を食し、山上に於て眞言を誦すること一千八徧せば、則ち山中の一切の金を見ん、意を恣にして之を取れ。

又たの法。酥を加持すること一千八徧して、子息なき女人に與へて喫せしめば、即ち男女あらん。

又たの法。醍醐を取て加持すること一百八徧して、身に塗て火に入るに燒かれず、水に入るに溺れじ、若し常に念誦せば一切の毒藥に中られじ。

(一) 千の下　八の字脫するか。

又たの法。念誦者應さに先行の法を作すべし、黒月八日●十四日に於て廣大に本尊を供養し、即ち僧を(一)請し、衆僧を請して供養し、雄黄を以て道場の中の地上に於て百葉の蓮華を畫き、中に坐して念誦し乃し地裂けて蓮華を踊出するに至れ、蓮華葉の上に於て十六の持明仙ありて現じ、即ち共に彼の仙に圍繞せられ、虚空に飛騰せん、持誦者成就し已て、但し所見の人、彼の人も亦た飛騰することを得。或は人あり、若し持誦成就の者を遇見せば、亦た虚空に飛騰することを得、即ち此の蓮華變じて寶莊嚴の宮殿と成りて、壽命中劫ならん、若し命終せば淨妙の佛國に往生することを得ん。

又たの法。水を加持すること一千八徧して用て枯樹に㴱灌がば、即ち枝葉●華果を生せん。又た枯涸せる河の中に於て念誦せば、水則ち盈滿せん。又た河水に漂溺せられんに、設令ひ浮ぶことを解すれども、困乏して力なからんに、眞言を念誦せば則ち淺處を得ん。(二)

又たの法。僧大衆の歡喜を得んと願せば、像前に於て華一千八枚を獻じ、一たび眞言を誦して一たび獻せば則ち得。又たの法は安息香の丸を取り用て護摩せば金千兩を得ん。

(一) 請し　和本になし。

(二) 此の間に三件を脱す。

又たの法。像の前に對ひて、薫陸香を以て護摩すること七夜、夜別に眞言を誦すること一千八徧し、一徧に一たび火中に擲ぐれば、即ち伏藏を得ん。

又たの法。怨家の歡喜を得んと欲せば、像の前に對し白芥子を以て護摩すること七日、日に三時、時別に眞言一千八徧を誦し、一徧に一たび火中に擲ぐれば、即ち一切の怨家降伏せん。

又たの法。油を加持すること一千八徧して、刀箭に塗り瘡を傷らば即ち差えん。

又たの法。土塊を取て加持すること七徧して水中に擲ぐれば、水中の(一)磨竭魚及び龜鼈龜鼈、みな口噤んで人を傷ること能はず。

又たの法。此の聖迦抳忿怒金剛童子の眞言を以て、一切の疾病を加持せば、みな除愈することを得。

又たの法。徧身疼痛し或は寒熱病にて、若しくは一日●二日●三日或は恒常に患へんに、油麻油を加持すること一百八徧或は二十一徧して、用て身に塗らば即ち除愈することを得。

又たの法。鬼瘧、毗舍遮瘧、一部多諸鬼魅の瘧に、眞言を以て白縷を加持して、索を結

(一) 磨竭　此には大魚といふ、鯨なり。

んで之を帶すれば即ち差えん。

又たの法。沈香木を取て本尊像前に對ひて、犢子の糞を取て酥●蜜●酪に和し、護摩して眞言を誦すること七千徧すれば、則ち一黃牛來ることあらん。又た犢子の糞を取て酥蜜酪に和し、眞言を誦すること二萬徧して前の如く護摩すれば、其の牛必ず來る、其の乳を取て千人に供することを得。

又た(一)滿賢大將の前に對ひて蘇摩那華を取り、日に燒くこと八千、乃至六箇月に滿し已れば、即ち金錢千貫を得。

又たの法。聖金剛童子の像を供養し、月の一日より十五日に至て、每日に漸く供養物を加し、月の一日より僧次に依て、初め七僧を請して供養し、日に一僧を加へて十五日に至り滿し已れ、其の像語を出して告言ん、汝今成就すと。此れより已後、像に對ひて念誦するに、所求みな成就することを得ん。

又たの法。身上の疾病を除き、福德をして增長せしめんと欲せば、童女をして澡浴し新淨の衣を著せしめて、右にて五色線を合し、加持すること一百八徧して右臂の上に繫くれば、即ち疾病消除し福德增長す。又た海に趣く河水の中に於て、黑油麻を取て三

(一)滿賢大將 毗沙門八兄弟の內なり。

指の頭を以て撮て、眞言を誦すること一徧して一たびごとに一撮を水中に擲げ、八千徧を滿すれば、即ち穀麥豐饒なることを得。

又た每日香氣ある華一百八枚を取て、眞言を誦して(一)加持すること一徧して一たび本尊に獻じ、滿し已らば則ち大福德を獲ん。

又たの法。百合の莖を取て火に燃き、菖蒲一千八段を取て酥に搵して護摩し、一たび眞言を誦して一たび火中に擲げ、灰を取て額の上に於て點ずれば、即ち安怛但那を得。如し一徧に成せずんば第二●第三に至れ、必ず成就することを得。

又た菩提樹の下(夜合の樹も亦た得)に於て聖者の像を供養し、牛膝草を取て酥●蜜●酪に搵し護摩して、眞言を誦すること一千八徧し、一たび眞言を稱して一たび火中に擲ぐれば、即ち象●馬●驢●騾●牛●水牛等、自ら來て隨順し驅使することを得。

又たの法。春三月の黑分に八戒を受け、舍利塔の前に於て壇を塗り、香華を供養し日日に僧次に僧を齋に請し、(二)瓦缾の底の黑からざる者四枚を取りて水を滿ち盛り、(三)種種の香、種種の藥の少分を持して缾中に置き、一一の缾は眞言を誦して加持すること一千八遍、四月黑分八日の早朝、烏の未だ鳴かざる時に至れ、男女をして沐浴し本

(一)加持すること 或はなきを宜しするか。

(二)瓦缾云云 新瓶を用ゆるなり、古瓶は底黑きが故に用に堪へず。

(三)種々の香 五種香五藥。

尊の像の前に對せしめ、屍林の屍を燒く火及び殘木を取り、茴香華を取て護摩し、眞言十萬徧を誦して、一たび眞言を誦し一たび火中に擲ぐれば、即ち家中の飲食窮盡することなきことを得、廣く惠施すべし。

又たの法。若し囚禁枷鎖を被らんに、幾かに眞言を誦すれば即ち枷鎖解脫することを得。

又た神通月に於て根本像の前に對し、乳を飲み大麥を食し、十三日より十五日に至て、三日間斷せず念誦すれば、聖者即ち來り燈燭增盛し、地動し像動して聲を出し、行者に告げて言はん、汝今成就すと。此れより已後像前に對して念誦すれば、所求みな成就することを得。

又たの法。舍利ある塔の前に於て眞言十萬徧を誦するに、作す所の重罪惡道に墮すべきも、みな消滅することを得。

又たの法。每日烏未だ鳴かざる時、胡椒七顆を取て、加持すること二十一徧して自らの之を呑む、即ち開持を得て日に一百五十(二)徧を誦し、徧別に一たび火中に擲ぐれば、求むる所の榮官●財產●聰慧●增壽悉くみな獲得す。

(一)之を含む　食ふに作る。
(二)徧　已下和本に缺く。

又たの法。恒河の兩岸に於て、人間の帛を擣く杵の聲を遠かる處にして、土を取りて方七肘の壇を作り、壇上に於て千葉の蓮華を畫いて、蓮華の上に於て(一)如來の一碟手凡人の一肘量を以て五種の金(金●銀●銅●鐵●錫。)を取りて相和し、鎖して一輪となし華の上に置き、種種の華を用て供養し、壇の四邊に酥燈七盞を然し、四方に四缾を置き香水を盛り、缾の中に七寶少し許りを置き、缾の上に(二)俱緣菓を安し、薰陸香●沈香●(三)室利吠●瑟吒迦香●安息香を燒くべし、四方天に食を施すべし、東方に粳米酪飯を施し、南方に水の和せる粳米飯を施し、西方に粳米●砂糖●飯を施し、北方に乳粳米粥を施し、此の壇の前に對ひて、(四)波羅奢木を以て火を然き、牛膝草一千段を取て酥に搵して護摩し、先づ眞言を誦して加持すること七遍して、然して後ち一徧に一たび火中に牛膝を擲ちて滿し已れば、其の輪光を放たん、手に此の輪を持すれば即ち虛空に飛騰することを得、一切の持明仙見て皆悉く順伏し、承事すること佛の如し。

又た白月十五日月蝕の時に於て、行者八戒を受け、舍利塔の前に對して一日一夜食せず、瞿摩夷の未だ地に墮ちざる者を取て、一の圓壇を塗り、大小一牛皮許りの大さの如し、黃の乳牛の犢子と母と同色の者を取り、童女をして乳を搾り酪と(五)成し、酥を抨し

(一)如來云云　佛の一肘は二尺三寸半なり、集經第十の十四丁の文の如し。
(二)俱緣菓　一說に吉祥菓にして桃に似たる菓。
(三)室利云云　松脂なり。
(四)波羅奢　胡桃。
(五)成　原本になし或は脫するか。

酥七兩を取て金銀の器の中に置き、左の手を以て酥を持し、右の手の無名指を以て酥を攪せて、眞言を誦して加持し、若し煖ならば之を飲め、聞持不忘を得て日に萬言を誦せんに、一誦已後身を終るまで廢忘せじ、若し煙相を得ば一切の人見る者愛敬し尊重せん、光相現ぜば安怛但那成就す（酥を分けて供養し、及び自食する前法の中の如し。）

又たの法。若し城邑聚落に於て、(一)疾病流行することあらんに、中夜に於て一の小壇を塗り、(二)白食を供養し、乳木の柴を取りて火に燃き、酥を取て護摩すること一千八、一たび誦する別に一たび國王の名を稱し、酥を火中に投ずれば、疫病國界より遠離す。

又たの法、藥叉を降伏せんと欲せば、尼拘陀樹木を取て長け十指に截り、酥・蜜・酪に揾し護摩し、眞言を誦すること一千八徧、一たび誦して一たび火中に擲ぐれば、即ち降伏することを得。

又たの法。癲癇鬼、吸人精氣病鬼を伏することを得んと欲せば、黑羊の毛を取りて護摩し、眞言を誦すること一千八徧、一徧して一撮を取て火中に擲ぐれば、彼の鬼伏し已て病者除愈す。

又たの法。摩醯首羅を降伏せんと欲せば、安息香を取て一千八丸に作し、酥を揾し護

(一) 疾 疫の字か。
(二) 白食 三白食か。

摩し、眞言を誦すること一千八徧、一徧して一たび火中に擲ぐれば、一切の摩醯首羅所有る使者悉くみな降伏し駈使し、能く一切の事を成辦す。

又たの法。雄黃一兩を取て、若し買はば彼に隨ひて價を索め、口に稱ふて錢を與へよ、婆羅門皂夾木（亦は蜜相木と云ふ）の柴を用て火を燃き、雄黃を燒いて火色の如くし已て、却て收め取り熱銅器の中に置き、酥を以て雄黃の上に澆げ、其の酥黃牛の母子同色の者を取て、童女をして乳を搾り酪と成し、酥拜を抨して酥・蜜・酪を取り、各別に器中に盛り、本尊に供養し、雄黃を收め取りて熟銅の合子の中に盛り、月蝕の時を候ふて十三日より十五日に至りて三日斷食し、舍利塔の前に對し面を北に向へて坐して、菩提葉七枚を取て四枚を合の下に敷き、三枚を合の上に覆せて、間斷なく念誦せよ、若し暖相現ぜば取て額に點せよ、一切の人見て悉くみな歡喜せん、若し烟相現ぜば則ち安怛但那成就す、若し光相現ぜば則ち虛空に飛騰せん、是の如く前に依て雌黃・牛黃・安膳那法を成就せんことを求めばみな得。唯だ牛黃の法少なき此に異なり。牛黃の法は白月の十五日を取て、荷葉の中に於て牛黃を裹み、二手の中に安し合掌して無間に念誦し、加持して乃し三相現ずるに至れ、護る所の果報前の如くならん。

(一)天の雨水等雨水を取て閼伽等に用ふるは所所多く清潔なるが故なり。

(二)設令の上、百十四の一段を脱す、今は百十六に當るか。

又たの法。五金を以て蓮華を作り、薝金香●牛黄●龍腦香を取て研いで末と作し、(一)天の雨水を取りて和して七丸となし、舍利塔の前に置き像を安して念誦し、右の手を以て藥を按し、乃し光を放つに至れ、則ち虛空に飛騰して持明仙となり、壽命一萬歲ならん。若し眞言を以て頭冠●臂釧●腰條を加持するに、みな成就すること前の如し。(二)設令ひ破戒●壞行の所爲所作も尙ほ成就することを得、何に況んや戒行を具せん者をや。又た犢子の瞿摩夷を取て護摩すること七日、毎夜一時に眞言一千八徧を誦し、一徧ごとに瞿摩夷少し計りを取て一たび火中に擲ぐれば、牛一百頭を得。

又たの法。河中に入て立ち水胸に至り、蓮華を取て檀香に搵し(其の檀香摩つて泥の如し。)眞言を誦すること百千徧、一徧ごとに一たび水中に擲ぐれば、得る所の伏藏積んで蓮華の如し。

又たの法。吉祥木一千八段を取て、酥に搵して護摩すること三日、日に三時、毎時眞言一千八徧を誦して、一遍ごとに一たび火中に擲ぐれば、即ち財寶豐饒なることを得。

又たの法。烏油麻稻穀華を取て相ひ和し、像の前に對して護摩すること三日、日に三時、時別に眞言一千八徧を誦し、徧別に一たび火中に擲ぐれば、即ち家中の飲食盡くることなきことを得。

又た一切の龍王を降伏することを得んと欲せば、種種の華を取りて護摩すること三日、日に三時、時別に眞言を誦すること一千八徧、一徧ごとに一たび火中に擲くれば、即ち一切の龍降伏することを得。

又たの法。藥叉を降伏することを得んと欲せば、像の前に對して安息香の丸を取て、護摩すること七日、日に三時、時別に眞言を誦すること一千八徧、一徧ごとに一たび火中に擲ぐれば、即ち一切の藥叉降伏することを得。

又たの法。藥叉女を召せんと欲せば、無憂木を取て前の藥叉の護摩法に準せば、即ち藥叉女來りて恭敬し承事することを得、所須の一切の衣服●飲食及び諸の財寶、意に隨ひて供給す。

又たの法。根本の像前に對して沈香木を取りて酥に搵し、護摩すること三七日、日に三時、時ごとに一千八徧し、一たび眞言を誦して一たび火中に擲ぐれば、即ち一切の諸天歡喜し助護することを得、災難消滅し福德增長す。

又たの法。若し囚禁を被らば、夜時澡浴して新淨の衣服を著し、眞言を誦すること一千八徧せよ、囚禁者即ち解脫することを得。

又たの法。若し人瞋怒して相ひ損害せんと欲することを被らば、油麻の滓及び糠油麻を取りて護摩し、眞言を誦すること一千八徧し、一徧ごとに一たび火中に擲ぐれば、即ち彼の人歡喜することを得。

又たの法。眞言を誦して菖蒲を加持すること一千八徧し、臂の上に繫くれば、佗人の邊に於て言を出すに、所求みな意に稱ふことを得。

又たの法。常に念誦すれば諸の怨敵に於て勝つことを得て、侵陵せられず。

又たの法。旗旛を取て眞言を以て(一)加持すること一百八徧し、香華並に酪七椀を以て旗旛に供養し、及び閼伽を獻じ、即ち此の旗を持して軍の前に引かば、彼の軍旗旛を見て自ら破れん。

又たの法。若し城邑を奪はれんに、像の前に對して黃色の華を取て七日護摩すべし、日日像前に於て眞言を誦すること一千八徧し、一徧ごとに一たび火中に擲ぐれば、先に城邑を彼の敵に奪はるゝことを被むることあれども、即ちみな卻け得。

又たの法。先行の法を作すべし、白芥子を取て七日七夜護摩すれば、一月の内に其の宅中に寶を雨らさん。

(一)加持 原本になし、脫するに非るか。

又たの法。像前に對して香華を供養し、持誦者乳を飲み大麥を食し、蓮華莖を取て酥に搵し護摩して、眞言を誦すること一千八徧し、一徧ごとに一たび火中に擲ぐれば、金千兩を得。

又たの法。像前に對して赤蓮華十萬莖を取りて護摩し、眞言を誦すること十萬徧し、一徧ごとに一たび火中に擲ぐれば、心に願求する所悉くみな之を得。

又たの法。官者を欲求せば、白(一)蓮華一萬枚を取て酥に搵し護摩し、眞言を誦すること一萬徧すれば、即ち官祿高く遷ることを得。

又た白檀香を取て油に搵し護摩し、眞言を誦すること十萬徧し、一徧ごとに一たび火中に擲ぐれば、即ち金錢一千枚を獲。

又たの法。沈水香を取て護摩し、眞言を誦すること十萬徧し、一徧ごとに一たび火中に擲ぐれば、日に萬言を誦するに、耳に曾て聞く所の經典、乃至身を終るまで忘れず。

又たの法。黃の乳牛、犢子の母と同色なる者を取て、乳を搾りて酪と成し酥を抨し、金器の中に於て盛り、眞言を誦して加持すること十萬徧して即ち喫へば、聞持不忘を得、日に萬言を誦す。

(一)蓮 或はいふ無きか。

又たの法。若棟子を取て香油に揾し護摩し、眞言を誦すること十萬徧すれば、一切の囚閉禁縛を被むるの人、みな解脫することを得。

又たの法。若し怨家を見ば、心に眞言を誦せよ、彼れ慈心を起して害をなすこと能はず。

又たの法。一切の疾病を患へば、眞言を誦して楊枝を加持して拂はば、彼れ即ち除愈せん。

又たの法。五色の線を取て索を結び、眞言を以て加持すること七徧して臂に繫くれば、一切の鬼魅悉くみな遠離す。

又たの法。淨灰を加持すること七徧して、壇を遶りて之を散ずれば、即ち結界を成す。

又たの法。婦人男女を收めずんば、月經の後ち母子同色の牛乳を取り、眞言を誦すること一百八徧して、加持して彼の女人をして諸佛菩薩を禮拜せしめて飲ましめ、又た乳粥を煮て酥に和して、加持すること一百八徧して、然して後に食せしめば、即ち福德具相の男を生せん。

又たの法。先行の法を作すべし、像の前に於て香華を供養し、沈香の大拇指の節可如(はかり)なるを取て酥合油に揾し、護摩すること七日、日に三時、時別に眞言を誦すること一千八徧し、一徧ごとに一たび火中に擲ぐれば、即ち持明仙安怛但那を成就することを得、足は地を離れて疾く行くこと日行千里、及び聞持不忘を得。

中卷は總計一百五十九法あり。

國譯聖迦抳忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經卷中 終

國譯聖迦抳忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經卷下

唐三藏沙門大廣智不空　譯す

我今聖迦抳忿怒金剛童子縛撲印法を說かん。先づ瞿摩夷を以て一の圓壇を塗り、一肘量にして七八歳の童男或は童女を取て、新淨の衣を著せしめ、先づ潔淨ならしめ、三日或は七日壇中に立たしめ安悉香を燒け、先づ香を加持すること七徧して、然して後之を燒け。又た更に華を取て加持七徧して、童子の掌中に置いて面を掩はしめ、然して後行者契を結んで眞言を誦す、行者の面は東に向ひ、童子の面は西に向へ、其の印相は、二手を以て內に相ひ叉へ拳に作り、二小指相ひ鉤し二大指を以て並べ豎て、捻して鉤鎖の形の如くし額に安し、牢く彼の童男●童女を握り即ち語せん、二大指を以て外に向へて撥せば、童子即ち邻いて後遠行せん。二大指身に向へて招かば、童子即ち向て前み來り、即ち鉤召を成す印を以て左右に揮はば、其の童子即ち印に隨ひて左右に撲せん、印を舉げて上に向へば童子即ち立たん、其の吉凶三世の事を問ふに一一みな實ならん、作す所の一切の事業速かに成就せん。爾の時に金剛手菩薩、偈を以て頌して曰く

此の金剛童子　我が三昧より生じて　一切の事を成辦す　忿怒王大力なり
即ち我れ金剛手　難調の者を調伏し　能く諸罪を滅除す　暴惡の諸の藥叉
及び諸の羅刹衆　修行者を惱害せんに　彼をして速かに除滅せしむ　忿怒大威德
悉く除くこと疑ふべからず　梵王及び帝釋　水天諸の天王　及び餘の威德者
刹那に滅壞せしむ　修羅王眷屬　自在那羅延　龍王三界尊
威猛にて能く制するなし　受持者まさに　忿怒王定に入るべし　威德金剛の如し
能く難調の者を伏して　悉くみな順伏せしむ。
又たの法。蓮華或は香氣ある華を取て、護摩するに求むる所みな得。
又た印を結んで吽字の眞言を誦すれば、即ち山嶽を摧倒することを得、亦た能く河水を

枯竭し、亦た能く阿修羅の關鍵此の聖迦抳忿怒金剛童子を破す。爾の時に金剛手菩薩大衆に告げて言く、此の忿怒王は無量の威德大神通力あり、善能く難調者を調伏し、調伏せん爲めの故に諸の方便を示し、三昧より此の菩薩を生ず、適〻纔かに憶念すれば、一切の鬼魅悉くみな馳走し、一切惡心の衆生みな損壞すべし、一切の災禍悉くみな除滅す、若し此の眞言を受持することある者は、自然に三昧耶戒を受くるに成る、若し悉地を求むれば速かに成就を得、能く沮壞するものなし、一切世間の人天常に供養すべし、諸の惡趣に墮せず、速かに菩薩地を證し無上菩提を成ず。爾の時に金剛主秘密主、聖迦抳金剛童子修行法を說く、纔かに一徧を誦することあれば、則ち一切の炎禍を除き、能く虎●狼●師子●惡龍等を禁制す、土塊を加持して彼の身上に擲ぐれば、則ち害をなすこと能はず。(一)若し日●月●五星●本命宿に逼近することを被むる者、若し能く常に念誦すれば災禍を招かず、者し佗人の災を除かんに、白芥子を以て乳に和し、彼の人名を稱して護摩すれば則ち息災するを得。又たの法。若し羅刹鬼に持せらるれば、纔かに憶念して眞言を誦すれば、即ち解脫することを得。

(一) 若し日月云云　七曜は威勢二十八宿より猶明なるが故に、行き合ふ時、本命宿に陵逼す、此の時災禍あり、能く常に念誦すれば災禍を招かず。

又たの法。怨家のために逼害せらるれば、當さに眞言を念誦すべし、即ち解脫することを得て、怨家即ち慈心を以て相ひ向ひ、害をなすこと能はず。

又たの法。若し鬪諍言訟あらば、蘇摩那華を取て護摩すること七夜、每夜眞言を誦すること一百八徧し、一徧ごとに一たび火中に擲ぐれば、鬪諍●言訟即ち消滅することを得。爾の時に金剛手秘密主菩薩、聖迦抳忿怒金剛童子を加持したまふ、若し修行するものあらば、應さに此の曼荼羅に入りて灌頂を受くべし、曼荼羅を說くに當さに地を分ち線を拼つべし、阿闍梨其の地を淨め、五色線を以て壇を拼つべし、其の壇八肘或は十二肘、或は十六肘にして、先に說く所の壇の儀則の如し、四方に四門あり、中央に於て(一)蘇嚕蘇嚕大忿怒王金剛を畫き、東邊に於て金剛手明王を畫け、手に金剛杵を持す、金剛手明王の右邊に金剛族の中の金剛鈎明妃を畫け、右邊に(二)大抱諏縛底明妃を畫き、南邊に步擲金剛大恐怖眼等を畫け、右邊に難覩(三)十大忿怒金剛を畫け、所謂る難覩忿怒金剛●水中忿怒金剛●降伏忿怒金剛●阿波囉爾忿怒金剛●摧天忿怒金剛●恐怖天忿怒金剛●須彌忿怒金剛●頂行忿怒金剛●寶峰忿怒金剛●降三世忿怒金剛●光明熾盛忿怒金剛●北邊に青棒等の十金剛ををけ、所謂る青棒金剛●謨時迦羅金剛●劫比羅金剛●

(一) 蘇嚕云云　未だ詳かならず。
(二) 大抱諏縛底　未だ詳かならず。
(三) 十大忿怒　此の中第三の降伏忿怒の四字、下の金剛に合すれば只九金剛にして十に足らず、明本を以て是とす。

大笑金剛●勇健步金剛●擧足步金剛、摩醯首羅步金剛●一霹靂金剛●摧伏金剛●大棒金剛、西方には難勝等の八大金剛を畫け、所謂る難勝金剛●忿怒金剛●難持金剛●恐怖金剛●極忿怒金剛●三世金剛●成就金剛●大忿怒金剛なり、若し佗の怨敵惡人に於て勝つことを得んと欲せば、壇の內の四門に於て各各の門の右邊に金剛恐怖忿怒菩薩を畫き、左邊に軍吒利金剛を畫け、外の四門に於て右邊に霹靂忿怒金剛を畫き、左邊に金剛鎖忿怒金剛を畫け、二忿怒金剛の前に於て天阿修羅諸龍及び諸魔を畫くべし、恐怖して降伏を受くる勢に作れ、壇の外の界道に於て諸の天衆を畫け、塗香●時華●燒香●飲食●燈明を以て壇の四邊に置き、一切諸菩薩金剛眞言明主に供養し上れ、各各の聖者みな本眞言を以て迎請せよ、迎請し已て閼伽を獻じて供養し、印を結んで諸の聖者の眞言を誦し、各各の本三昧耶の印を呈し、然して後ち弟子を引いて壇に入り華を擲げ、華の著く處の聖者に隨ひて便ち本尊の眞言を授與し、即ち灌頂すべし、此の大忿怒曼荼羅に於て求むる所の勝願、及び他敵を破するに、則ち滿足することを得、此の曼荼羅に入るに由りて、一切の疫病●鬼魅●一切の障難悉くみな消滅す、此の壇に於て亦た能く一切藥物安怛但那を成就し、阿修羅宮に入ること、悉くみな成就す。

(一) 大或はいふなきを宜しとするかゝ

爾の時に金剛手祕密主、未來一切有情の利益安樂なることをなすを見るが故に、略して一切曼荼羅を成辦することを說く。少き財寶を以て、少き時分須臾の日月を以て、持誦者但し淸淨にして戒に住し、助伴と兼に淸淨に修行せよ、或は白月一日或は二日、或は五日、或は六日或は八日、或は十四日に於てし、或は滿月十五日に於てし、是の如き等の日を取て起首めて曼荼羅を修し、或は城內に於てし、或は城外或は寺中、或は村邑聚落に於てし、東北方の華果茂盛せる樹木●叢林●名華●輭草ある寂靜の處に於てし、神通月に於て曼荼羅を建立せよ、瞿哆耶經の所說の如く、地を治し地を淨め兼ねて分位し已て、聖迦抳忿怒金剛童子曼荼羅を畫くべし、此の曼荼羅壇は能く一切の(一)大事を成ず、大威德あり、若し修行するもの諸の律儀を具し、蘇悉地敎王に依り及び最勝經に依て若し成就を求めば、久しからずして當さに成就するを得ん、所有る鬼魅障礙を作す者、修行者總かに聖金剛童子威德を以てと憶念し誦持し、及び彼の九執聖凡の種種の相貌、總かに彼の名を稱すれば四もに散じ馳走す、若し此の曼荼羅を見、灌頂を得已れば則ち三昧耶戒を得、然して後、師に從つて眞言印契儀軌を受くるに、克く獲し成就す、前の所說の金剛明王經中の法の如し、若し勤勇者あらば成就すること疑

ひなし。爾の時に金剛祕密主、大衆中にありて諸の天衆に告げて言く、當來世末法の時に於て諸の有情ありて、此の教を修行するに、懈怠懶惰にして眞言の律儀を具せざる者あり、或は惡龍損害し、雷震聲を作し、或は迅疾の諸魔ありて、種種の身形を變現して持誦者を惱亂し、及び諸の布單那鬼●吸人精氣鬼、並に天趣の中に於て犯羅刹及び諸母天衆等、或は須彌山及び諸の寶山莊嚴の處、山峰河側巖窟林野大江池沼大樹大海大河の間、雲霧陂澤悅意の華果樹の下にあり、及び雲を興し雨を降し山處●故園●故廟の鳩盤茶鬼及び諸の使者一切鬼神、多く如上の諸處に依て住し、障難を作さんと欲し、人の過を伺ひ求む、若し持誦者軌法に依らざれば、即ち彼の魔のために便りを得らる、是の如き等の種種の有情のための故に、斯の法を說いて持誦者をして、衆魔のために便りを得られざらしむ、我が金剛手菩薩、有情を愍念せんがために、眞言王忿怒形を示現す、此の眞言の威力に由りて、一切の藥叉●羅刹●天衆、我を見る者みな大いに怖畏す、一切成就を求むる法の中一切の眞言忿怒使者中に於て、我れ最勝王たり、金剛手菩薩、難調の諸の有情に於て障難を作す者を哀愍し、彼を調伏せんがための故に是の眞言を說き、三昧の中に於て此の形を示現して、額より流出す、是の故に一切眞言、無比大威德、大忿怒大怖畏大名稱、王及び正法を護らんがための故に、我が祕密主、聖迦抳金剛童子の法を說き、此の教の中に於て息災增益敬愛等を作すべし、若し佛教の中、邪見を起し瞋毒心を起し正法を滅する者あらば、猛利の心を作して降伏の法を作すべし、若し彼を降伏せば諸の苦惱を受けん、除かしめんと欲せば乳木を用ひて護摩を作すべし、即ち息災を得ん。我れ今又た悉地を求むる時、能く諸事を成辦する印加持所成就物の眞言を說いて曰く　唵引一迦抳矩嚕二合引駄二薩嚩薩怛嚩二合婆去孕羯囉三囉乞灑二合囉乞灑二合四薩嚩捺囉二合尾野二合引抳娑嚩二合引賀引五

(二)澡洗の印は前の獨股杵印に準ず、二大指並べて掌に入れ手腕相ひ著けよ即ち成ず、眞言に曰く　唵引一迦抳矩嚕二合引駄二薩嚩二合薩怛嚩二合婆去野三鉢羅二合娜娑曩二合引曩迦黎四悉地二合二銘二鉢囉二合拽跛五娑嚩二合引賀引

道場掃地眞言に曰く　唵迦抳麽引囉野二吽引三

成就を求むる時、(三)難調の者を縛するには、前の根本の印に準じて、大指を以て掌中に於て交へよ、眞言に曰く　唵引二迦抳戍引灑野二薩縛努瑟鉢二合引三滿駄野滿駄野四吽五賊吒六

(三)廣大金剛心印。前の獨股杵の印に準ず、二大指を以て掌中にして相ひ握れ。廣大金

(一)澡洗の印　口傳に云く　二手內縛して二風を立て獨股杵の如くし、二大を諸指の內に入るゝなり。

(二)雜調云云　縛雜調者の印なり。

(三)廣大金剛心の印　內縛して二風を立てて頭相合す(以上獨股)今二大を掌中にして交ゆ口傳に云く諸指の外にして交ゆるなり。

(一) 最勝心印上卷には内縛して二小立て合すとあるも今は二小屈して頭相柱ふるを異とす。三、二、四、亂脫

剛隨心印。前の心印に準ず、二大指を以て並べ竪てよ即ち成ず、亦た蓮華金剛印と名く、(一)最勝心印。前の最勝印に準ず、二小指を屈して頭相ひ拄へよ即ち成ず。此の印「若し三種種の三障難の家中に不祥あらんに、此の印を結び念誦すれば、即ちみな消滅す。最勝隨心印。前の最勝印に準ず、二名指及び二小指を舒べよ即ち成ず、此の印能く一切の事業を成辨す、若し修羅宮に入る時は亦た此の印を用ひよ、大威力あらん。次に大鈎印を說かん。二手内に相ひ叉へ、二頭指屈して鈎の如くせよ即ち成ず、此の印三界中の所有る衆生の類を、みな能く召くことを得、若し阿修羅女を召せば、七日中に於て召を聞いて即ち來らん。

又た解拏吉儞の印を說かん。前の獨股印の如し、二小指●二頭指を舒べ頭相ひ合せ、餘の六指は内に相ひ叉へ、二大指を以て數數之を開け、名けて解拏吉儞と爲す、但し拏吉儞を解くのみに非ず、亦た能く地居の一切の鬼魅を除く、此の印を結んで根本の眞言を用ふべし。

又た調伏一切龍の印を說かん。前の獨股杵の印に準ず、大指を屈して掌に入れ、甲を以て正しく相ひ向へよ、想へ彼の龍大指の節間に在りと。此の印能く一切の龍を伏し雨を祈るに雨を止む、一切の諸龍此の印を見て、金翅鳥の如し、若し龍女此の印を見ば馳散し遠く去らん、纔かに此印を結ぶに亦た能く一切の毒蟲に嚙まるゝを除く、此の印の威力に由りて傷害を被らず、若し已に傷らるゝ者は即ち除差することを得。

又た一切難調の有情を驅擯する印を說かん。二手内に相ひ叉へ二大指を以て面相ひ合せよ即ち成ず、此の印大威力あり、諸大力天及び惡鬼神、敎に順はざる者を悉く能く驅逐せんに、此の印を結んで根本の眞言を用ひよ。

又たの法。掌中に於て阿落得迦を以て(唐に云く胭脂)彼の人の名を掌中に書し、火を用て掌を炙き、眞言を念誦し句中に彼の人の名を加へば、須臾の頃に彼の人鉤召せられて即ち至らん。

又たの法。若し根本眞言を持して十萬徧に滿し、然して後ち安息香を取て十萬丸を作り護摩を作せば、諸の藥叉女●毗舍遮支女みな能く召來して恭敬心を生じ、種種驅使するに任せん。

又たの法。若し災難及び恐怖ある處には、眞言を誦すること八千徧すれば、則ち災滅することを得、怖畏を離る。

又た忿怒王の像の前に對し、秔米飯を以て酥に和し護摩すれば、則ち家中飲食盡くることなきことを得ん。

又たの法。護摩の灰を取りて頂上に點して軍陣に入れば、刀杖に傷せられず、佗敵に於て勝つことを得。

又たの法。若し城邑●聚落に疫病あらば、水に入りて念誦すること七夜なるべし、夜別に眞言を誦すること一千八徧すれば、諸の疫病悉く除こる。

又たの法。若し財寶を求めば、新淨衣を著し像の前に對して香泥を以て一小壇を塗り、安息香を燒いて眞言を誦すること一萬徧すれば、則ち意の如くなることを得。

又たの法。像の前に對して意を專注し、眞言を誦すること三十萬徧すれば、即ち聖者を見、所求みな得ん。

又たの法。天久しく霖雨せんに、白芥子を加持すること一百八徧し、一徧ごとに一たび上に擲げ、虛空に散すれば霖雨即ち止まん。

又たの法。一男子の死屍の未だ損壞せざる者を取り、屍陀林の中或は四衢道に於て、先づ藥を瀉ぎ水を以て灌洗し、(一)腹中に瀉がしめんに惡物出で已て、又た香湯を以て身

(一) 腹　高本は腸に作る。

(一) 摩訶莽娑　大肉なり、義淨の南海傳に、屍陀林に於て摩訶迦羅神、藥を賣る、若し人、物を以て尸陀林に安けば物に隨て藥を與ふと、今鬼と共に交易すること亦彼の如きか。

を洗ひ淨からしめ、香を以て徧身に塗り、帛繒を胯に纏ひ形に覆ひ、華鬘を以て嚴飾し、佉陀羅木を取て橛に作り、眞言を誦すること七徧し、橛を加持して頭邊に釘ち、髮を以て橛の上に繫け、持誦者屍の心上に於て坐し、面を東に向へて慈心を起し、勇銳にして恐怖することなし、四方に應さに念誦する者四人を置き劒を執らしむべし、持誦者手に小鐵杓を持し、鐵末を酌んで屍の口中に瀉ぎ、間斷せず念誦すれば、其の屍即ち舌を出さん、利刀を以て舌を截り取り右手に把れば、變じて劒となる、色は青蓮の如し、則ち諸の眷屬と兼に虛空に飛騰して持明王と爲る、壽命一大劫、已後命終して金剛手菩薩の宮中に生ずべし。

又たの法。屍陀林の中に於て鬼と共に交易し、(一)摩訶莽娑を賣つて鬼に與へ、長年藥●安怛但那藥●寶劒●伏藏●金●銀七寶を取て、作法の時に當りて此の金剛童子眞言を用て、自身及び助伴を護すれば、みな礙なきことを得、鬼に幻惑せられず、所求みな成就するを得。

又たの法。佗の敵を破せんと欲せば、將帥より已下一一にみな、眞言を以て加持すること七徧して身を護すれば、佗の敵即ち破す、或は眞言を以て水を加持すること一千

八徧して軍兵に散灑せば、傷害せられず勝つことを得て、彼の敵退散す。

又たの法。四の瓷缾の底黒からざる者を以て、河流の水を取て滿ち盛り、及び少分の諸香及び諸藥を著れ、像の前に對して眞言を誦し、加持すること一百八徧して頂上に澆灌せよ、彼の人念誦するに或は自或は他、功夫を致せども由し現驗なきことは、彼の魔に燒惱せらる者は不祥鬼魅持すればなり、此の灌頂洗浴の法を作すに由るが故に、諸の魔鬼等悉くみな遠離し、福德熾盛にして速疾に成就す。

又たの法。眞言を以て香水を加持すること一千八徧して、身上に散灑すれば、鬼瘧みな除愈することを得。

又たの法。孔雀尾一莖を取りて眞言を誦し、加持すること一百八徧し、若し人毒に中てらるれば、孔雀の尾を以て彼の身上を拂へ、みな除差することを得。

又たの法。七蚯蚓の糞を取て小圓壇に塗り、上に於て坐し眞言を誦すること一萬遍すれば、即ち先行の法成就す（先行の法とは即ち眞言の法、功効驗驗を成す）然して後ち時日宿直を擇ばず、七日念誦し、毎日眞言を誦すること一千八徧すれば、即ち金錢一千枚を得。

又たの法。眞言を誦して索帶を加持し、(一)一遍を誦して結ぶこと一結せよ、或は水を灑

(一)一遍乃至一結　高本にあり依て加ふ。

げば則ち護身することを成ず、兩徧を誦すれば則ち方隅界を結するに成んぬ、三徧を誦すれば助伴を護り、四徧すれば曼荼羅を護る。

又たの法。黑月八日に於て一日一夜食はず、乳牛母子同色なる者と、瞿摩夷の未だ地に墮ちざる者を取りて、土に和して童子の像を作り、一小壇を塗りて像を中に置き、其の壇の上に廣く供養を設け、像に對して眞言十萬徧を誦すれば、其の像動き頭動き、或は餘の應驗を現ず、當さに知るべし法成じ、思念する所の事みな成就することを得、金剛童子當さに夢中に於て身を現じ、應作不應作の事を示敎すべし。

又たの法。黑月八日に於て一日一夜食はず、芥子を取りて酥に和し護摩し、眞言を誦すること一千八徧すれば、則ち一千の銀錢を得、並に一所の莊を得。

又たの法。(一)室麗瑟曼得迦木を取て火に然き、骨婁草の苗を以て護摩し、眞言を誦すること十萬徧し、一たび眞言を誦して一たび火中に擲ぐれば、牛一千頭を得。

爾の時に金剛手菩薩、諸の有情を利益し安樂ならしめんがための故に、普通の儀軌を說きたまふ、未來末法の時、淨信ありて修行し大乘を樂ふ者及び懈怠懶惰にして慧方便を具せざる者のために、國界を加持し人民豐樂にして諸の災禍なく、吉祥福德ならしめん

(一)室麗云云　未だ詳かならず。

と欲す、故に此の妙眞言門を說きたまふ。時に金剛手菩薩即ち眉間より光明を出し、聖迦抳忿怒金剛童子菩薩を照燭し加持し已て、即ち伊舍那等の梵王摩醯首羅天等に告げて言く、汝我が所說を頂受すべし、大忿怒明王金剛童子息災增益降伏敬愛入修羅宮安怛但那騰空等成就の法、上の如く等の儀、汝等助護して速かに聖迦抳忿怒金剛童子の法を成就せしめよ、疑惑を生ずることなかれ、法の如く奉行すべし。

音釋

揾烏困の切、手捺なり　橛其月の切、杙なり。　囓五結の切、噬むなり、　溉古代の切、水灌ぐなり　涸乎各の切、水竭くるなり。　纏力主の切、線なり、　犖音擽羊牛の乳を取るなり　抨彈するなり

國譯聖迦抳忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經卷下　終

國譯阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經

修行儀軌卷上

一には全身金剛三昧耶と名く。
一には無邊甘露神力と名く。

唐(一)大善無畏內道場祕譯

是の如く我れ聞きき、一と時、佛俱尸那城娑羅雙樹の間に在て、大比丘衆千二百五十人と俱なりき、菩薩摩訶薩三萬六千人と俱なりき、其の名を觀世音菩薩●文殊師利菩薩●大勢至菩薩●不空羂索菩薩●那羅延菩薩●持地菩薩●定自在王菩薩と曰ふ、而も上首と爲す。復た比丘●比丘尼●優婆塞●優婆夷●天●龍●八部●護世四天王●金剛力士●鬼神●阿修羅●乾闥婆王●緊捺落●莫呼羅伽●藥叉●羅刹●布單那●阿婆娑摩羅●鳩槃茶●毗舍闍●鬼子母●並に及び眷屬女あり、恭敬し供養し歡喜し圍繞して、而も坐して法を聽く。爾の時に世尊、諸の大衆に告げて言く、今四大沈溺す、當さに般涅槃すべし、四衆之を聞いて悲啼號哭す、哀しいかな、何の思ひぞ我が大衆を捨てゝ而も涅槃に入りたまふ、世間空虛にして魔王熾盛ならん、我等大衆歸依の處なけん、唯し願くは世尊、更に世に住

巽五、縮閏十四、
(一)大云云　大は禮藏二至五。阿吒薄俱無比力と翻ず、上佛陀羅尼太元帥陀羅尼を說て佛に上るの意。
大云云道場は內代なり、內道場は秘譯禁中の佛殿、秘譯とは此法は大威猛の故に容易に披露すべからず、故に披露すべからず、故に內道場に於て秘譯す。唐の樓鑒寺文際日本の常曉に授け曰く、此の法は佛の肝心衆生の父母にして國家を南る甲冑、雖な防ぐ神力なり、唯國王の爲に宮中に於て之を行ず、未だ庶民の爲に城外に出さず、城中に於ても十內供諸州の外に於ては傳へず節度使の宅に出すことなしと。太元帥の權類は大日釋迦觀音無盡意虛空藏の所變、其の實類は本文の如し。

在して魔王を降伏して、無上道心を發さしめ、並に我等四衆を度したまへ、安ぞ涅槃に入りたまふやと。佛、諸の善男子及び善女人に告げたまはく、吾れ今涅槃せん時、將さに至んなんとす、久しく世に住することを得じ、汝等啼泣すること勿れ、我が弟子等をもて今悉く諸の菩薩に付す、相ひ將ゐ教授して之を度脫せよ、若し我れ更に世に住せば、法界の衆生咸く皆な厭賤し、魔王六師長劫に吾を恨みて休息あることなけんと。會中の衆生遞相に告げ報ずらく、世尊世に在せば我等大衆が歸依處として、我が煩惱を解脫せしめたまふ、今者無上世尊涅槃の後は(一)我の眷屬必ず魔王の爲めに纏繞せられんと。相ひ告げ報じ已て淚下ること雨の如く、擧身號泣し悶絕して、地に躃れ、口中より血を流し、諸天振動し、須彌寶山碎けて微塵の如し、一切の蟲獸蠢動含靈一時に聲を同うして唱へて言く、苦しいかな、無上世尊、我濁世劫の衆生を捨てゝ大苦惱を受けしめたまふと。佛、四衆の心の所念を知ろしめして安詳として起ちたまひ、結跏趺坐して湛然として動せず、大光明を放ちたまふこと上は三十三天に徹し、下は十八地獄の衆生に及ぶ、天地六變振動して曼陀羅花を雨して徧ねく三千大千の大地を覆ふ、天鼓自ら鳴り幢幡自ら(二)竪ち歡喜し合掌して佛に向つて一心に法を聽く。

(一) 我の　惡くは「我及び」の意か。一、三、二、四、亂脫

(二) 竪ち　此の下惡くは脫文あらんか。

佛、一切の大衆に告げて言はく、今一國の衆生諸の苦惱を受く、長者あり名けて離車といふ、諸の魔鬼のために惑亂せられ吼嘆し馳走して其の家を侵燒す、申べ告ぶる處なし、見るに今高聲に唱へて言く、南無佛陀南無達摩南無僧伽、我が此の苦を知りたまへと。佛即ち大日乾連に敕したまはく、汝佛頂の呪を持して往いて離車を救ふて解脫を得しめよと。爾の時に目連、佛の威神を承けて娑羅林の中より沒して長者の家の中に見れ、即便ち告げて言く、諸の魔精魅諦かに聽け、無上の釋迦牟尼佛、我をして(一)大放光佛頂の神呪を持して、汝等が魔軍を降伏し、長者を救護せしめたまふと。而るに彼の鬼神退散し走り去りて、便ち寒林に入りて尊者阿難を惱亂して、前進ことを得ざらしむ。爾の時に諸の魔鬼神等、佛涅槃せんと欲したまふと知りて、魔起ること有りて阿難を燒亂す。時に一りの大將軍あり、名けて阿吒薄俱元帥と曰ふ、乃ち心に瞋怒して即ち天●龍●阿修羅●八部鬼神●四大天王●二十八部の藥叉大將●四十二部の羅刹王を召して、滿善を首と爲す、亦た諸の金剛密迹●猛將●烈士●師子吼王●目眞鄰王●功德大辯●一切の天神●孔雀王●金翅鳥王●降怨鳥王●一切の恒沙の鬼神●人及び非人等を召して鎧甲を備へて、天を廻らし天を動かし四海涌沸し、大鐵圍山●目眞鄰陀山●七重の寶山●

(一) 大放光云云　大佛頂。

振吼し擘裂し風雲霧靉として霹靂し、日光變謝し諸天梵王其の宮に安んぜず、一切の衆生面に光色なく、龍蛇龜鼈孔穴を出で、鬼神魔王叫嘆し、奔走して同聲に唱へて、甚大に苦しいかな哀しいかな苦痛すと言つて、(一)慌忙し怖れ走つて何くに在りといふことを知ることなし、會の中の衆みな咸く言く、怪しいかな、何の惡相ありてか而も此の事を見、我が四衆をして咸く猛威を觀せしむると。即ち起ちて合掌して佛に白して言さく、世尊、何の故ありてか此の相を見、一切の鬼神●阿修羅をして其の處を安んぜざらしむ、願くは佛、我等を哀愍し護念したまへと。爾の時に佛、諸衆等に告げたまはく、我れ今般涅槃しなんと欲ふ、諸の法藏を付して其をして守護せしめん、今自ら所有る一切の鬼神●阿修羅●四方の鎮守●護法善神●將軍護世●持國天王●金剛力士●(二)般若善神●天●龍●八部●人及び非人悉く來り集會して、誓言を結んで同心に佛の法藏幷びに及び汝等衆生を護りて諸の衰惱なからしめ、今より以往晝夜常に安からしめん。爾の時に元帥大將、四方の神王を召集して同じく佛の所に至りて、各の塗香●末香●天衣●瓔珞を持して、圍繞すること百千萬帀して、佛の足を頂禮し却いて一面に住し聲を同うして佛に白して言さく、世尊我れ聞く、世尊般涅槃しなんと欲したまふと、

(一)慌忙　急々速なり。

(二)般若善神　十六善神なり。

衆生戀慕すること子の母を愛するが如くにして、心暫くも捨つることなし、其の神王等心肝寸に斷ず、唯し願くは世尊、更に世に住して衆生並に及び我等を救度したまへ、安んぞ涅槃に入りたまふやと。爾の時に阿吒薄俱、無央數の大神と與に偈を說いて言さく、

我等が天中の天、一切を慈愍したまへ、天●龍●阿修羅●八部の鬼神衆、之を仰ぐこと父母の如くして、心に暫くも捨離することなし、一旦に唱へて言まふ、而も涅槃に入らんと、我等大神衆、心肝寸寸に斷ず、唯し願くは大慈悲、諸の衆生を愍みたまふが故に、我れ大衆を度脫したまへ、安んぞ涅槃に入りたまふべき。

爾の時に、佛大衆に告げて言はく、汝等大將力士諦かに聽け、吾れ當さに汝がために說くべし、如來の出世の法は曼陀華の時に乃ち一たび出現するが如し、衆生之を見て心に厭足なし、我れ若し久しく世に住在せば、魔怨をなし衆生輕毀し、彼の衆生をして苦海に沒せしめん、汝等元帥、諸神の中に於て最も上首爲り、威力奇特にして不可思議なり、如來のために護念せらる、吾が滅後に於て法藏並に及び衆生を守護して、苦難を離れしめよと。爾の時に大元帥阿吒薄俱、淨居天王●散脂鬼神●提頭賴吒の而も

上首たると與んじて佛に白して言さく、世尊我れ等今、同心に誓願して大金剛を結ぶに、一切の猛惡の鬼神を摧伏するが故に、一切の怨家●惡人●惡賊等を降伏せしめんと欲ふが故に、諸の國王人民を護りて安樂ならしめんと欲ふが故に、衆生をして三寶を敬崇せしめんと欲ふが故に、外道魔王波旬をして菩提心を生ぜしめんと欲ふが故に、衆生をして病の身に纏ふことなからしめんと欲ふが故に、神をして衆生に違することなからしめんと欲ふが故に、世尊我今、佛前の百億恒河沙の力士神王の軍を將ゐて同心に衆生を覆護して、諸魔の縛を離れしめんと欲ふが故に、世尊、我れ大會に於て大神呪を結す、甘露無邊陀羅尼と名く、外道惡魔鬼神並に惡國王●惡大臣を摧伏するが故に、及び彼の六趣に廻して衆生を攝引して、傷害する者なからしめん。佛、阿吒薄拘元帥大將に告げたまはく、我れ衆生の劣弱にして、汝が無邊の(一)神呪を持すること能はざるを知れり、我れ恐くは後世に於て諸の衆生を傷害せんことを。

爾の時に、諸の四方天神王梵天帝釋、佛に白して言さく、世尊、此の呪は猛極惡の性なり、必ず傷害することあらんと。爾の時に阿吒薄俱、那吒王●可畏王●拔山王と與に咸く言さく、世尊一切の諸佛、大悲哀の力を以て衆生を引攝したまふすら、而も阿難は

(一) 神　或はいふ神の下恐くは力の字ある。

猶ほ旃陀羅女に迷惑せらる、世尊、阿梨陀藥叉王、寒山に住して九萬の眷屬を領して、日に衆生を食ふこと無量無邊なり、一切の金剛力士天神の兵も摧伏すること能はず、(一)世尊權に化して元帥を生じたまふ、故に化して大力威神將の身と作りて、其の宮殿を振はしむ、時に鬼王口中より血を流して悶絶して地に躃る、死せんこと久しからじと知りて、然も始めて捨放す、世尊焉んぞ大將の身の威德無比なることを知らん、世尊我れ若し菩薩の行を行じて、慈悲を以て引攝せんと欲するに、即ち鬼王力士横さまに衆生を害滅せんと擬す、我れ或は馬頭金剛王を現作すれば、即ち衆生怖畏す、或は大光力士と作るときは、則ち阿修羅宮室を安せず、世尊我れ故らに鬼神元帥大將と作るときは、則ち衆生見んと樂ふ、世尊我れ恐くは世尊の滅後(二)百劫の中に、佛法漸く滅して、菩薩見れず、(三)金剛快樂清淨の處に隨ふ、衆生福薄く、三魔魅增盛にして、二國王に威德なく、王子●臣民快樂あることなく、四衆生を侵嬈し、或は精氣を吸ひ、血肉を噉ひ、或は衆生をして中夭し、母胎に處して死せしむ、此の時に當て我れ能く晝夜に離れず、一切生死の衆生を護持して其の溺惱を離れしむ、世尊我れ身には惡相を現じ、心には大悲を作す、彼の國王の人を養ふが如くして異ることなし、若しは佛

(一) 世尊云云　釋迦尊の所現を爲るの證文なり。

(二) 百劫　劫は時分なる故に一時一日一月等も皆劫なり。

(三) 或はいふ、金剛の上下恐く文脫するか。

一、三、二、四、亂脫

子在在處處に、或は塔中●廟中●山林●道中●曠野の中に於て誓つて當さに憐愍擁護して、惡に遇はしめざるべし、(一)世尊我が志を知つて我等が神呪を受けたまへ。佛の言はく、是の如く、後の千劫の中にして我が法藏不可思議の大事を護らんがために、當さに後世の諸の衆生のために、善く神呪を說くべし。爾の時に百億の大帥同心に佛前に於て、世尊の雙足を頂禮して、一面に在りて立ち、而も阿吒薄拘大元(二)卒無邊神力甘露の呪を說いて曰く、

曩謨、阿羅怛那、多羅耶也、曩莫、失旃陀、拔折羅、波那曳、摩訶藥叉、茜那、波多曳、曩謨、阿吒薄拘耶、摩訶、薄俱多耶、摩訶藥叉那耶、摩醯首羅耶、呼、毗摩質哆羅耶、呼、那吒俱伐羅耶、呼、阿呵、阿呵、阿呵、阿呵、阿呵、阿呵、呼呼呼呼、曳曳曳曳、吒吒吒吒、尼藍婆耶、呼、乾陀羅婆耶、呼、毗舍遮耶、娑婆訶、曩謨、婆伽梵、跋折羅、軍吒利耶、呼、跋折羅、蘇悉地耶、呼、婆伽婆底、阿吒薄俱耶、呼、毗沙門耶、呼、婆吒婆吒耶、呼、因陀羅耶、呼、藥叉賴吒耶、呼、毗盧陀迦耶、呼、毗盧博叉、藥叉耶、呼、婆羅摩耶、呼、速佉速佉、娑婆訶、摩訶藥叉娑婆訶、伽伽羅、伽伽羅、呼呼呼、呼呼呼、摩尼跋陀羅野呼、那羅延耶、呼、摩訶迦羅耶、呼、阿耨陀耶、呼、漏、波

(一)世尊云云之れ佛に上る陀羅尼の意なり。

(二)卒　恐くは帥の字の誤寫か。

難陀耶呼、步祁羅耶、呼、布單那耶、呼、黑布單那耶、呼、閻摩羅遮耶呼、目眞鄰耶呼、素嚕鳩槃荼耶呼、吽吽吽吽、善女功德耶呼、降怨耶吽呼、吽吽吽吽、呼呼呼呼、藥叉藥叉、速速速速、呼呼呼呼、摩訶藥叉藥叉、速速速速、呼呼呼呼、娑婆訶、陀陀陀陀、陀訶陀訶、鉢柘鉢柘、敕敕敕敕、婆羅婆羅、跋折羅、荷吒荷吒、呼、莎訶、呑攝、娑婆訶、阿吒阿吒、阿呵阿呵、吽欠吽欠、斫羯羅、護帝、跋折羅、力力力力、跋跋跋跋、急急急急、頻陀頻陀、閻婆閻婆、攝持師子王、吼吼吼吼、僧伽羅闍、吼吼吼吼、勒喉勒喉、吽呼吒、阿吒婆拘耶、吽呼吒、呼吒、娑婆訶。

阿吒薄俱心呪

唵、勒叉勒叉、速速速速、呼呼呼呼、娑婆訶、散指迦耶呼、摩訶散指迦耶呼、摩尼跋陀羅耶、呼、摩訶摩尼跋陀羅耶呼、羅刹羅刹呼、摩訶羅刹羅刹呼、藥叉藥叉、呼、摩訶藥叉藥叉呼、吒吒吒吒、敕敕敕敕、縛縛縛縛吽吽吽、曳曳曳曳、呼呼呼呼、佉佉佉佉、火急曳、阿吒薄俱耶、吽呼吒。

阿吒薄俱心中心呪に曰く

唵、敕敕敕敕、婆羅婆帝、莎呵、阿吒阿吒曳、呼、娑婆訶、呑攝、娑婆訶、阿吒阿吒、

(一)吼の下、別本に呵呵呵呵とあり。

(二)邊の下、或はいふ力の字脱するか。

(三)摩羅　正本になし。恐くは脱するか。

(四)不言の上、或はの字脱するか。

吽欠吽欠、斫羯羅、護帝、跋折羅、力力力力、呼呼呼呼、急急急急、頻娜頻娜、閻婆閻婆、攝持攝持、僧伽羅閻吼吼吼(一)吼、羅瞿耶吽、嘔嘔嘔嘔、吒吒吒吒、阿吒薄俱耶、娑婆訶。

世尊、此れを無(二)邊甘露陀羅尼神呪と名く、普ねく一切衆生のために大救護を作す、是の呪を持する人は悉く皆な衆生を安穩ならしめ、皆な快樂にして諸の苦惱を離れしむ、王難●賊難●怨家●軍兵の難、若しは天龍●鬼神、若しは羅刹●夜叉●鳩槃茶●吉遮●阿婆婆(三)摩羅歩陀●毗舍遮●布單耶●摩登伽●旃陀羅●外道●波旬●尼乾陀●火妖●水妖●吒祁尼及び子女●眷屬●奴婢●一切小毒●弊龍子●或は變化して男の形●女の形●鳥獸の形と作れる、龍蛇の類、或は有形或は無形、或は有首或は無首、或は有足、或は無足、或は言(四)不言にして來て言を作す者、悉くなみ倒に行き直ちに止る、或は虚空の日●月●星辰●南斗●北斗●惡星の變怪あり、或は鬼神●羅刹●藥叉ありて、虚空に飛行し或は雷電霹靂を作し雹を降らし或は風輪を放ち、日輪●月輪悉くみな消滅せしめ、一切の人を來り燒す者、みな當さに之を滅すべし。又た復た世間の衆生隨類の有形或は艸木●瓦石●花果●飲食●衣裳●鳥獸五行の物、能く變怪し人を困し衰惱せしむる者も、亦たみな除滅す、世尊若し衆生ありて相ひ憎み刑害し、或は人の形を作り或は世間の一切の物の形を作り、或は山神●樹神●塚墓●社稷●日●月●星辰を(一)牽き、或は風神●火神●水土の神祭祀の言説以に作し未だ作さゞる、以に成じ未だ成せざる、以に害し未だ害せざるも、此の甘露無(二)邊大神呪を聞くことあらば、彼の鬼神及び之を作る人をして、自ら消し自ら滅して遺餘あることなからしむ。世尊若し瘧病の、或は布單那の所作、或は阿婆(三)婆の所作、或は吒祁尼の所作の者あらん、或は一日●二日●三日●四日或は一月●半月●一年●半年ならん者も、此の神呪を聞かば即ち除滅することを得ん。或は衆生ありて前世の中に三寶を敬せず法藏を輕毀するを以て、或は人身を得れども諸根具せず、種種の惡病嚴しく其の身に著して、惡瘡●疥癬あらん、或は(四)迦摩羅病のために纏はされん、此の如くの衆生は深く傷嗟しつべし。世尊我れ彼の衆生をして一、四朝暮に二無上の道意を發して、五過を悔いて自ら先身の業を、責めしめんと欲す、三身命を惜まず、一切を慈悲し、傷害の心なく、三寶をして加(五)備せしめ、六三業の罪除いて、六根清淨ならしめ、然して後に晨朝に此の呪を誦すること、一百八遍して、水を呪して身心を沐浴せば、旬日を經ずして即ち除差することを得ん。佛の言はく、是の如く是の如し、汝等

(一)牽　未だ審にせず。

(二)邊の下、力の字あるか。

(三)婆の下、摩羅の字脱するか。

(四)迦摩羅病　難治の病にして癰癤傳尸等の如し。一、四、二、五、三、六、觀脱

(五)備　恐くは被の字か。

が所說は實に異りあることなし、此の呪は是の如くの利益あり。

一切の大衆鬼神等　みな各の一心に我が說を聽け
八部に元帥大將あり　號して名けて阿吒薄俱と曰ふ
常に無邊の佛を供養するを以て　今還て釋迦文に親近す
菩薩の大悲の身を變現して　而も怖畏の形像を作す
一切の鬼神咸く歸伏す　閻浮の衆生も亦復た然なり
能く六道に於て苦惱を拔いて　咸くみな之をして快樂せしむ
若し衆生有て其の名を聞かば　永く災難及び危厄を離れ
臨終の時に驚怖せず　菩薩爲(ため)與に菩提を授けん
若し此の呪に違逆することある者は　現身には白癩あて膿血流れ
後には地獄に墮して諸の苦を受けん　更に人身となるとも具足せじ
我れ今之を召んで元帥とす　號して甘露無邊の呪と曰ふ
若し衆生有て善く受持せば　一切の諸佛咸く證知したまはん。
爾の時に阿吒薄拘、佛に白して言さく、世尊(一)我は是れ一切の天龍八部●鬼神●阿修羅●人及び非人の中の元帥大將なり、鬼神を驅使し國土を守護し、衆生を護持することみな我が神呪を持するに由る、是の如く如來の滅後、後五百世に劫濁亂起り、鬼神增盛し、衆生の福薄ふして、諸の鬼魔の爲めに侵害せられ、或は精氣を飲み、或は血肉を噉ふ者、人をして疫病熱病せしむること、若しは一日●二日●三日●四日乃至七日●半月●一月或は頭痛●耳痛●背痛●心痛●手痛●脚痛、一切の支節の痛患みな除滅することを得ん、是の如くの一切の鬼神若しは天●龍神●乾闥婆●阿修羅●藥叉●羅刹●布單那●羯吒(カヤタ)布單那●外道●天魔王●六道浮遊の鬼神若しは惡人●惡賊●虎狼●師子●蜈蚣●蟒蛇●是の如く等の人の與(た)めに害を作す者、此の神呪の力を以て能く禁持して繫縛し、惡鬼神を斷滅し、諸の大力士をして、掌に(二)千輻輪を擎(ささ)げて、其の頭を轢(きし)つて破して七分に作して、身を析くこと猶ほ微塵の如く、禁破して性命を失せしめて、國土及び衆生のために害を作すこと能はざらしめん。世尊我今、更に神呪を說いて、受持者をして而も結界をなさしめん、阿吒薄拘即ち結界の呪を說いて曰く　唵引一勒叉勒叉二速速速速三泮泮泮泮四　娑婆訶(カ)五

復た(三)八部の都呪を說いて曰く　曩謨(ナウボウボダヤ)勃陀耶、曩謨達磨耶、曩謨僧伽耶、曩謨、勃利(ボリ)

(一) 我は是れ云云　是は權者なり。

(二) 千輻輪云云　即ち是れ三摩耶形なり。

(三) 八部云云　八部俱に此の呪を以て結界するが故に、呪の中の豆の字は土と讀む可きなり。

藥叉、曩謨帝勃利藥叉、曩謨、羯藍藥叉、訶訶訶訶訶訶、吼吼吼吼吼吼吼、醯醯醯醯醯醯、豆豆豆豆豆豆豆、富富富富富富富、紐紐紐紐紐紐紐、刹刹刹刹刹刹刹、力力力力力力力、勒勒勒勒勒勒勒、敕敕敕敕敕敕敕、急急急急急急急、縛縛縛縛縛縛縛、阿吒薄俱耶、吽吽吽、呼吒、莎訶。

若し八部の神を追はんと欲せば、八部の印を結んで八部の呪を誦すること二十一遍せよ、其の神立ちどころに至らん、(一)世尊(二)結界する所の一面千由旬に、界畔守護をなすべし、先づ淨水を呪して四方に散じ、復た香末淨土を呪して而も四方に散じ、即ち白芥子を呪して而も四方に散せよ、一本に云く、此に至て或は刀鉢を呪し、或は泥丸を呪して四方に擲げ或は弓箭を呪して四方を射る其の力分所至の處を盡して即ち界畔となす、皆な鬼神●天龍●阿修羅あり、四天王各の二十八部の大藥叉將、四十二部の羅刹軍衆●龍王●鳩槃茶王を領して、同心に守護して晝夜に離れず其の人を護持すべし、世尊結界せんと欲はむ時は、清淨の香湯を以て沐浴して即ち上妙の衣服を著せよ、五辛●酒肉の屬を食はず、芸薹●胡荽●蘿蔔及び(三)椿蕳をも口に經ず、潔齋清淨にせよ、世尊、此の呪は奇特無比にして威猛自在なること我が身の如く金剛不壞なり、一切の天●人●阿羅漢●護世四天王、皆な

(一) 世尊 此の二字恐くは其の字か。

(二) 結界云云 此の結界の種類之れ多し、然も今の修法には白芥子を以て結界するなり。

(三) 椿 香椿なり支那にヒトモジに替用す、ヒヤンチンといふ。

歡喜を生じて其の人を守護し、能く五濁惡世に於て佛のために衆生を救護して、三毒の箭を拔き、彼の六趣を廻し引攝して出でしむ、世尊、我が心を知りたまふや不や。佛の言はく、是の如く是の如し。世尊我に敕したまふ、元帥と爲て法藏を護持せよと、我れ無始より以來威力殊特にして位十地に同じ、我今、呪を持する者の爲めに、更に護身の呪を說かん其の呪は後に在て說くもの是れなり凡そ七遍滿して香を燒き、地に灑いで過去●現在●未來の諸佛菩薩金剛●天等を啓請して、即ち先づ此の呪を誦すること二十一遍して虛空界を結せよ、後に即ち軍荼利の呪を誦して結界し、次に四天王の呪を誦して天界を結せよ。次に跋闍羅の呪を誦して空中の大界を結し、世の中の轉輪王を請して壇の主とし次に沙摩王將を請して守壇の王とせん、次に業天羅刹を喚んで壇を助けしめよ、神を請することと都て了んなば、即ち盧舍那佛●觀世音菩薩を啓請して和上と爲し、文殊師利を請して即ち證知と爲し、(一)堅牢地神に告げて言ふべし、一切の大善神王、我れ此の地に於て壇地を穿鑿せんと欲す、其の願の如くならしめよと、即ち香を燒き食を安して供養すること一宿明。日、日未だ出でざる時、一斗の(二)井華水を取て分て四器に作して四方に安し、水上に刀●弓箭を安し竟れ、即ち穿つこと三尺せば、當さに其の物を見

(一) 堅牢の上、恐くは脫落あらんか

(二) 井華水 早朝第一の便水なり。

るべし、如し人を見ば其の人の呪力能く山を崩し海を竭さん、若し蟲獸を見ば、其の人呪力あらん(一)亦た若し玉を得ば其の人即ち是れ(二)初會の人、若し金銀を得ば、其の人呪に因て大いに富まん。若し刀仗弓箭の類を得ば、其の人壇の内に呪神を見ん、若し藥を得ば其の人善能く病を除かん、若し鐵石を得ば其の人畢竟して不退堅固にして無礙智を得ん、若し相を得已んなば、即ち齋戒を受けて別處の淨土を取れ、三尺の内の惡土を穿ちて、別して淨土を取採り、篩ひ擣いて香末に和して之を築け、(三)地を去ること尺三重、下は方にし上は圓にして開いて士二(四)閣道を作れ、縱廣四肘にして、五色の彩を以て四方に泥れ、下臺は白土を用ひ、香湯に和して其の壇上に塗れ、上は牛糞を用ひて香に和して壇上に塗れ、及び中央に舍利を安せよ、(五)白流璃の器の中に諸の香を内れ、舍利の四面に菩薩の座を安し、中央の壇の基に二十四の(六)澡瓶を安せよ皆な香水●蓮花●柳枝を盛れ、臺の東北の角に青蓮花の座を安して以て我を待て、東方に提頭賴吒の座を安し、東南の角に軍荼利の座を安し、南方に毗樓勒叉の座を安し、西南方に跋闍羅の座を安し、西方に毗盧博叉の座を安し、西北方に大青面の座を安し、北方に毗沙門天王の座を安せよ、基の下、壇を遠りてみな座を安すること總べて(七)四十九座、四十九盤、刀を竪つること百口、みな利きこと霜の如し、上頭の一基には刀を竪つること四十二口、中基には刀二十四口、下基には刀三十六口、基の下、壇を遠りて刀二十八口、箭一百枚を安せよ、上基には十二枚をけ、西面をば門とせよ、中基には二十枚、下の基の外に四器の水盆を安せよ、盆の中には花を内れよ、上の基には四の跋折羅を安せよ、下の基には槊と劒とを安せよ、中基には輪を安せよ、壇の外に棒十二枚、鐵杖八を安し、澡瓶十口に(一)柏葉を安し、食盤をば荷葉を以て之を作り、壇の西南の角に(二)地火爐を安せよ、中央は高く四面は下れり、蘇合と蜜と蠟とを燒け、上の基に一の香爐を安せよ、壇の上に於て佛舍利四枚を安し、呪師は面を東に向へて菖蒲の席に坐して跏跪して、手に香爐を執て而して啓請し訖て、即ち結界して、(三)華鬘の印を作り承け仰げよ、座定て已後、更に結界し竟りて即ち香を燒き花を散し食を施せ、次に西南の爐の中に(四)此て胡麻●粳米●蜜●酪●酥を燒け、幷に種種の飲食を燒き竟ていふべし、慙愧す一切の聖衆此の所に降臨したまへと。即ち大呪を誦すること一百八遍、手に杵を執りて地に印して之を誦し、或は弓箭を執らしめよ、鬼神立ちどころに至らん、其の法正月十五より始むるを上と爲す、餘の月の中には(五)下の七日

(一)亦たの下、恐くは脱略あらん。
(二)初會の人　未詳。
(三)地を去ること の下、恐くは脱略。
(四)閣　未詳、若しは闍の字か。
(五)白流璃　五色の瑠璃あり。
(六)澡　賢の字か。
(七)四十九座の下、恐くは脱略すべしか。

(一)柏葉　日本の白檀なり。
(二)地火爐　護摩爐なり。
(三)華鬘　恐くは是れ華座か。
(四)此　至の字か
(五)下の七日　二十四日以下なり、若し小の月は二十三日以下なり。

に壇に入て心を至し意を攝めて散亂を生ずること勿れ、其の夜即ち一の童子ありて現ぜん、三日の夜には十六の王子現ぜん、五日には大風塵起らん、六日の夜には(一)坐雨、七日の夜には我れ及び觀世音菩薩、幷に母、十方の諸佛●鬼神咸く壇中に入り、光明照耀し、壇上の弓刀自ら鳴り、水瓶自ら轉ぜん、我後夜に身を現ずる時に當りて、一切の鬼神亦たみな現ぜん、若し結界せんの時は、小兒婦人をして中に入らしむること勿れ、若し七日結界せば、七日に始て成せん、其の界成じ已んなば惡鬼神の、中に入て相ひ惱ますことなけん、若しは天の違する所、若しは乾陀婆の違する所、若しは阿修羅の違する所、若しは緊那羅迦樓羅の違する所、若しは羅刹の違する所、若しは風神●火神の違する所あらんも、悉くみな頭破れ粉碎して念を失せん、我れ千輻輪を以て其の鬼神の、其の衰害を作すものを轢らん、若し惡賊、界に入らば、界を護る鬼王、身を析いて殄滅せん、若し上の壇を犯さば大力士金剛、火を擧げて之を燒き紅腫せしめん、三日を經て蘇息せずんば(二)其の人此の法の如くならずして作さば便ち殃禍を受け、(三)七日、道場に入て一たび廁に上て一たび沐浴し、三時に衣を換へ、一日一夜六時に壇に入りて六時に行道し、頂禮すること七拜し、一日の平旦に一度結界せよ、

(一) 坐の字未詳。
(二) 其の人の上、恐くは脱字あるか。
(三) 七日の下、恐くは脱字あるか。

齋せんと欲する前に界を解し、夜臥して小界を結し護身せよ、一座に四十九遍を中となし、一百八遍を上となし、二十一遍を下と爲す、一日一夜すれば即ち能く己身を護ることを得、二日すれば能く家を護る、三日より已後は能く他人を護り鬼神を縛すること悉く得、語を出す所あれば即ち成ず、七日滿すれば一切の天王●阿修羅王●龍王●散脂鬼神●金剛力士●恒に左右に在り、若し七日にして成せずんば更に七日せよ、二七日●三七日乃至四十九日せよ、必ず成せん、若し大力の呪師と作らんと願はば、心に嫉害を生ずること莫れ、一切有情に慢心を作すこと莫れ、呪神の身を談說すること莫れ、百日を經ずして必ず成就せん、大力無邊に功德圓備し殊特第一にして位十地に霑はん、世尊、我れ今持誦者のために常に救護を作すべし、而して呪を說いて曰く　唵引(ハッタ)擊(ヤキシヤ)泮泮泮莎訶(ソハカ)、散脂迦(サンシキヤ)泮、摩訶散脂迦(マカサンシキヤ)泮、摩尼跋陀(マニバンダ)泮、摩訶摩尼跋陀(マカマニバンダ)泮、羅刹羅(アラキシヤ)刹泮、摩訶羅刹羅(カアラキシヤ)刹泮、藥叉藥叉(ヤキシヤ)泮、摩訶藥叉藥叉(マカヤキシヤ)泮、敕敕敕敕(チヨク)、縛縛縛縛(バ)、曳曳曳曳(エイ)、吽佉吽佉(ムキヤ)、火急曳(エイ)、莎訶(ソハカ)。

世尊、此の呪は極めて大神力あり、極めて威德あり、能く三千大千世界をして六種に振動し、四海枯渴し涌沸し、須彌山を碎いて微塵の如くし、山を移し流を住め、種種

の事業みな悉く充滿せしむ、若し鬼神毗那夜迦の、人の與めに障難を作す者、衰害を作す者あれば、此の神呪を以て彼の鬼神を擲つに、虛空に在いて而して復た下らず、惱害すること能はざらしめん、世尊此の呪は普ねく一切衆生のために護を作し救を作す、若し惡鬼ありて人の精氣を吸はん者、人の資產を害し人の財物を耗さんに是の如くの一切衆生の怖畏に悉く結界をなせ、當さに彼の惡鬼●惡人●惡賊をして、自ら消し自ら滅せしむべし、及び世間の鳥獸●艸木●礫石の能く害を含んで人を害する者をして、除滅して餘なからしめん、世尊此の呪は極めて威神あり、奇特猛利にして極惡無比なり、世尊、八臂の那羅延天神は、能く三十三天の身を內れて芥子の中に入るに、釋梵王をして都べて覺知せざらしむ、神力是の如し、世尊、彼の天神の如きもの、世間に滿つること稻麻●竹葦の如く、一一の天神心を同じ力を併せんに、我が此の大無邊神呪の威力を以て、彼の天神を擲ちて佗方世界に在かんに、彼の天神をして覺らず知らざらしめん、我が威力は自ら是の如く無邊自在なる元帥大將なり、若し善男子●善女人●國王●大臣、此の呪を受持せば、我れ當さに一切の金剛力士●天●龍●阿修羅王●四大天王●二十八部の藥叉大將軍●四十二部の羅刹藥叉王●羅刹●鳩槃茶王●乾闥婆王●緊那羅王●降怨鳥王●目眞鄰王●孔雀王●金翅鳥王●師子吼王●大梵王●功德大辯王●摩醯首羅王●三十三天王のごとき、一切の善神の各の百億の鬼神王を領せると與に、鎧甲を備具へて前後に圍繞して、其の人に隨侍して惡に遇はしめざるべし、世尊、我は是れ鬼神王の中の元帥大將にして、無邊自在の威力あり、能く外道●天●龍●阿修羅王●梵天王を摧伏す、若し犯すること有らん者をば、我れ當さに千輻輪を以て、其の頭を轢り破して、猶ほし微塵のごとくし、即ち斷滅せしむべし、世尊、若しは天龍、若しは一切の鬼神王、我が阿吒婆拘の名を聞かん者をば、而も迎へて奔走せん、何に況んや更に能く法に依て受持せんをや。世尊、若し此の神呪の名を聞かん者をば、便ち當さに恭敬禮拜し、或は復た合掌して讃歎すべし、何んとなれば、其の人先きに佛と深重に大因緣ありて、而も今生に於て重ねて是の呪を聞けばなり、世尊、若し能く誦せん者は、鬼神のために侵嬈せられじ、亦た橫病せず、狂死せず、壽百歲なるを得、百秋を見ることを得て惡に遇はしめじ。世尊若し人、此の呪道を行せんに、大呪師者と成ることを得ずと雖も、亦た能く種種の功德を成辨す、妙好の官位辯論比なく、王法枷鎖の難なく、刀杖の難なく、纏縛を解脫し幽暗を照明し、悉く一切の毒惡繫縛を滅し、狂象●

(一) 無盡意云云 傍義なれども此の文に由るに、元帥に二類あり、過去の因緣を說くは是れ實類なり。

(二) 原本になし、毗の字あるべし。

狂賊●虎●狼●師子、口閉ぢ咽塞がつて人を害すること能はず、故に名けて(一)無盡意菩薩の化身元帥大藏王甘露陀羅尼と曰ふ。世尊此の呪は衆生に於て功德なしといはば、(二)盧舍那佛畢に我がために之を印して、號して無邊甘露陀羅尼元帥神呪と爲したまふべからず。世尊此の呪を持する者十の大勝利功德ありて身に隨ふ。一には善く呪道を持して必ず無上の善道を獲、二には轉じて生ずる所の處に、意に隨ひて而も去る、三には在生驚かず、怖れず刀兵に傷害せられず、四には毒蟲●惡獸を畏れず、五には王法の繫閉を畏れず、六には怨家のために害せられず、七には去處障りなし、八には出す所の言敎人みな信受す、九には飢えず渴せず、十には臨終に八難を經ず、面り觀世音菩薩爲めに菩提道の記を與へたまふを觀る。世尊、此の呪を誦する者は、無量の殊勝の利益功德を獲。

爾の時に、會の中に一りの菩薩あり、名けて定自在王と曰ふ、衣服を整理し偏へに右の肩を袒ぎ、右の膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、世尊、我れ會の中の元帥大將阿吒婆倶を見るに、天龍八部の鬼神を率ゐ領し、鎧を備へ鉾を持して光明照曜し威神奇特なり、彼れもし怒を發すれば、諸の鬼神をして自ら消し自ら滅し、天地六變振動せしむ、世尊、此の大將は前身に何の三昧功德をか行じ、又た何の願を作してか今大威神力奇特の身なる、今此の呪を說くこと上の如し、四衆驚疑して之れ異あることを怪しむ、願くは佛、慈悲を以てために之を解說したまへ、我れ之を聞かんと欲ふ。

(一) 爾の時に佛、定自在王菩薩摩訶薩に告げたまはく、汝今諦かに聽け、我れ今彼の大將の往昔の行を說かん、善男子彼の大將は(二)空王如來の所に於て菩薩の行を修しき、其の佛の滅後末法の時に、衆生の福薄うして三年炎旱して赤地千里、流水枯渴し、一切の衆生本性を迷失し、飢渴のもの路に盈つ、時に彼の大將始めて白衣の行者たり、其の家大いに富めり、彼の衆生の是の如くの苦を受くるを見て、即ち妻子眷屬を捨て、身に故く破れたる衣を著し、水を擔ひ食を與へ、處處に行き廻りて人の飢渴を救ふ、是の如くの行を作して六十年が中に於て、而も休息せずして勤行す、遂に荒亂に遭ひて諸の狂賊の圍繞して執縛し呵責するに遇ふ、時に彼の行者自ら罪なきことを知りて、即ち自ら言く、今者群賊仰ぎ願くは我が手足を放して十方を頂禮し三寶に歸命せしめよ、我れ今年已に朽邁して將さに死せんとすること久しからずと。群賊之を聞いて即ち其の手足を放しつ、行者の菩薩踊躍し歡喜して即ち天に告して云く、十方の賢聖當さに

(一) 爾の時云云 以下は阿吒薄倶の過去の願を明す一向に過去の因緣を說くは實類ともいふべからず、觀音地藏の如き大聖も亦過去の因緣を說き玉ふことあり、是亦方便の示現なるべし。

(二) 空王如來 釋迦の所變なり。

辜なうして横に執縛せらるゝことを證知したまふべしと。此の語を發し已るに天地大いに動き、十方の諸佛雲集したまふ、而も彼の狂賊自ら迷慌して性を失し、地に悶絶す、時に彼の行者慈悲をもて捨てず、遂に便ち行者を執へて刀を引いて殺しぬ、行者終に臨むの日に大誓言を發さく、一切の賢聖當さに我が今日辜なうして横死することを證知したまふべし、願くは我れ此の身體を捨てゝ當さに大力勇猛の神と作りて、無量無邊の威をもて惡賊●惡人を伏し、極惡の天魔●鬼神を摧破すべし、若し十方世界の衆生、枉横あらん者をば、我れみな之を救ふて普ぬく安穩ならしめん、善男子、願力を以ての故に今無邊自在元帥大將と作る、諸神の中に於て最尊最上第一の身なり、故に元帥鬼神大將阿吒婆拘と名く。爾の時に定自在王菩薩、此の事を聞き已て偈を說いて讃歎して曰く、我れ元帥の名を聞くに、世間において苦厄を救ふこと、一切の大神の中に奇特にして比あることなけん、種種に身を變化して、而も衆生の苦を救ふと、我今往昔を聞くに、實に不可思議なり。

爾の時に定自在王菩薩、偈を說き已て坐して而も法を聽く、時に阿吒婆拘、佛に白して言さく、世尊願くは說く所の呪を智慧の人に付與して、然して之を誦せしむべし、若し(一)誦すること能はずんば、即ち之を行ずること勿れ、彼の衆生をして反つて殃禍を受けしめん。爾の時に佛、阿難に告げたまはく、阿吒薄拘元帥大將の此の呪は、極めて神力あり、能く諸惡を消除し衆生を擁護して利益する所多し、汝好く受持して廣く宣べ流布せよ、若し國土に衰禍ありて雨澤調はずんば、此の呪を以て四の城門の上に安せよ、即ち風雨時に順ずることを得、若し此の呪を持て國土を鎭むれば、四方の一切の鄰敵及び大臣逆心を起さず、若し逆を作す者あらば、三たび觀世音菩薩の名を稱せよ、即ち大元帥、一切の鬼神を召して雲を興し雨を降らし、其の刀劒を下ろして逆臣を滅せん、若し國王●大臣ありて此の呪を誦持せば、其の王の境土に惡人●惡賊及び諸の鬼神あることなけん。若し善男子●善女人此の呪を持せば、所在の處、當さに平吉なることを得べし、晝安く夜安からん、(二)作法の人は軍荼利の法に通ずべし、及び觀自在菩薩と(三)般若とも並びに得、阿難此の呪は極めて威力あり、四衆をして善く之を誦持せしむべしと。爾の時に大衆、佛の所說を聞いて歡喜し奉行しき。

(一) 誦する云云此の眞言は必ず暗誦して行ずべし、若し暗誦せざれば則ち効驗なし、即ち暗誦を勸むることは一心に誦念せしめんが爲めなり。

(二) 作法の人此の法は別して汚穢不淨妄念惡心を忌む、若し妄念等あらば吒那耶迦常に行者に從ふて散亂せしめて悉地成じ難し、故に常に軍荼利の法を行じて吒那耶迦を去くるを第一とす。

(三) 般若の下、恐くは菩薩の二字あるか。

國譯阿吒薄拘元帥太將上佛陀羅尼經修行儀軌卷上 終

國譯阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌卷中

唐大善無畏　内道場秘譯

此の呪本は又た中天竺國、王舍城(一)迦蘭陀長者林の中に於て之を說きたまふ。

爾の時に佛、無央數の天●龍●鬼神●阿修羅の與に、阿吒薄俱元帥大將の呪を說きたまふ、佛弟子の中に一りの比丘あり、出行するに忽然として恍惚として賊に衣糧を劫めらる、又た神鬼二萬五千の眷屬來り嬈まして、前進こと能はざらしむ、又た大蛇足を繞ふて螫されて悶絕して地に躃れ、口中より沫出でゝ、動くこと能はず、爾の時に大將、諸の眷屬の天●龍●鬼神●人及び非人●二十八部の藥叉羅刹●百千の呪王の與に圍繞せられて佛の所に來り詣するに、路にして比丘の大いに苦しむを見る、即ち迦羅陀竹林の中に至て佛を繞ること三帀し、佛足を頂禮して却いて一面に住して佛に白して言さく、世尊(二)以て極惡鬼神を降伏す、世人等我れに大神呪力ありて能く一切の鬼神を降

(一) 迦蘭陀　經律異相云く、是は鼠の名、時に毗舍離王山に入り樹下に眠る、毒陀あり出て王を害せんとす、樹下に鼠あり來て鳴て王を覺す王其の恩に感じて一村の食を以て山鼠に供す、乃ち此村を號し迦蘭陀と爲す、村中に一億長者あり、四十金を居たり、王即ち長者に之が號を賜ふ、此の村に由るが故に加蘭陀長者と名くと（取意）

(二) 以　或はいふ、此字の上下恐くは文句を脫するか。

伏す、唯し願くは、世尊、納受したまへ。時に、世尊、默然として之を受けたまふ、時に諸の天龍●鬼神●四天王●百千の鬼神王●百千の持呪仙人●百萬恒沙の鬼神●藥叉●羅刹兵衆●百千の阿修羅●百千の龍王●百千の鬼王を領して前後に圍繞して、幡花(一)戎器を執りて、神呪を說く、呪を說く時に當て四大海水涌沸し、大鐵圍山崩倒し、諸天(二)運運振動し、日月(三)當恐墮落し星辰流散し、百萬の惡鬼口中より血を吐き、東西に狂走し叫喚して地に倒れ、四方一時に雨下る、其の比丘を嬈す鬼神悉く舌を拔かれて血流れて地に灑ぐこと(四)波羅奢花の如し、若し善男子ありて此の呪を持せば、一切の鬼神隨侍し守護せずといふことなし、若し鬼神ありて隨侍せずんば、我れ當さに諸の鬼神を將ゐて、千輻輪を以て其の頭を轢り碎き、諸の鬼神をして爲めに擁護を作さしむべし、我は是れ鬼神の大將なり、力よく一切の諸の鬼神を降伏す、若し我が弟子の所至のは、一切の金剛密迹若しは鬼神二十八部の諸の鬼神、みな來て護助す、阿吒薄拘七十二の大將の首領ありて鬼神を掌握す、三十二の大神王●二十八の鬼王あり、一一の王各の二萬五千の眷屬を領して元帥大將に隨侍す、若し此の法を行せん者は、先づ一鋪の大力の神將を畫け、或は二幅●三幅●四幅の、上上の好絹をもて、八月一日より起て

(一) 戎器　ツワモノ。

(二) 運運　未詳。

(三) 當恐　恐くは誤ならん。

(四) 波羅奢花　其色極めて赤し、涅槃經に佛入滅の時大衆血の涙を出すこと波羅奢花の如しと。

畫け、若しは自ら畫き、人をして畫かしむることもみな得。先づ齋すること七日にして、即ち上妙の衣を着し、清淨に洗浴して即ち齋戒を受けよ、一の淨室に於て幡花を懸けて一の大火壇を作れ、高さ一尺壇の上にして(一)剛炭火を燒け、即ち白汁ある木一千八十段を取りて、胡麻・粳米・蜜・酪及び香花を取て呪を誦し、一呪一燒して此の物を燒き盡し已れ、即ち上妙の彩色を用て壇の上に安して呪すること一百八遍、膠を用て和すること勿れ、白檀の汁及び熏陸香の汁をもて之に和せよ、一たび圓に上ては一たび洗浴して、阿吒薄拘元帥を畫け、身は黒青色なり、身の長け(二)丈尺四面なり、當前は佛面に作れ、左面は虎牙相ひ叉ふ、三眼なり、眼赤きこと血の如し、右の面は神面に作れ、瞋相にして亦た虎牙相ひ叉ふ、三眼なり、左右に牙髭(三)髮を安し頭上の(四)一面は惡相に作り亦た三眼なり、虎牙相叉ふ眼赤きこと血の色の如し、最上の頭は赤龍を用て髻に纏ふ、火焔頂上に連り、聳えたり、身に蛇を懸け、八臂なり、左の上の手には輪を執り、次には槊を執り、次は右の第三の手と與に前に當て〻合掌して供養の印を作す、次の下の手には索を執る、右の上の手には跋折羅を執り、次の下の手には棒を執れり、次の下の手には印を作り、次の下の手には刀を執れり、即ち腕臂の上にみな蛇を纏へり、七寶の絞絡の甲を著、膊の上にみな龍あり、龍は膺胸の前に出でたり、(一)三面みな赤黄にして二眼なり口を合す、(二)其の上の左右の面みな(三)青黒奥色、上の面は黄白色、右の面は白色、左の面は赤黒色、前の面は青白色、手はみな青色、象頭の皮をもて(四)行纏を作り、脚に履を著き、二りの藥叉を踏めり、みな黒色なり、(五)其の神は極惡の相に作るべし、可畏雄壯なる前の如し、奮迅の形に作るべし、左右に四たりの侍者を作れ、左に提頭賴吒と毗樓勒叉とを畫け、右に毗樓博叉と毗沙門とを畫け、みな大瞋の相なり、七寶の花冠をき、身に(六)細金の甲を著たり、龍頭の臂釧天衣七寶の行纏及び履あり、脚に藥叉を踏めり、提頭賴吒は刀を執て之を按し毗樓勒叉は叉を執り、毗樓博叉は劒を按し、毗沙門は杵を執り、四天王は各の眷屬を領せり、東方の天王は乾闥婆將軍を領して鐸鈴を執る、南方の天王は鳩槃茶王を領して弓箭を執る、西方の天王は龍王を領して劒を執る、北方の天王は藥叉王を領して(七)伏突を執る、其の神の頭上に赤黒の雲起る、四方の天王の足下に(八)二童子を作れ、青衣に之を作れ、右のは紙筆を執り、左のは硯(九)槃を執る。神の前に一りの天人あり、香爐を頂戴して供養す、極めて鮮明淨潔に之を作るべし、所求意の如くならん。若し神現ぜんことを

(一) 剛炭火　硬き炭火。
(二) 丈　恐くは八の字。
(三) 髮　恐くは鬚の字。
(四) 一　恐くは二の字。

(一) 三面の上、恐くは脱文あり、又た面の字は頭の字か。
(二) 其の上左右等の前後恐くは脱文あるか。
(三) 青黒奥色　深青黒色なり。
(四) 行纏　ハバキなり。
(五) 其の神　本尊なり。
(六) 細　細の字か
(七) 伏突　未だ詳かならず、集經第十三には伏突刀といふ、然れば是も兵器ならんか。
(八) 童子　青衣にして、左右文の如し。
(九) 槃　盤か。

求めんと欲はば、七月七日、三月三日に一切の艸木の花を將て陰乾にして(一)穀花稻花酥酪蜜をもて之を燒け、一切の天神●八部の鬼神みな歡喜して身を現せん、凡そ壇場の高下●大小は力分に隨ひて作せ、若し高壇を作ること能はずんば平壇にても亦た得、地を穿つこと三尺にして惡土●瓦●石●樹根を去りて別に淨土を取て築け。先づ香を以て塗ること三遍、即ち牛糞を以て蒸して、惡土の氣を去り、其の汁を取て香泥に和し壇に摩り、五色をもて彩畫し(二)安し了れ。神の座の前に各各に食盤を安して供養せよ、四門に各の一爐の香を燒け、刀箭弓杖一ばら孔雀王の壇の法に依れ、繩をもて壇に繞せ、地に入ること一寸にして、白芥子を埋め、四角には香水の瓶ををけ、四門の角には鏡を安せよ、春夏には樹木●艸花を散し、秋冬には雜(三)彩の花を散せよ、一日一(四)夜に食を換へよ、出づるにも淨衣あり、入るにも淨衣あれ、廁に上りては洗淨し、廁を下りては一たび浴し、一日に一(五)度六時に壇に入りて呪を誦し、一度壇に入りては(六)七帀行道し、禮すること七拜し香花を執りて四方に諸佛菩薩●諸天善神八部に啓告して、手に花香を執り四方に啓請して云ふべし、弟子某甲、十方の諸佛●諸大菩薩●一切の賢聖を奉請したてまつる、天眼ある者(ヒト)は我を見たまへ、天耳ある者は願くは聞きたまへ、某の國の某甲、今道場に入る、願くは諸佛菩薩●一切の賢聖、弟子を證知したまへと。頂禮すること七遍して、啓告して自ら思想せよ、其の聲周遍(あまねく)十方諸佛の前(みまへ)、天龍八部の前に聞えて以て召信と爲ると。即ち香を燒き花を散して悲泣し、(一)懺悔し供養して、三たび我が名を稱せよ、南無阿吒薄拘鬼神大將、願くは大慈悲を與して眷屬を將ゐ領して我が道場に入りたまへと。即ち香を燒き心を專らにして供養せよ、我れ爾の時に於て天龍八部●一切の鬼神を召集して道場に入らん、入るの時に當りて道場內の百物自ら鳴り、天下大いに風ふき塵起らん、一の大叫聲ありて、狀天の崩るゝ聲の如くならんも、行者怖るゝこと勿れ、聲を出す時に當りて四海涌沸し須彌山振動し、一切の蟲獸みな怖れて馳走せん、或は我れ菩薩の形と作ると見、或は我れ大將の形と作ると見、或は我れ金剛大怒の形と作ると見、或は我れ帝釋の形と作ると見ん、皆な怖懼すること勿れ、但だ呪を誦して供養せよ、或は語し或は語せず、みな禮拜して求願せよ、我れ其の願を與へて、時に重ねて氣力を與へて歡喜を得しむ、或は天下の虛空に鬼神戎器杖を執るを見ん、俱に之を怖るゝ勿れ、道場に入りて皆な我が部錄官屬を呼ぶべし、手に香爐を執りて、跪跪して(二)敬心せよ、南無佛陀耶、南無達磨耶、南無

(一) 穀花稻　稻穀花か。

(二) 安し了るの上下、恐くは脫文あらんか。

(三) 彩　綵の字か。雜綵花は種種の造花なり。

(四) 夜　度の字か。

(五) 度　夜の字か。

(六) 七帀行道　口傳に先づ道場に入て大壇を遶ること三帀、一帀毎に弟子某甲等の啓請の文を唱ふること一遍、禮拜も口傳にして三禮なり。

(一) 懺悔云云　五悔の次に本尊の名號奉請の文を稱して三度禮するなり。

(二) 敬心　敬白のことか。

僧伽耶、南無一切十方諸佛、南無二十八部鬼神大將軍、我れ悉く汝等に歸依す、今者、我れ此の呪章句を說かんと欲す、我が願ずる所をして意の如く吉を成せしめよ、一切の諸の鬼神等の上方・下方・東方・南方・西方・北方・羅に住する者我今汝を留む、汝當さに集會すべし、我が使ふ所に隨へ、金剛密迹・護塔善神・摩醯首羅・三十三天王・大自在・那羅延・及び毗紐天王・大辯王神・鬼子母神・五羅官屬・大鬼神王・及び其の眷屬の天魔波旬・散脂大將・摩尼跋陀・摩訶迦羅・旃陀羅摩尼・及び摩登伽・堅牢地神・曇摩羯娑羅・毗摩質多羅・阿耨達王・目眞鄰王・伊鉢達吒王・諸持呪王・大(一)辯天王・善女功德天王・十四羅刹・黑闇天王・孔雀王・大金翅鳥王・降怨鳥王・妙音蜂王・師子吼王・大善見王・乾闥婆王・緊那羅王・毗舍闍鬼王・槃叉大將・布單那王・頻婆素囉鳩槃茶王・辟除精魅噉鬼神王・廿八部一切神王・參辰日月・諸天善神・南斗の生を注るし、北斗の殺を注るす天曹・天府・太山府君・五道大神・閻羅大王・善惡童子・司命・司祿・六道の鬼神・山神王・海神王・風神王・樹神王・水神王・金神王・今みな明かに聽け、汝等我が香花飲食供養を受けて弟子某甲及び諸の眷屬を擁護して、作法求願、意の如く吉を成せしめよ。道場に入らんと欲はば、安息香を燒いて三たび神の名を稱せよ、即ち目を閉ぢ思を存し、如は杖を執りて壇に

(一)辯　未詳。

入り竟りて、淨水を呪すること二十一遍して四方に散灑せよ、然して後に壇の四門に於て香を燒き、壇の外に盤食を安して、諸の鬼神に與へて喫はしめよ、壇の內に一器を安し、石蜜の漿、石榴の漿、蒲桃の漿、蜜漿、麵漿、米飲漿、梨漿、各の一器を置いて壇の內に安し、香湯を四門に安せよ、四角の外には柳枝四十一を安著せよ。壇の上に跋折羅・火輪・叉・槊・杵を畫作して、米飲一器・酪一器・薄餅四十九枚ををけ、然して後に結界せよ、手には香爐を執りて口には三世の佛の所說の神呪救衆生陀羅尼を云ふべし、是の如く三たび稱せよ、大結界の法は一に孔雀王の法に依れ、各の三遍了て然して後に小結界せよ、刀を呪すること一百八遍して手に執りて地を畫して界を作せ。又た灰を呪して三重に壇を圍め、又た白芥子を呪して四方に散し、又た白土を呪して四方に散すること總じて訖りて、齒を叩くこと三下して、大刀を執りて確然として結界せよ、東北の角より東南の角に至るまでは、此は是れ東方乾闥婆王の所住の處なり、提頭賴吒官屬・鬼神・大將軍を將帥して東方を守護す、東南の角より西南の角に至るまでは、此れは是れ南方鳩槃茶王の所住の處なり、毗樓勒叉官屬・鬼神・大將軍を將帥して南方を守護す、西南の角より西北の角に至るまでは、此れは是れ西方の龍王の所住

の處なり、毗樓博叉官屬●鬼神●大將軍を將帥して西方を守護す、西北の角より東北の角に至るまでは、此れは是れ北方の夜叉王の所住の處なり。毗沙門官屬●鬼神●大將軍を將帥して北方を守護す、此の(一)四天界を結する呪に曰く　耶婆增底、耶盤底、他底他落已、斗樓斗樓弭、莎訶。呪すること二十一遍せよ、解界には曰ふべし、此の中に繫縛を被る鬼神、我今界を解す、汝が意に隨ひて去ることを聽すと。凡そ界内に在るには先づ淨水を以て口を漱ぎ、柳枝を以て口を淨む、爾らざれば人をして驗を失せしむ。

復た次に(二)畫像の法あり。凡そ衆生の病を救ひ、一切の所求を與へんと欲はば、先づ(三)一舖の神將の像を畫作せよ、上上の好絹を以て高さ八尺にせよ、大怒の形を作り四臂あり、左の上の手には千輻の大輪を執り、右の下の手には大怒の印を作れ、大母指を以て中指●無名指の中節の上を押し、小指●頭指直く膝に竪て、左の下手は胯を托し、右上の手には跋折羅を執り、七寶の冠瓔珞あり髮を結び黴黑く眼白く怒り瞋りて看ること鈴を懸くるが如し、上の唇を以て下の唇を囓ひ、身を擧げて皆な(四)青黑奥色にして、(五)大蟲の皮を以て褌を作り、脚に二りの藥叉を蹈んで鞋を著しめよ、唯だ大雄迅

(一) 四天界　是れ四天結界なり、本法は壇の四隅に四人の壯子を置き、各甲冑を著け兵器を執らしめ修行するなり、今(日)只其の表示のみ、大刀を執らしむとは利劍を持たしむるなり。

(二) 畫像の法　三通あり、常には青衣童子ある像を畫く。

(三) 一舖　一枚といふ程の事なり、舖は數くと訓ず。

(四) 青黑奥色　深玄色。

(五) 大蟲　虎のこと。

殺命可畏の形に作るべし、左右に二りの天女を畫け、七寶の冠、瓔珞あり、(一)憍奢耶衣を著る、一りは筆を執り一りは硯を執る、足の下に二の青衣の童子を畫け(二)案を執れり、左右に十六の侍者あり、十六の侍者の左右に各の一の(三)師子を作れ、尾竪立つ勢にせよ、左右に四たりの金剛を畫け、大青面●(四)火頭●摧碎●蘇悉地なり、皆な四臂に作れ、手に輪●杵●棒●鉾を執れり、次に天魔波旬を畫け、白衣冠にして面は青黑色瞋相に作れ、左の手には輪を執り、右の手には倒しまに阿黎樹を拔いて臂を繞ふこと(五)三重、次に散脂大將軍を畫け、衣甲頭(六)鉢を著け、(七)右の手には索を執り左の手には劍を執りて、住立せり、次に毗摩質多羅阿修羅王を畫け、六手なり、二手の掌には日月なり、餘の四手には斧●鏘●杵●索なり、次に(八)羅刹を畫け、十六手八面なり、前には三眼、餘には二眼、左は猪頭に作り、右は馬頭に作れ、餘は羅刹頭なり雲火を吐き悉く大いに口を張り、手悉く戎器仗●刀●劍●輪●槊●鐵棒を執る、次に龍王四箇悉く龍冠なり、甲を著刀を執れり、次に須らく鬼神藥叉羅刹四たりを作るべし、毛衣なり、齒は刀の如く、目は赤うして血の如し、爪は利して畏るべきの形なり、右には四の金剛密迹を作れ、軍荼利金剛は六臂手なり、頭悉く焰聳え上れり、二手に印を作る、杵を執り棒を執り

(一) 憍奢耶衣　野蠶衣なり。

(二) 案　机の類。

(三) 師子　一の師子は伏し一の師子は立つ。

(四) 火頭　烏瑟沙慶。

(五) 三重　恐くは三帀のことか。

(六) 鉢　恐らくは髮か。

(七) 右の手等　恐くは左索、右劍なるか。

(八) 羅刹　或は須葉に作る、上に槃天羅刹といふは是れか。

跋折羅を執り、杖を執れり。次に烏樞沙摩將軍を作れ、衣甲を著、手を以て相ひ叉へ目を怒して下し看て口を張る。次に須らく四箇の天王を作るべし、金光の甲を著、杵を執り旛幡を執れり。次に摩尼跋陀を作れ、衣甲を著、弓箭を執れり。次に四たりの藥叉王を作れ、大蟲の皮を被、髮亂れて蓬の如し、五眼あり、牙相ひ叉へて鼻に至る、眼白く爪は虎爪の如くして長く利し、四手あり、一は鏘を執り、一は火を(一)執り、一は叉を執り、一は刀を執れり。次に摩訶迦羅を作れ二手あり、(二)二眼を作れ、伏突を執り脚に毗那夜迦を蹈ましめよ、悉く雄壯可畏なるべし、七寶の花蓋を作れ、蓋の左右に大辯天●功德天を作れ、雲に乘れり、功德天は盤の內に櫻桃を安し、大辯天は盤の內に七寶の花を散ず、二の青衣の童子の中央に、七寶の香爐を作れ、彩色は上上好の者之を用ふ、畫人は戒を持せよ、五辛を食すること勿れ、若し食せんと欲せば、我れ跋折羅を以て其の心上を剌して、畫人の口中より血を流さしめ、八大金剛、頭を析り碎いて破して七分にせん、若し清淨に用心して畫せば、我れ其の人をして恍惚として知らざるに自ら其の神相を得しめん、即ち畫人をして横の財寶を得せしめん、若し大怒形を作さんと欲せば、即ち大怒將形に龍の鱗甲を着、七寶の金鏁の頭冠あり、

(一) 執りの下、脫文あるか。
(二) 二 恐くは三の字か。

脚に列鞋を著け、二の羅剎を蹈めり、悉く毛衣を著、七寶の瓔珞あり、侍者一に怒身の如し三面なり、左の面は赤くして眼大いに怒り、面長く作れ大口を張り、右の面は黃にして目圓く大なり、上の唇は下の唇を齧み、前の面は青くして大悲の菩薩の形に作りて口を合す、左の手は胯に托き、右は印を作る、即ち頭指を以て直くに前に向へて指す形にせよ、頭上の空中より花を散すること雨の如く、一一の神の後に各の藥叉旗幡を執り、一鋪に總べて一百人なり。

(一) 若し一切の所求みな吉なることを得んと欲はば、即ち菩薩の形を畫き、一に虛空藏菩薩の形を作れ、頭に七寶の花冠を戴き、二手あり、一の手には蓮花を把り、一の手は施無畏、面目長く作れ、唯だ大慈悲に作るべし、侍者四人●使者八人、又た前の金剛と四の侍者と散脂と阿修羅と二の龍王とを作れ、龍王は刀を執り、修羅は前に作る、散指は弓箭を執る、一一の神の後に一の鬼あり、旗幡を執る、天女を用ひず、二人を作れ、狀飛天の如し、仙形にして花盤を擎げて立て供養す、其の壇の中央に二面の食器を安せよ(二)一習に出乳を言ふなり。(三)水生に和して供養を用ふること勿れ、花樹一百莖、高さ二尺、壇の內に二十八口の神幡を安す、二十八部の將軍に像りて界を護らしめよ、小界の內に

(一) 若し云云 已下又の像法。

(二) 一習云云 未だ詳かならず。
(三) 水生 蓮華なり。

五方に雜色の幡を安し、五色の幡十二口、竹竿の上に之を懸けよ、壇に入りて一宿す、即ち能く人を縛するに、縛せ遣れば即ち縛す、放さ遣ることも遮せずして之を護る、上の(一)利人は三日に神現前す、中の利人は七日、下の利人は三七日、若し其れ神を見ざるは自身の内障なり、即ち發露懺悔せよ、人を瞋罵すること勿れ、誦數多しと雖、氣力を得ず、一死の後永く地獄に沈んで別に楚痛を加へられ、佛の出世に逢ふて然して始めて免ることを得、畜生の身を受けんも猶ほ王と作ることを得、雄猛にして比なし、口恒に合せず、多聲にして遠く叫ぶも人見るを(二)用ひざるなり、齋戒すること能はざらん者も、第一に酒肉五辛を食することを得ざれ、一切の病人も亦た之を食することを得ざれ、若し五辛を食せん者をば、金剛舌を拔いて出して頭を析いて七分に作さん、誤りて之を食せば忽ちに牛糞の汁を取て(三)斗に喫して、懺悔して觀世音菩薩の名を念ずること一百八遍せよ、復た我が呪を誦すること二十一遍して、水を呪して洗浴せよ。若し病を治せんと欲はば、先づ一の淨房室を取り、四壁は香泥一遍し、房内の地は總べて牛糞泥を用て之を泥り、六肘の(四)長存壇を作れ、高さ三寸、四門を開いて繒幡蓋を懸け小結界し、兩口の刀を竪て、十隻の箭、七器の漿、朝夕に衣を浣へ、

(一) 利　未詳。

(二) 用　願の字か

(三) 或はいふ、斗の上。恐くは一字あらん。

(四) 長存　未詳。

飲食・菓子は法の如く供養す、二十一箇の花樹あり、壇に(一)紫座の契を安し、呪師を安し、西に面して四天王の座を安し、四角四門に香爐を安し、葉座には龍王を坐せしめ、金剛の座を安し、二十八部の將軍の座を安し、中に大將の座を安し、菩薩・佛の座を安して、朝夕に禮拜せよ。

南無釋迦牟尼佛　南無十方三世一切諸佛　南無觀世音菩薩　南無上方諸天王帝
南無一切賢聖　南無鬼神大將阿吒薄拘　南無大梵天王　南無一切金剛力士
南無四天大王　南無二十八部藥叉將軍　南無四十二部羅刹娑乘。

今悉く汝等に歸依す、今我れ此の如くの呪章句を說かんと欲す、我が呪法をして如法に吉を成せしめよ、一切の諸の鬼王等の上方下方四維虛空、地及び水に在て居する者、大力の藥叉王各の皆な明かに聽け、我今汝を召す、汝當さに集會すべし、我が使令の所爲に隨へ、昆弟藥叉大將・拘吒齒藥叉大將・旃荼藥叉大將・翳羅葉藥叉大將・質多羅藥叉大將・苦跋羅藥叉大將・吠牽怒藥叉大將・大力藥叉大將・蘇跋吒拏藥叉王・大辰藥叉大將・將乾軍闥婆藥叉大將・勃利沙藥叉大將・自在・那羅延・曠野・金毗羅・僧愼爾耶藥叉大將・正了知鎭軍藥叉大將・摩尼跋陀藥叉大將・阿利陀藥叉大將・寒葉藥叉大將、汝等我が香

(一) 紫座　審かならず。

花●飲食の供養を受け、及び諸の眷屬我が使令する所に任せて成就を作せ、但し病を治せんと欲はば平旦に(一)百和香を燒いて、神名を誦すること七遍、二十八部の藥叉大將の名二十一遍して、舍を繞りて白芥子を散して界畔を作せ、若し鬼病あらば人多少を問はずして神自ら縛し自ら打たん、人の語を須ひざれ、行者但だ急急といへ、(二)羅法猫鬼狐魅●精魅には、當さに呪すること二十一遍すべし即ち差ん、(三)若し婦人あり て病を治するに、未だ必ずしも須らく夫をして相逐はしめて與に治すべからず、(四)爾らずんば治すること勿れ、若し治せば笑ふこと勿れ、相向ひ了て即ち去らしめよ。一には若し(五)精鬼病を治せば、當さに青面尼藍婆(ニランバ)の官屬を使ふべし。二には魅病を治せば北方毗沙門王を使ふべし。三には神病を治せば、大摧碎金剛力士を使ふべし。四には魍魎病を治せば、西方の天王を使ふべし。五には鬼病を治せば、摩訶迦羅大神王を使ふべし。六には猛鬼病を治せば、南方の天王を使ふべし。七には瘦病を治せば、(六)摩登伽大神力天王を使ふべし。八には(七)骨蒸病を治せば、鳩槃茶王を使ふべし。九には白虎病を治せば、摩醯首羅天王を使ふべし。十には怨家を治せば、毗舍遮鬼王を使ふべし。十一には若し鬼をして散走せしめんとならば、金剛密迹を使ふべし。十二

(一) 百和香　香氣の勝れたるものを多種和合するが故に百和といふ、必ず一百に限るにあらず。

(二) 羅法　詳ならず。

(三) 若し云云　若し上の如く人の病を治せん時、女人の病を治せば女人の許に對することなかれ、必ず男子の證明を殺くべし、若し女人ならば治すべからず。

(四) 爾らず云云　已下の文恐くは脫誤あるか。

(五) 精鬼病　傳尸病なり。

(六) 摩登伽　遮文茶なり。

(七) 骨蒸病　勞瘵病。

(一) 同力　詳かならず。

(二) 牡　將の字か

(三) 散脂　或はいふ、恐くは摩尼の前にあるべきか。

(四) 王　女の字か

には一切の惡獸を伏せんとならば、師子吼王を喚べ。十三には天行病氣を治せんとならば、白黑龍王を喚べ。十四には一切の毒蟲を治せんとならば、降怨(一)同力鳥王を喚べ。十五には若し鬼を打たんとならば、黑闇天王を喚べ。十六には諸龍を治伏せば金翅鳥王を喚べ。十七には若し毒蛇を治せば、大(二)牡鳩槃茶を喚べ。十八には魔鬼を降すには天魔波旬を呼べ。十九には樹精を降伏せんには火頭金剛を使ふべし。二十には內病を降伏せんには軍荼利を使ふべし。二十一には若し盜賊を辟除せんには、摩尼(三)散脂跋陀を喚べ。二十二には山神を降伏せんには目眞鄰王を喚べ。二十三には生を興し利を求めんと欲はば、功德天(四)王を喚べ。二十四には身に隨ひて出入せんと欲はば、十四羅刹娑王を喚べ。二十五には若し一切決せずんば、當さに我れ阿吒薄拘大將を喚ぶべし。

凡そ神を使はんと欲せば、みな須らく志心に頂禮すべし、神王を慢すること勿れ、使ひ了て又た禮して云ふべし、慙謝す供養なしと、頭を叩いて哀を求めよ。

凡そ呪を誦せんと欲せば、洗ふに淨水を以てし、口を漱ぐこと七遍、平旦に人を禁じて井華水を取り、銅器に盛りて面を東方に向へて九過之(コノヲヒ)を咽(の)め。

凡そ病を治せば齋前に總て了て神を放ち散せよ。

凡そ人を禁じ竟て、即ち(一)六道を使して並に悉く之を知らせよ。

凡そ持念者呪力を得了んなば、心に隨ひて之を用ふるに、一を以て萬を治すること、此を知るべきのみ。

一法。若し人、牙齒疼痛を患ひて忍ぶ可からずんば、刀を以て之を指すこと三遍せよ、即ち差ゆ。二法。若し人、心痛を患へば、刀を以て之を指せ即ち差ゆ。三法。若し人、帶下の病を患へば、頭痛●目疾を患へば、刀を以て之を指せ即ち差ゆ。四法。若し人、痔病を患へば、刀を呪し已刀を呪すること一百遍之を指せ即ち差ゆ。五法。若し人、(二)痢を患ひなば、井華水を呪すること三遍し、與めに之を飲ましめよ。又た刀を以て臍の下を剌せ即ち差ゆ。又た呪師手に女人を犯觸せず、又た五辛を犯せずんば、刀を用ふることを須ゐざれ、直ちに手を以て拳に作りて以て頭指を申べて一切の病を指せ、手の下に即ち差ゆ。七法。若し一切の虎狼●師子●野干を見ば、指を以て之を指せ、即ち閉塞して人を害せず。八法。若し虎●狼百姓人民を暴亂せば、手印を以て之を指し曰に

(一) 六道を使云云 詳かならず。

(二) 痢 胎の如來臍の眞言を誦すれば即ち愈ゆと。

云へ、百獸諦かに聽け、上帝の敕旨を奉はれと。虎狼之を聞いて即ち伏して起じ。九法。若し鳥相捉らば、手を以て指せ、即ち相害せず。十法。若し大人に吠ゆれば、手を以て之を指し、即ち地に於て師子吼王の虎を捉ふるを畫け、犬即ち性を失して去る。十一法。若し遠く行かんと欲せば、呪すること二十一遍して行去せよ、即ち足痛まず亦た疲乏せず。十二法。若し法を持するの人、呪を誦して海に入らば、水神之を捧げて之を度すべし。十三法。火を呪すること三遍、齒を叩くこと三遍して口に云へ、火神光を忌むことなしと、急急に而も之に入るとも火に燒かれず。十四法一。三人をして敬念せしめんと欲せば、二一切の四合歡の花葉及び子を取て搗き末し、熏陸香の汁を取りて、和して一丸にせよ、丸は彈子許りの大の如し、刀を以て割破て兩片に作りて、(三)二の方紙の上に前への人の姓名を書き、一紙の上に自ら名を書き各の一片之を帖し、即ち兩字の面を以て相向へて之を合し、呪すると三遍して口に云へ、某甲急に某甲を逐へと。夜の初分の時に參辰を使はして追はしめ、又た拜すること三拜せよ、其の前人即ち性を失して來らんこと疑ひなけん。十五法。若し一切の惡人を、屈伏せしめ和解せしめんと欲せば、前づ一の木人を作れ、長け一寸、木人をして面を北の壁に向はし

一、三、二、四 亂脫

(三) 二 一の字か

め、呪師は面を東に向へて、呪を誦すること一百二十遍して、日に一掬の土を進めよ、木人沒盡せるられば、其の人即ち盡く伏せられ來らん。十六法。一切の口舌の人を斷せんと欲せば、心を精うし意を用ひよ、効あらざることなし、紙上に惡人の名を書き、符を伏して衣領の中に安せよ、人見て歡喜す。十七法。兵死の人の血を取て惡人の名字を書き、又た惡人の形を書いて、符を以て口中に安し口中に含め、一切の惡人便ち(一)賴舌自ら肚に入る、碓の尾の下に結び著けて、意に隨ひて之を舂け、三日の内に惡人自ら縛して休まず。十八法。(二)末沙を以て(三)苦酒に和して惡人の名を書き、脚底に著いて蹈め、語せざれ、唇青く面り見る者之を罵つて去り始めて休む。十九法。若し鬼神を追はば符を座前に安し、物を以て之に合せよ、鬼即ち來る、若し去らしめば即ち去る。二十法。二十八部衆(四)落の鬼を追ひ、符を書して之を合せ三呪し九たび齒を叩け即ち來る。二十一法。若し起方鬼を追はば、符を書いて物の下に安し、三たび之を呪せ即ち來る。二十二法。若し浮游鬼を追はば、符を書いて之を合せ即ち來る。二十三法。若し一切の閻浮提鬼神王を召せば、三杯の乳、二杯の飯、二杭の餅子を盛り、熏陸香を燒いて、而も但だ名を呼んで之を祭れ、一時に青衣の人來ることあり、

(一) 賴　未詳。
(二) 末沙　末沙(梵)は毒なり。
(三) 苦酒　醋なり
(四) 落　剩字か。

須臾に並に至る。二十四法。一切の虎●狼百獸を集めんには、符を安し之を合せ、一切の虎●狼●蟲●獸自ら至りみな集る、符を出して放てば即ち去る。二十五法。符を結び樹の上を印せば、一切の飛鳥みな來り集る、符を去れば還り去る。二十六法。符を安して水を呪して之を飲まば、人をして忘れず聰明ならしむ。二十七法。符を執りて官長者を見ばみな悅ぶ。二十八法。外人遠きより來至することを得んと欲せば、摩訶迦羅をして往いて之を取らしめ、後ち作法して符を安して之を合せば、其の人覺えざるに即ち來る。二十九法。右の手の頭指を呪し之をもて女色を指せば、念を止むるを得男子を念はず。三十法。刀を呪して舟を指せば(一)發人外身の如く即ち止る。三十一法。刀を以て樹木を指して之を呪すること一千遍せば、樹自ら拔出す。三十二法。刀を呪することと二十一遍して惡腫を指せば、當下に即ち除かん、或は四十九遍一百八遍せよ頓に之を滅せん。三十三法。刀を呪すること二十一遍して飛鳥を指せば、毛の落つること雨の如し。三十四法。刀を呪すること二十一遍して、遠く行かんと欲せば、四方に之を托け即ち障礙なけん。三十五法。山川に入らんと欲せば、刀を呪すること二十一遍して之に入れ、惡獸の難なし。三十六法。若し惡瘧●鬼病あり、或は二日に一た

(一) 發人　未詳。

び發り、或は三日に一たび發らんに、但し瞋怒して之を呪せよ即ち差ゆ、若し止まずんば呪すること三遍して即ち自ら語して而も去らしむれば、即ち除愈することを得ん。三十七法。若し蝎に螫されんに、生薑を呪すること一遍して搗いて之を傅けよ、即ち差ゆ、三十八法。若し蜂に螫されんに、刀を呪すること三遍して之を擬せ即ち差ゆ。三十九法。若し蛇に蠱されんに、鹽湯を呪して之を洗浴せよ、即ち差ゆ。四十法。若し厭蠱を被らんには、呪すること二十一遍せよ、茅艸を以て之を掃へば散じ、即ち將さに(一)云に差ゆ。四十一法。若し鬼神降伏しがたくば、驢夜眼皮を香爐の中に燒いて、鼻の下にして之を薫ぜよ、即ち伏し自ら倒れ自ら語らん、若し罵りて休まずんば白芥子を呪して燒け、並に面上を打てば伏して血を吐く。四十二法。若し龍、惡風雨を行じなば、刀を呪すること四十二遍して雲中を指せば、即ち血下り或は光出づ。四十三法。若し人口訥ば、朔日毎に刀を以て口を刻し、三度に過ぎざるに即ち差ゆ。四十四法。若し蜘蛛に咬るれば、降怨烏王を喚んで之を啄ましめよ即ち差ゆ。四十五法。若し時氣病を患へば、刀を呪して口の上を刻し、並に水を呪して之を吼くに即ち差ゆ。四十六法。若し鬼神の病を呪さば、姓名を知て刀を以て往き、即ち忽ちに之を打つこと三度、即ち差ゆ、收へて(一)南斗の獄に付與し、後七日にして之を放せ。四十七法。若し人相ひ爭はば、之を呪せよ和解せん。四十八法。蛇を呪すること三遍せば人を傷けず、取て衣の中に內るゝことも亦た得、之を放せば即ち去る。四十九法。或は惡獸に逢はば瞋怒して之を(二)咄せよ、即ち性を失して倒れん、但し呪を誦して神力を得る者は、水に入りても溺れず、火に入りても燒かれず、官に入りても瞋られず、虎穴に入りても傷けられず。五十法。若し夏月を呪すれば能く雨をして下らしむ。五十二法。星辰を呪すれば散滅することを得。五十三法。日月を呪すれば光なからしむることを得。五十四法。盜賊を呪すれば遠にまれ近にまれ自ら縛して來り投ず。五十五法。牛を呪すれば行かざらしめ、亦た水艸を食はざらしむるこ一と月すれども死ず。五十六法。水を呪すれば湯乳となることを得るなり。五十七法。或は高山の頂に於て一百八遍を呪せよ、即ち惡鬼藥叉ありて來らん、呪者之を看ること勿れ、須臾の間に即ち恒沙の鬼之を圍繞す、呪者之と語ること勿れ、須臾に一もなけん、後に於て行者、刀を呪して能く山を移し流を住め、外道を摧伏して、一切の神能く敢て當ることなけん、若し鬼行者を見ること我が如くにして

(一) 云　立ちどころの字か。

(一) 南斗の獄　南斗北斗は人の善惡を注する者なり。

(二) 咄　叱るなり

異なけん。(一)五十八法。石榴樹を呪すること一遍して、手を以て之を按すれば、鬼是れ刀なりと見る。五十九法。邪師を呪するには多少を問はず、刀を以て鬼を畫して之を圍めば、悉く縛を被りて啼泣して言を說くなり。六十法。病人を呪せんに、差えがたきは先身の業重きなり、即ち觀世音菩薩を請して之を度し、觀世音菩薩を畫いて、滅罪の印を以て之を印す。六十一法。魔の病を治せんと欲せば、當さに不空羂索菩薩を稱すること三聲すべし、病累除差す。六十二法。他家に於て病を治せんと欲せば、(二)竈君を追ふて之を問ふべし、即ち吉凶を知らん、若し實ならずんば南斗君をして之を打禁せしめよ、其の女即ち善惡を報せん一、三他に二凡そ四人病あるに、信ある者は之を治し、不信の者一闡提なり、治することを須ひざれ差えがたし。六十三法。但し水を呪して之を吼くに、一切の病人亦た除差することを得。六十四法。若し婦人子なくんば、淨潔に洗浴せしめ、至心に三寶に歸命せしめて、白芥子一粒を以て之を呪すること一千八遍して之を呑ますれば、即ち兒あらん、又た若し我が弟子ならば、我れ自ら護持し、非人の能く其の便を得ることあることなけん、一切の鬼神の中に於て、恭敬の心を作せ、一切の呪師の中には兄弟の心を作せ、恒に平等を行せよ、高心なること

(一) 五十八 石榴樹三尺二寸にして加持して手を以て之を按し刀刃を摩るなり。

(二) 竈君 釜の神

一、三、二、四、飢脫

勿れ、我慢すること勿れ、又た一切の鬼神の中に於て善知識の想を作せ。六十五法。若し婦人の產すること難うして、命終せんと欲するに臨まば、(一)吉日帝輿子司命止ること勿れ、呪索を作りて頂戴せしめよ、即ち產せん。六十六法。若し牛馬の疫起らば、土を呪すること一百八遍して身の上に散せよ即ち差ゆ。六十七法。若し淋病を患へば、赤銅鐵を呪すること一百八遍して、煮て汁を取り服せよ即ち差ゆ。六十八法。若し人を縛せんと欲せば、印を用ふることを勞せざれ、但し至心に呪を誦せよ、即ち縛せ遣むれば即ち縛し、打た遣むれば即ち打ち、人の心に順ふことを得るなり。又れ我今、佛のために化を揚ぐ、故に菩薩の身を變じて降伏瞋怒の身と作る、我れ親たり佛前に於て自ら功能を說くに、佛即ち我が神印の行用を受く、當日同時に即ち大怒金剛、摧碎鬼の呪を說き、觀世音菩薩、羂索の呪を說き、四大天王、四方滅鬼の呪を說かん、(二)五道

又た我れ一切の鬼神●藥叉●羅刹●天●龍●阿修羅●金剛の中に於て、元帥として諸鬼の總管たり、佛法末の後に於て衆生を護念して並に安穩ならしめん、我れ三千大千世界の衆生を看ること猶如し一子のごとし、惡鬼神をして衆生を暴亂せしめじ、若し鬼神あり

(一) 吉日等 未だ詳かならず、或は告日にはあらざるか。

(二) 五道の下、恐くは字句を脫するか。

て呪師を惱亂せば、我れ當さに百萬の鬼王羅刹の軍衆●百億の藥叉●天●龍●阿修羅●八部衆鬼神將軍を帥ひ、四大天王をして各の百億の鬼神を領せしめて、前後に圍繞すべし、經る所の處は山川震裂し、百鬼自ら奔らん、我れ爾の時に於て天●龍八部鬼神に告げて大雨を降注し、大風雲を起して悉く天地に滿つべし、我れ瞋怒の時に當りて、日●月光色なく、雷●電霹靂し百艸自ら死れ、一切の衆生孔穴に奔らん、然して後に金剛杵を以て惡鬼神の頭を碎き、破て微塵の如くならしめんに、諸の衰害を作す諸の鬼みな怖れん、毗那夜迦の其の惱害を作すをも、我れ金剛藏王をして收錄せしめて、亦た之を使せしめず、須らく毗那夜迦餘の鬼神王●羅刹●夜叉●鳩槃茶●布單那●毗舍闍●摩登伽●及び魔の眷屬を怖づべからず、其の王はみな是れ我が(一)營從なり、終に亦た來りて相ひ怖さず。

又た若し邪を除かんと欲せば、先づ一座に會して食飲せしめて、然して之に告げて曰く、汝等急に去ること風の如くにして外境に至れと、若し去らずんば必ず之を除くべし。又た若し仙藥を求めば、深山の人なき處に入り、一の大樹の下に於て坐して起たず、食はざること三日せよ、即ち仙人ありて來りて藥を奉らん、之を服せよ、天地と與に畢へん。又た若し大海水に逢はんに、過ることを得ずんば、呪すること七遍して三たび彈指せよ、即ち龍王迎へ來らん。又た若し病を治せずんば但だ呪を誦して多少を知らず、千萬遍、但し善心を發し、一切の鬼神の中に於て大善知識の想ひを作すべし、其の人命終せんに、地獄を經ず、諸の一切の有情に於て慈悲平等の想ひを作すべし、其の人命終せんに、地獄を經ず、諸の菩薩、天人ありて手を授けて去らん。

(一) 營從　眷屬從者なり。

國譯阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌卷中　終

國譯阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經
修行儀軌卷下

唐大善無畏　內道場祕譯

十方の等正覺と　最勝の妙法と菩薩衆とを歸命したてまつる
我が身口意清淨の業をもて　心を至し誠を傾けて合掌して禮したてまつる
唯し願くは諸の佛法僧衆　慈悲哀愍して我を攝護したまへ
敬禮したてまつる元帥大將軍　(一)此は是れ毗盧遮那の身
及び釋迦と諸佛との變　觀音と無盡と無邊との化なり
或は菩薩の喜悅の形を現じて　兩臂あるは諸の願を與ふる印相なり
或は金剛忿怒の身を示し　四の手に器を執るは魔を降する相なり
元帥の本體は是れ如來なり　世間を救はんがために種種を現ず
四面八臂にして堅利の牙あり　器杖を執持して類に隨ひて護る

此は是れ乃至無邊の化なり、無邊とは無邊身の菩薩にして即ち是れ虛空藏なり、即ち是れ種類の體を明す。

若し國王ありて元帥に歸せば　即ち一切の將軍衆を領して
彼の王の國境內を守護して　鄰王の怨敵の事を消伏し
逆臣を摧滅して自ら調伏せしめ　國の內に諸の疾疫の苦なけん
一切世間の有情の類　神呪を念持し名號を稱せば
內外の所生の障を淨除し　必ず世間•出世の願を與へん
災を息めんと欲はん者は即ち災を息め　榮愛を求むる者には榮愛を施し
惡を降伏する等の一切の業　一一に成就せざる者なけん
若し阿吒薄俱の名を聞いて　口裏に一たび讚歎を誦せん者は
常に當さに擁護して諸の難なからしめ　世間の寶貨悉く圓備すべし
阿吒薄俱眷屬を領して　摧碎金剛と青面王と
蘇悉地王と軍吒利と　密迹力士と摩登伽と
梵と釋と四王と自在天と　二十八部の藥叉王と
四十二部の羅刹娑と　犍闥と龍王と鳩槃茶と
天魔鬼神併て驅使す　閻浮の衆生も亦た是の如し

能く歸依する者は勝利を得　謗逆を生ずる者は重禍を被むる

是の故に一切世間の人　悉く大元帥に歸依すべし

次に十方諸佛の印を(一)結す、(朱)内五股印に似たり　左右の無名指を反し叉へて掌中に於き、直く二中指を竪てゝ頭相ひ拄へ、二食指を屈して、中指の上節の背を押し、二大指を並べ竪てゝ中節の側を押し捻し、頭指を來去せよ、七遍せば即ち一切の佛來りたまふ、呪に曰く　唵一闍耶二余何の反婆醯三莎訶四。七遍を誦ず。

次に觀世音等の諸大菩薩の印を結べ(朱)八葉印　兩の腕相ひ付けて二大指並べ著け、二小指も亦た然なり、餘の指は散して少し曲げ竪てよ、析たる蓮花の如し、頭指上下して來去せよ、呪に曰く　唵一毗是底二毗伽藍三迷帝盧迦四毗闍曳五莎訶六

次に十四部金剛の印を結べ。兩の腕側め竪て、二大指を並べて各の二小指の甲の上を捻し、二無名指側め竪てゝ頭を相ひ拄へ、二中指各の直く竪てゝ端前に向へて相ひ拄へず、二頭指來去せよ、呪に曰く　唵一跋折羅二旃陀醯三莎訶。

次に(二)三十三天神の印を結べ。(三)二頭指稍〻中指の第(四)二の節を去ること半分許り、大指來去せよ、呪に曰く　唵一鑠覩嚕二跋羅魔陀彌曳三莎訶。

(一)結　或はいふ結請に作る。

(二)三十三云云　被甲護身の印に似たり。

(三)二頭指の前、或はいふ文脱するか。即ち「二小・二無名内に叉へ、二中立て合せ二頭二中の背に散し立て」の文。

(四)二　一の字か。

(五)唵云云　集經十二調和毗那夜迦呪と名く。

次に二十八(一)部星宿天の印を結べ。左の手の中指・無名指を以て並べ仰け、右の中指は左の無名指の下の文の上に在き、右の無名指も亦た左の中指の下の文の上に覆へ、總じて相綟かすこと索の如くし、小指・頭指・大頭各の竪てゝ相ひ拄へ、大指來去せよ、呪に曰く　唵一(二)多羅二提婆多曳三莎訶。

次に東方提頭賴吒天王領乾闥婆軍衆の印を結べ。左の手の中指已下の三指を側めて拳を把れ、叉た頭指を屈して少しき曲めて中指の下の節の文に於け、大指來去せよ、呪に曰く　唵一地利底二曷羅瑟吒三藥叉四因陀羅帝五波多曳六莎訶。

次に(三)南方毗樓勒叉天王領鳩槃茶衆の印を結べ。左の腕を側め右の手の腕を以て左の腕の根の上に側め著け、二の掌相ひ背け、二(四)無名指相ひ鉤して之を申べて索の如くし、(五)二小指・二大指各の少しき曲めて頭指來去せよ、呪に曰く　唵一毗嚕陀迦耶二(六)波多曳三莎訶。

次に西方毗樓博叉天王領龍軍衆の印を結べ。左の手、腕を側めて右の手の腕を以て左の手の腕の根の上に著け、二手の中指已下の三指屈して掌中に在て拳に作り、二大指を屈して各の(七)上を押し、二頭指交へて索の如くして之を申べ、大指來去せよ、呪に曰

(一)部　或は剩字か。

(二)多の上、曼乞叉の三字あるべきか。

(三)南方云云　集經の説は二無名指直く舒ぶ。

(四)無名　中の誤か。

(五)二小指の上、恐くは「二無名指直く舒べ」の文脱す。

(六)波多曳の上、鳩槃茶地脱するか。

(七)上中指の甲の上か。

か。鳩槃茶　那伽

(一二)藥叉の二字あるか。

(一三)呪　集經十二に四天通心呪と名く。

(一四)龍王　二字恐くは剩字か。

(一五)手　右の字か

く　唵一嚕嚧博叉(一二)鳩槃茶三阿地波多曳四莎訶。

次に北方毗沙門天王領藥叉軍衆の印を結べ。左手腕を側め亦た頭指以下の四指を屈して掌に在いて拳に作り、大指を屈して頭指の上を押せ、右の手の腕も亦た然なり、之を側めて拳に作り、大指は直く申べて上に向へ、右の手の拳を左の手の拳の上に累ね著け、右の大指來去せよ、呪に曰く　唵一毗沙門耶二(一三)阿地波多曳三莎訶。

次に四天王所領四方鬼神藥叉羅刹八部鬼兵の印を結べ。頭指・中指を反へし叉へて掌に入れ、無名指を直く竪て、小指頭相ひ叉へて掌に入れて腕を合せ、大指來去せよ、

(一三)呪に曰く　唵一瞻婆羅二謝連達羅耶三莎訶四

次に八部龍王軍衆の印を結べ。右の肘の頭を左の肘の内に在き、復た右の手の後の四指を以て少し曲めて、大指を以て頭指に傳けて少し之を曲め、左の手は之を反し曲めて右の手に向ふること亦た之の如く、狀蛇の口の如くして之を用て、二手各の四指來去せよ、呪に曰く　唵一漚波難陀二莎訶。

次に百千天龍與雲致雨(一四)龍王の印を結べ。左の(一五)手の臂前の如くして改めず、但し左右の手の小指・無名指を以て反し相叉へて掌中に入れて右、左を押し、二中指直く竪て

(一四)龍王　二字恐くは剩字か。

(一五)手　右の字か

丶頭相ひ拄へ、二食指を以て中指の背の上の節を拄へ、二大指少し曲めて各の二食指の内の中節に付け、頭指來去せよ、呪に曰く　唵一步耆羅二莎訶三。

次に(一二)日天子軍衆の印を結べ。(朱)燒香の印に似たり　先づ二の中指・無名指・小指を背けて掌の内にして相ひ拄へてみな齊しからしめよ、其の二頭指は直く竪て丶相ひ拄へ、二大指は頭指の根の第一の節を捻し、大指來去せよ、呪に曰く　唵一喝囉濕迷二摩利儞三莎訶四

次に(一三)月天子の眷屬の印を結べ。二小指・無名指を以て掌の内にして相ひ叉へて右、左を押し挺でて掌中に在らしめよ、其の中指頭を(一三)直くして頭指を相ひ糾ひ、中指の第三節をして屈せしめ、其の大指を怒らかして各の無名指の頭を押し、大指來去せよ、呪に曰く　唵一旃陀羅二夜、蘇摩底三莎訶四

次に一切火天魔兵令伏の印を結べ。右の手の三指を竪て丶大指を屈して無名指の下の文を捻せよ、其の頭指稍頭を屈して中指の第一の節と齊うして頭指來去せよ、呪に曰く　唵一地弊地弊二毗耶反　阿伽那曳、三阿揭車、四莎訶五

次に閻羅五道大將軍牛頭兵衆の印を結べ。左手の腕を側めて四指を握りて仍ほ稍頭指を出すこと三分許り、大指來去せよ(一四)、呪に曰く　唵一閻魔羅闍、二鳴揭羅、嚕利耶

(一二)日天子云云　燒香の印に似たり　二空を以て召く。

(一三)月天子云云　大金剛輪に似たり。

(一四)直　綟の字か

(一四)呪　集經十二に風を召すとあり。

三阿揭車、四莎訶五

次に阿修羅王鬪戰軍衆の印を結べ。左の手の中指以下の三指等しく屈して、頭指掌を去ること一分許り、大指の頭亦た稍〻曲めて、東方天王の印と共に同じく相應せしめよ、呪に曰く　唵一毗摩質多羅、二阿蘇羅、三地波多曳、四莎訶五

次に羅刹娑王軍兵鬪戰者急來の印を結べ。右の手の大指を以て小指・無名指の甲の上を捻し、中指及び頭指は之を申べ、頭指來去せよ、呪に曰く　唵一揭伽二阿地波多曳三莎訶四

次に五方大力藥叉王軍衆の印を結べ。(一)左の手の四指を以て下に向へて(二)右手を鈎し、其の二大指は直く申べて之を怒かして、二大指來去せよ、呪に曰く　唵、一拘嚕羅、二莎訶三

次に(三)阿利陀遮文荼の印を結べ。二頭指・中指・無名指相ひ絞ひ、小指を以て相ひ叉へ、大指を以て上に向へ相ひ叉へて、大指來去せよ、呪に曰く　唵、一胡嚧胡嚧、二遮文荼、三徒皆の反　莎訶四

次に(四)毗那夜迦鬼神王の印を結べ。先づ三指を竪て二無名指相ひ叉へ垂れ下して掌背に向へ、二大指直く竪て〻頭指の側に附けて大指來去せよ、呪に曰く　唵一薄迦羅準荼二阿地波多曳三莎訶四

次に摩醯首羅天王二十八部の印を結べ。小指・無名指內に向へて相ひ鈎し、即ち中指を以て竪て〻相ひ叉へ、又た二頭指を以て各の竪て〻中指の側りの甲の下に附けて、二大指亦た竪て〻附け近づけて頭指來去せよ、呪に曰く　唵一摩醯首羅耶二莎訶。

次に阿吒薄拘元帥大怒使金剛二十八部神降伏惡鬼の印を結べ。迦坐して左右の手を以て急に拳に作りて內に怒らかし、三たび齒を叩いて即ち下もの唇を齧へ、以て二手の拳を下して二の腿の上に捺し著けよ、此れ大將の身印なり、惡鬼神自ら打たれ自ら縛せられ、自ら死を求め命を乞ふ。

次に阿吒薄拘大將大悅會天龍鬼神自護身の印を結べ。左右の二大指を以て二無名指の中節の內の(一)左右を捻せよ、百事に畏れず、刀兵鬼神に傷られず。

次に阿吒婆拘の(二)著衣甲の印を結べ。左の手を以て刀を執りて之を挂へ、右手の空を以て頭を繞らして三(三)周帀せよ、衣の袖を攬て牙を懸くる勢に作れ、鬼悉く衣甲を著ると見る、(四)大呪を誦せよ二十一遍。

(一) 左右の字か
(二) 右　左の字か
(三) 阿利陀云云　內縛して二小直く申べ、少しく峯を交へ、二空も亦直く立て〻少し端を交へ立て、來去す。
(四) 毗那云云　此の印と次の摩醯首羅との印互に錯亂せること集經十二の說相にあり。

(一) 左右　二字剩れるか。
(二) 著衣甲の印　左手に劍を執り、鋒を右に向ふ（若し刀無んば刀印を用ふ）右の手に衣の袖を懸けて以て三び刀を繞し、後に刀の鋒を覆ふ。
(三) 周　恐くは剩れるか。
(四) 大　恐くは賸或は是れ小の字か。下に已上七種みな小心呪を用ふといふが故に。

次に阿吒婆拘の千輻輪降鬼の印を結べ。右の手の大母指を以て中指●無名指の中節の背の上を押して、狀跋折羅の印の形の如し。

次に阿吒婆拘(一)立身の印を結べ。正立して右の脚を翹て左の手の頭指以下の四指を以て前に向へて跨を托し、右の手の大母指を以て中指以下の三指の背の上の中節を押し、頭指を以て前に向へて之を申べて、一切の病を指せば即ち差ゆ、一切の鬼魅を指せば自ら伏す、江海の面を指せば自ら即ち竭く。

次に阿吒婆拘の(二)刀の印を結べ。石榴枝の長け三尺二寸なるを取りて呪すること三遍して、右の手に一の頭を把りて左の手を以て三たび之を摩でよ、鬼是れ刀と見る、(三)左の手を以て跨を托し、右の手は金剛剣跋折羅の如し。

次に阿吒婆拘の弓箭の印を結べ。左の手の大指を以て(四)頭指●無名指●小指の甲の上を押し、右の手の無名指●小指を以て屈して掌中に在け、大指をもて頭指●中指の甲を押し、左の手の中指の側に於て右手の大母指を申べ放て、之を彈指せよ。已上七種の法契は、小心呪を以用て之を呪せよ、即ち小心呪に曰く　南無一多律二多勃律三婆羅勃律四　柘頡迷柘頡迷五　怛羅散淡六　鳴鑞毗七　莎訶八

(一)立身の印文の如くなるも、但し口傳にて右の頭指、東北より始め入方を指す。

(二)刀の印　右手に石榴の杖の三尺二寸なるを取り、彎りて外に向へ、左の手を以て三たび刀を拭ふ勢を作す。

(三)左の手云云　以下剩る、衍文なりと云へり。

(四)註に云く　中指申べ少しく屈し猟し弓の形の如くせよ。

次に阿吒婆拘降伏大魔鬼神の印を結べ。脚を懸けて坐し、左右の二手を以て急に拳に作りて左右の二の腿の上を捺し、急に上の唇を以て下の唇を齧へ、眶を裂いて看よ、即ち是れ大降伏の印なり。

次に一切鬼神の印を結べ。左右の手の二小指を以て反へし相ひ叉へて、二大指を以て二小指の甲の上を押せ、中指●無名指を竪てよ、頭指も亦た然なり。(朱)内三古印

次に勅鬼神の印を結べ。若し鬼神に勅せば、即ち(一)偏坐して左の手を以て跨を托し、右の手は大指を以て小指●無名指の甲の上を押し、直く頭指●中指を竪てよ。(朱)刀印

次に火輪の印を結べ。若し大力の惡鬼を伏せんとならば、火輪の印を作れ、左右の二無名指を以て屈して掌中に在いて、頭を齊しからしめよ、餘はみな頭を相拄へて稍〻掌を虛にせよ、即ち是れなり。

次に投魅鬼の印を結べ。中指以下の三指みな掌の背後に相ひ叉へ、二頭指相ひ著けて齊しからしめ、二大指横へて二頭指の中節の文を捻せよ、(二)三たび呼び三たび吸へば即ち縛し來る。已上五種の法契は大呪を用ふ。

次に四天結界の呪。唵、婆諦耶、盤陀盤陀、唅吽泮。

(一)偏坐　片膝立つるなり。

(二)三たび呼び三たび吸へ　未だ詳かならず。

八部都呪、曩謨勃陀耶、曩謨達摩耶、曩謨僧伽耶、曩謨佛利藥叉、帝佛利藥叉、揭藍藥叉、阿吒薄俱、莎訶。

若し八部の神を追はば、前の八部の印を擧げて即ち前の呪を誦すること二十一遍せよ、其の神立ちどころに至らん。(一)

世尊、願くは傳へ流布して、閻浮に遍うして、一切衆生をして受持せしめ、ために大救護を作さん。

爾の時に佛、一切の大會に告げたまはく、此の呪之を誦すれば、官に入りても瞋られず、水に入りても溺れず、火に入りても焚かれず、軍に入りても刀兵を畏れず、國王・貴人之を見れば、位を下りて承迎す。

般若不空羂索使者鬼神を追ふ印。左右の手を以て合掌して心に當て、八指を虛にし具して供養の印を作り、後ち即ち大指は頭指・中指を押して屈して左右の掌中に在け、無名・小指は合せ著けて、佛頂形の如くせよ。

次に般若降伏天鬼神の印を作れ。左右の二手を以て腕を合せ、二大指頭指の側に博げ近づけて、二手の中指之を竪て申べ、二頭指・無名指・小指、節を屈して曲めて頭を相ひ拄へ、中央は掌を虛(クウロ)にせよ。

大將、神をして散せしむる禁法。先づ呪を持して驗ありて然して後之を行せよ、爾らずんば成せず、平旦に神の前に於て一盆の井華水・一爐の香を安せよ、呪師衣服を整(ととの)へて牀の中に當つて迎坐せよ、笑ふこと勿れ、手に大怒の印を作せ、但し鬼病の人ありて來らば多語すること勿れ、口に急急と云ひ、瞋怒をを以て之を罵れ、若し怖るゝに似たらば也た即ち之に告げよ、神衆更に何れの時をか待つ、急に縛して將ゐて來れと、聲大にせよ、官使人聲に應じて即ち縛し竟る、打たんと欲し之を禁ぜんと欲するも、但し隨時の一言を以て更に多語すること勿れ、此の大將處法、呪を誦せず、人ありて我が呪を持せんと欲せば、平等有賢聖の人乃ち持すべし、爾らざれば自ら身を損す。略して已前の行用を說くすら少なからず、若し廣說せば劫を窮むとも盡きずと。

國譯阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌卷下　終

(一) 或はいふ、立ろに至らんの下、惡くは文を脫する か。

(二) 般若云云 虛空の印、二中二空開き立つ。

國譯轉法輪菩薩摧魔怨敵法

大興善寺三藏沙門大廣智不空　詔を奉じて譯す

爾の時に摧魔怨菩薩、佛に白して言さく、世尊、諸菩薩等(一)各各に已に祕密眞言の敎法を說きつ、世尊、我今、未來末法の時に國王を護持し及び國界の諸の有情を護らんと欲するが爲めの故に、祕密の最勝祕密が中の祕密なる、摧魔怨敵の法を說かん、唯し願くは世尊、哀愍聽許したまへ。佛の言はく、便ち說け。世尊若し隣國國界を擾侵することあらん、或は自の國內の軍衆寡少にして或ほ復た怯弱ならん、或は不臣のものありて惡を起して叛逆せば、即ち苦練木を取て一の(二)幢を作るべし、長けは十二指、周圓は八指にして削りて極めて圓ならしめよ、世尊の敕したまふ所の如く、一切の天龍、八部諸國を護り諸の國王を護り、及び國界の一切有情を護らしめ、災禍を除き安樂を得せしめんが爲めなり、若し難起らん時はみな彼の國土を護る神を幢の上に圖畫せよ。

此の如く(三)大唐の護國土とは、所謂る毗首羯磨(ビシユカフマヤ)藥叉●劫比羅(ケウビラ)藥叉●法護藥叉●肩目藥叉

此法は降伏法中の最勝なり、若し自行の爲に此法を修するには無明煩惱を菩提の大敵とし降伏すなし之を降伏す、昔本願律師は保元の始め後白河院の勅を奉じて朝敵對治の爲に此の法を修する時、朝敵滅亡し効驗ありしといふ。

(一)各々云云　此法本と大本の金剛頂經より譯出す、大本の中に諸菩薩各自の三昧を說く故に各各已說といふ。

(二)幢　筒なり、音通の故に幢字を用ゆ。

(三)大唐云云　下記の十大藥叉大將は大龍王三大天后の十六大護は此法の中に說なし本と大集經の月藏分より出づ故に一字引き下げ書けるも也、此

寶四、縮閏九、續藏二套五。

の十六大護は大唐の守護神なれば唐土には彼を請して壇中に安在す。

(一)圖　恐くは塗の字か

廣目藥叉●護軍藥叉●珠賢藥叉●滿賢藥叉●持明藥叉●阿吒縛俱藥叉已上十八藥叉　嚩蘇枳龍王　蘇摩那龍王●補沙毗摩大龍王已上三大龍王　訶利帝大天后●翳囉嚩蹉大天后●雙目大天后已上三大天后

各の五千の神將ありて以て眷屬たり。

畫くべき所の者みな本形を畫いて標幟を執持せしめ幢の上に圖せよ、又た幢の頂上に於て無礙王十字佛頂の眞言を書け、末後の ᳫ 吒字輪臍の中に在け、所有る怨敵叛逆の主帥、當さに彼の名を輪輻の間に書くべし、幢の底に於て一輪を圖畫せよ、八輻を具足すべし、上の如く ᳫ 吒字を輪臍の中に置け、若し災難起らん時は、一りの解法の人の此の敕の中に於て曾て禀受する者を請すべし、其の中夜に於て一の方壇を(一)圖せよ、方壇の上に於て重ねて三角の壇を畫き、此の幢を立てゝ壇の中央に在き、壇の四面に於て種種の食飲並に二の闍伽を著いて安悉香を燒き、及び酥燈を然せ、其の解法の者は南に向つて坐せよ、即ち一切如來鈎印を結べ、二手を以て內に相叉へて拳に作り、右の頭指を以て鉤に爲り、及び眞言を誦して名を稱して十六大護及び其の眷屬の大威德の諸神將等を請召して、壇中にして供養せよ。

如來鈎の眞言に曰く、曩莫薩滿多、沒馱喃、嚩、娑嚩哆羅、二合引鉢囉二合底賀哆、但

(一)三世勝金剛降三世尊なり。

陀引藥擔俱舍、冒地左哩野、播哩布囉迦、娑嚩二合賀引

行者當さに(一)三世勝金剛忿怒の三摩地に入るべし、觀せよ威德熾盛にして、四面八臂なり、左には ᳫ 塢 ᳫ 摩天后を踏み、右の脚に摩醯首羅天を蹈むと。則ち三世勝の印を結べ、二手を以て金剛拳にして檀慧互相ひに鉤し直く進力を竪てよ、成じ已て眞言を誦せよ、三五或は七遍、眞言に曰く　唵遜婆、你遜婆、吽發吒、吃哩二合賀拏、二合吽二合賀拏、二合吽發吒、吃哩二合賀拏、二合吃嚩日囉、二合吽發吒。

復た次に即ち上方諸天敕敕の印を結べ。二手を以て各の金剛拳に作りて、二頭指互相ひに旋繞せ、印を結び成じ已て敕敕して言ふべし、汝等十六大護大藥叉將等、佛の付囑を受け國王を護持し、及び國界の一切有情を護りて安樂なることを得せしめ、災禍を辟除せよ、今我が國境に某の難事あり、汝等大護我が軍陣を助けて怨敵を摧破し、汝等當さに彼の軍をして、縛せられて迷悶せしめ、某をして荒亂せしめ、我が軍兵をして强盛にして、勝つことを得せしむべし。是の敕を作し已て、即ち眞言を誦すること三遍せよ、曰く　已下の召請諸天並に此に同じく本印を結べ。　吽、跛里入底、娜嚩、二合里入多、入嚩日囉二

震一、縮閏九、藏二十七至一、本軌は未傳法の人を除くことなす。

國譯金剛頂瑜伽金剛薩埵五祕密修行念誦儀軌

唐ノ三藏沙門大廣智不空　詔を奉じて譯す

金剛頂經百千頌十八會の瑜伽の如きは、頓に如來の內功德を證することを演べたまふ祕要なり。夫れ菩薩の道を修行して無上菩提を證成せんとならば、一切有情を利益し安樂するを以て妙道と爲す。一切有情は五趣●三界に沈沒し流轉す、若し五部五密の曼荼羅に入らず、三種祕密の加持を受けずして、自の有漏の三業の身をもて、能く無邊の有情を度すといはば、是の處(コトハリ)あることなし、五趣の有情は三界の所攝なり、所謂る欲界●色界●無色界なり、色●無色界に出三界の道を修行するには、(一)別解脫と定と慧とを以て增上緣となす、其の上二界は定地の所攝なるに由るが故に、欲界は禪なし、是れ散善地なり、設ひ修定の軌則あるも仍ほ頭陀苦行を假(カツ)籍て七方便に依る、根羸劣なるに由て無學緣覺の果すら尙ほ自ら成じがたし、何に況んや十地(二)大普賢地、及び毗

(一) 別解脫　戒なり。

(二) 大普賢地　等覺なり。

合、羯灑、唅若。

復た次に當さに遊虛空諸天敎敕の印を結ぶべし。二手を以て金剛縛して、二頭指を屈して甲を以て相背け、二空を並べ竪て、二風を押せ、印を結び成じ已て一ら前の文に依て敎敕し、已て即ち三遍眞言を誦して曰く　唵、嚩日羅二合　蘖囉二合　跛拏野、嚩日囉二合　吽。

復た次に當さに住虛空諸天敎勅の印を結べ。降三世の印の如くして、二風相ひ繞ふて印を以て頂上に安せよ、即ち是れなり、印を結び已て一ら前の文に依て敎敕して言ふべし、即ち眞言三遍を誦せよ、曰く　唵、嚩日囉、二合　摩囉、吃囉二合　鑁。

復た次に當さに(一)地居諸天敎敕の印を結ぶべし。二手を以て金剛縛にして、二風を舒べて頭相合せて、金剛護菩薩の印の如くす、即ち是れなり、印を結び已て一ら前の文に依て敎敕して言ふべし、即ち三遍眞言を誦して曰く　唵、嚩日囉、二合　滿駄、憾。

次に(二)地底諸天敎敕の印を結べ。二手を以て各の展べて掌をして外に向はしめ、二空頭相捻し、二風相鉤し、二火頭を以て相拄へよ。印を以て眉間に安して一ら前の文に依て敎敕して言ふべし、即ち三遍眞言を誦して曰く　唵、賀嚕迦、嚩日囉、二合　娑摩

(一) 地居天云云　口傳に曰く、日本の諸神も贍部州中の地居天の部なるが故に二十二社等も茲に召請すべし

(二) 地底云云　金剛光の印に似たり但し彼は二空二風頭を合せ、地水火散し立つ今は二空二風を合せ、二火端を合せ、二風相鉤し地水散し立つ。

野、娑嚩努瑟吒、二合　娑摩野、母捺囉、二合　鉢囉二合　憾惹迦、吽發吒。

既に啓告し已んなば、即ち慧の手を結んで金剛拳に作りて、幢の上を按へて、十字佛頂の眞言を誦すること一百八遍す、此の十字佛頂の眞言を誦せんと欲はば、先づ印を結んで之を誦すること七遍すべし。印は二手を以て內に相ひ叉へて拳に爲り、二空掌の中に入れ二風各の屈して二空の背に拄へる即ち是れなり、眞言を誦して曰く　唵、嚩日囉二合　薩怛舞、二合　瑟捉二合　灑、吽發吒。

念誦し已て即ち更に香を焚き、花を獻じ即ち、閼伽を捧げ奉り、帝王並に及び百姓のために、廣大の利益安樂殊勝の願を發すべし。即ち(一)金剛縛を結んで二火を竪て合せよ、即ち成す、金剛解脫の眞言三遍を誦して、聖衆を送りて各の本宮に還すべし、眞言に曰く　唵、嚩日囉、二合　穆。

法事已に訖んなば則ち幢を淨函或は篋に收めて安置せよ、供養の食飲等は法に依て河流の中に送り往れ。

國譯摧魔怨菩薩破佗陣敵法　終

軍を發する時節は、宿曜の日の量に依れ。

(一) 金剛縛云云　掇遣なり外縛して二中立て合せ、花を挿んで奉送すること常の如し。

國譯金剛頂瑜伽金剛薩埵五祕密修行念誦儀軌

唐ノ三藏沙門大廣智不空　詔を奉じて譯す

金剛頂經百千頌十八會の瑜伽の如きは、頓に如來の內功德を證することを演べたまふ祕要なり。夫れ菩薩の道を修行して無上菩提を證成せんとならば、一切有情を利益し安樂するを以て妙道と爲す。一切有情は五趣●三界に沈沒し流轉す、若し五部五密の曼荼羅に入らず、三種祕密の加持を受けずして、自の有漏の三業の身をもて、能く無邊の有情を度すといはば、是の處(コトハ)あることなし、五趣の有情は三界の所攝なり、所謂る欲界●色界●無色界なり、色●無色界に出三界の道を修行するには、(一)別解脫と定と慧とを以て增上緣となす、其の上二界は定地の所攝なるに由るが故に、欲界は禪なし、是れ散善地なり、設ひ修定の軌則あるも仍ほ頭陀苦行を假(カツ)籍て七方便に依る、根羸劣なるに由て無學緣覺の果すら尙ほ自ら成じがたし、何に況んや十地(二)大菩賢地、及び毗

震一、縮閏九、藏二十七至一本軌は未傳法の人を除くとなす。

(一) 別解脫　戒なり。

(二) 大菩賢地　等覺なり。

盧遮那三身の普光地位を成ぜんをや。二乘の人は道果を證すと雖も、無邊の有情に於て爲めに利益安樂を作すこと能はず、顯教に於て修行する者は、久しく三大無數劫を經て然して後に無上菩提を證成す、其の中間に於て十進九退す、或は七地を證して所集の福德智慧を以て聲聞●緣覺の道果に廻向して、仍ほ無上菩提を證すること能はず、若し毗盧遮那佛自受用身所說の內證自覺聖智の法、及び大普賢金剛薩埵(一)地受用身の智に依らば、則ち現生に於て曼荼羅の阿闍梨に遇逢ひ、曼荼羅に入ることを得。爲(ヒタ)く羯磨を具足し、普賢三摩地を以て金剛薩埵を引入して、其の身中に入れしめよ、加持威德力に由るが故に、須臾の頃に於て當さに無量の三昧耶、無量の陀羅尼門を證すべし、不思議の法を以て能く弟子の俱生の我執(二)法執の種子を變易して、時に應じて身中に一大阿僧祇劫の、所集の福德智慧を集得す、則ち爲(ニ)れ佛家に生在するなり、其の人一切如來の心より生じ、佛口より生じ、佛法より生じ法化より生じて佛の法財(法財といは謂く三密の菩提心の教法なり。)を得、纔かに曼荼羅を見るときは、能く須臾の頃に淨信す、歡喜の心を以て瞻觀するが故に、則ち阿賴耶識の中に於て、金剛界の種子を種ゆ、具さに灌頂受職の金剛名號を受く、此れより已後、廣大甚深不思議の法を受得して二乘十地を超

(一)地　一本に他に作る。

(二)法執　和本に此の二字なし。

越す、此の大金剛薩埵五密瑜伽の法門を、四時に於て行●住●坐●臥●の四威儀の中に、無間に作意し修習すれば、見●聞●覺●知●の境界に於て人法二(一)空の執悉皆平等にして現生に初地を證得し漸次に昇進す、五密を修するに由て涅槃生死に於て染せず、著せず、無邊の五趣生死に於て廣く利樂を作し、身を百億に分ち諸趣の中に遊んで、有情を成(二)熟して、金剛薩埵の位を證せしむ。瑜伽者閑靜の山林にあり、或は精空に於て、或は所樂の處に隨て、當さに(三)四方の如來を禮して、身を以て供養して本眞言を誦すべし、捨身に由るが故に則ち三業の有漏の體を(四)捨てゝ、則ち三世無礙の律儀戒を受くるに成る。次に空中に於て(五)一切の諸佛菩薩の衆會を想ふて、然して後に右の膝を地に著けて、(六)金剛起の印を結んで其の眞言を誦して、心に當さに思惟すべし、一切の如來をして現法樂住を貪すべからざらしめたてまつる、惟し願くは哀愍して本誓を越えたまはず加持し覆護したまへと。當さに聖衆に對して(七)發露懺悔し、隨喜し勸請し、復た(八)五種の大願を發すべし。則ち金剛薩埵の加を結べ、謂く右の脚を以て左を壓すなり、當さに定印を結んで無上正等菩提心の眞言を誦すべし、曰く　唵引(オン)薩嚩(サラバ)無可引(ヒ)弭。

(一)空　高麗本に空の字なし。

(二)熟　和本に就に作る。

(三)四方云云　四佛禮。

(四)捨　一本に於に作る。

(五)一切云云　觀佛。

(六)金剛云云　金剛起。

(七)發露云云　五悔。

(八)五種云云　五大願。

(一)瑜伽者云云　四無量心。

(二)薩　和本に提に作る。

(三)法藏　或は妙法藏に作る。

(四)一切有情云云　勝願。

此の眞言を誦するに由るが故に、一切如來瑜伽者をして不退轉を獲得し、能く一切の魔冤を摧かしめて、是の人大菩薩及び諸の如來と等同なり、(一)瑜伽者是の思惟を作せ、我れ應さに金剛薩埵の大勇猛心を發すべし、一切有情如來藏性を具し、普賢菩薩一切有情に徧きが故に、我れ一切衆生をして金剛薩埵位を證得せしめむ。

又た是の思惟を作さく、一切有情金剛藏性、未來に必ず金剛灌頂を獲べきが故に、我れ一切有情をして速かに大菩(二)薩灌頂地を得、虛空藏菩薩位を證得せしめむ。

又た是の思惟を作さく、一切有情(三)法藏の性、能く一切語言を轉ずるが故に、我れ一切衆生をして一切の大乘修多羅藏を聞くことを得、觀自在菩薩位を證得せしめむ。

又た是の思惟を作さく、一切有情羯磨藏性、善能く一切の事業を成辨するが故に、我れ一切衆生をして、諸の如來の所に於て廣大供養を作し、毗首羯磨菩薩位を證得せしめむ。

又た是の思惟を作さく、(四)一切有情既に四種の藏性を具せるを以て、四大菩薩の身を獲得し、我が功德力●如來加持力及び法界力を以て、願くは一切有情に、速かに淸淨毗盧遮那佛身を證せしめん。眞言に曰く　唵引薩嚩無可の反怛他去引誐多、商斯多、入

(一)次に云云　開心。

(二)次に云云　入智。

(三)阿尾捨　通入と譯す。

薩嚩薩怛嚩二合　南、引薩嚩悉駄藥、三去波你演二合　耽怛佗去引　蘖多失者二合　地底丁以の反

慧姹二合　耽。

即ち金剛合掌の印を結べ。二手合掌して十指相ひ交へ、右左を押せ。眞言に曰く　唵嚩日囉引二合　惹里。

此の印を結ぶに由るが故に、十波羅蜜圓滿し、福德智慧二種の資糧を成就す。

次に金剛縛印を結べ。前の金剛合掌に準ず、便ち外に相ひ叉へ拳に作りて眞言を誦して曰く　唵嚩日囉二合　滿駄。

此の印を結ぶに由て即ち金剛解脫の智を成ず。

(一)次に金剛縛を以て三たび自心を拍ち眞言を誦して曰く　唵嚩日囉二合　滿駄怛囉二合　吒牛聲呼　此の印を結ぶに由るが故に、能く身心に覆蔽する所の十種の煩惱を摧いて、則ち一切の印を召して身心に處在す、行者に隨順して衆事を成辨す、一切の印とは所謂る大智印●三昧耶智印●法智印●羯磨智印なり。

(二)次に金剛(三)阿尾捨の印を結べ。二羽金剛縛にして禪●智を屈して各の戒●方の間に置いて、眞言を誦して曰く　唵嚩日囉二合　阿尾捨惡。

此の印を結ぶに由て、四智印を發揮し、大威力有りて速かに成就することを得せしむ。

(一)次に金剛拳三昧耶印を結べ。前印に準じて進力を屈して禪智の背を捻す、眞言(二)に曰く　唵嚩日囉二合　母瑟置二合(三)　鑠。

此の印を結ぶに由て、能く一切の印一切印とは是れ四印なり。を縛し堅固ならしめ、常に行者の身心の中に於て散失せず。

(四)次に三昧耶印を結べ。二手金剛縛にして忍願を合せ堅て、當心に安じて眞言を誦して曰く　三摩耶娑怛梵三合

契印を結び眞言を誦し已るに由て、背後に於て想へ、月輪あり以て圓光となる、身は其の中に處住し、金剛薩埵なりと想へ、此の印を結び及び眞言を誦するに由るが故に、大智印等の一切部の中に結ぶ所の一切の印、一切如來身口意金剛の印功虛しく棄てず、敢て違越することなし、若し一千遍を誦し、一切印を結べば、みな成就することを得。

(五)次に大三昧耶眞實の印を結べ。二羽金剛縛して忍願掌に入れて相ひ交へ合せ、檀●惠禪●智面相ひ合せ、獨股金剛杵の如くし、忍願を以て掌上に觸れ、眞言を誦して曰く　娑麼耶斛蘇囉多娑怛梵三合

(一)次に云云　合智。

(二)眞言の下、或はいふ誦の字脫するか。

(三)鑠　高本に云く鑠ノ無感の反)と

(四)次に　尊賢三昧耶。

(五)次に云云　極喜。

(一)次に云云　大智印言。

此の印を結び心に觸るゝに由るが故に、金剛薩埵身心に逼入して、速かに成就を與へ、意欲希望の諸願みな得ん。

(二)次に金剛薩埵大智印を結べ。即ち次前の印を解き、二羽各の金剛拳に作り、左手は胯に置き、右手は金剛杵を調擲する勢にして心上に置き、右脚左を押す、眞言を誦して曰く　罅日囉二合　薩怛舞二合　含。

誦し已て想へ、自身金剛薩埵と爲て大月輪に處し大蓮華に坐せり、五佛の寶冠あり容貌熙怡にして身月の色の如く、內外明徹せり、大悲愍を生じて無盡無餘の衆生界を救濟して金剛薩埵の身を得せしむ、三密齊しく運りて量虛空に同じ。

瑜伽の大智印を持して相應するに由るが故に、設若法を越え具さに重罪を造り、並に諸障を作すも、彼の大智印を持するが故に一切供養恭敬す、若し人ありて禮拜供養し尊重讃歎する者は、則ち一切如來及び金剛薩埵を見るに同じ、當さに此の大智印に住して、則ち身前に於て金剛薩埵智身を想ひ、自身の如くすべし、觀せよ(三)四印を以て圍遶すと、同一月輪●同一蓮華にして各の本威儀に住して(三)標記を執持し、各の五佛の寶冠を戴く、瑜伽者、身の前の金剛薩埵を專注して心散動せず、即ち眞言を誦して

(二)四印　欲觸等

(三)標記　三形なり。

曰く　嚩日囉二合　薩怛嚩二合　惡。

(一)此の眞言を誦するに由るが故に、金剛薩埵(二)阿尾捨して顯現すべし、眞言に曰く

嚩日囉二合　薩怛縛二合　涅哩二合　捨。

此の眞言を誦するに由るが故に、定中に金剛薩埵を見ること了了分明ならしむ、即ち

(三)四字(四)眞言を誦す。　弱吽引　鑁斛引

此の眞言を誦するに由るが故に、金剛薩埵の智身、召せしめ入れしめ、縛せしめ喜ばしめ、瑜伽者の定身と交り合せて一體なり。

(五)次に素囉多印を結べ。二羽金剛縛して右智左の虎口の中に入れ、乃ち心・額・喉・頂四處に於て加持し、各の眞言を誦すること一徧せよ、眞言に曰く　蘇囉多薩怛梵三合

(六)印を結んで加持するに由るが故に、四波羅蜜の身各の本位に住して常恒に護持す。

(七)次に五佛寶冠の印を結べ。二羽金剛縛して忍願並べ竪て合せ、上の節を屈して劒形の如くし、進力忍願の背に附著て印を以て頂上に置き、次に髮際に置き、次に頂の右に置き、次に頂の後に置き、次に頂の左に置き各の眞言を誦すること一遍す、眞言に曰く　唵、薩嚩怛他引孽多、囉怛曩、二合　阿毗麗迦(八)阿。　此の印を結ぶに由るが故

(一)此の眞言云云　見智身。
(二)阿尾捨して云云　遍入自身なり
(三)四字　四明にして各其の印を用ふ。
(四)眞言　高本に明に曰くといふ。
(五)次に云云　大樂。
(六)印　高本に此の印字に作る。
(七)次に五佛云云　五佛灌頂。
(八)阿　高本に惡入引に作る。

に、一切如來金剛薩埵灌頂位を獲得す。

次に金剛髻印を結べ。二羽金剛拳にして額前に相ひ遠らし結べ、二羽分ちて腦後にして又た結べ、便ち檀慧より徐徐として開いて冠の繒帛を垂るゝが如くせよ、眞言を誦して曰く　唵嚩日囉二合　麼引羅(一)引阿毗詵者滿鎗。　即ち甲冑の印を結んで身に徧うして甲を擐よ。

次に歡喜の印を結べ。二羽掌を平くして拍して歡喜せしめよ、眞言を誦して曰く　嚩日囉、二合　覩史也、二合　斛引

次に前の金剛薩埵の大智印を結べ。根本の眞言を誦して曰く　唵、摩訶素佉、嚩日囉二合　薩怛嚩、二合　弱吽鑁斛、引素羅多、薩怛梵三合

次に四祕密羯磨の印を結び、即ち金剛歌讃を誦すべし、此の讃四句、一印を結ぶごとに一句を誦すべし、讃に曰く　薩嚩弩囉引誐、素佉、薩怛摩二合　曩娑、一薩怛鑁二合　嚩日囉二合　薩怛嚩、二合　跛囉莫、素囉多、入(二)娑嚩二合　冥、摩訶引素佉、涅哩二合　住掣野諾、三鉢囉二合　底跛囉亭夜の切　悉地也二合　者擺虞鉢(三)羅二合　曩多入四

(四)次に欲金剛の印を作れ。二羽金剛拳にして左羽弓を執ると想ひ、右羽箭を持すとをも

(一)引　無用か、然らずば阿字を除くべし。
(二)婆　一本に婆に作るを好しとす
(三)羅二合　高本に依て加ふ。
(四)次に云云　已下再釋なり、前文を覽るもの誤るなかれ。

つて射勢の如くせよ、即ち此の尊を成ず、身を印して眞言を稱して曰く　薩嚩、引弩羅引誐、素佉、薩怛摩二合　曩娑。

次に計里計羅の印を結べ。前の印に準じて二拳交へて(一)臂を抱け、即ち此の尊を成ず、身を印して眞言を誦して曰く　薩怛鑁、二合　嚩日囉、二合　薩怛嚩、二合　跋囉莫、素囉多入聲

次に愛金剛印を結べ。前に準じて二金剛拳にして、左拳をもて右肘を承け、右臂を豎てゝ憧勢の如くせよ、即ち此の尊を成ず、身を印して眞言を誦して曰く　(二)薩嚩冥、摩訶引素佉、涅哩二合　住、掣野諾。

次に金剛慢印を結べ。二金剛拳にして各の胯に安し左に向へ少しき頭を傾むけて禮する勢の如くせよ、即ち此の尊を成ず、身を印して眞言を誦して曰く　(三)跋囉亥夜の切　悉地也二合　左攞虞鉢囉二合　曩多入聲

次に五祕密三昧耶の印を結べ。即ち金剛薩埵三昧耶印を結び、金剛縛に作りて忍願を屈して掌に入れ、相合せて前の如くし、禪・智・檀・慧各の相ひ拄へ、獨股金剛杵の如くす、眞言を誦して曰く　素囉多薩怛梵三合　此の印を結び眞言を誦するに由るが故に、

(一) 胸を云云　左は内に右に外にす

(二) 薩　婆に作るを好とす。

(三) 跋の上　鉢囉二合底あるか。

神通壽命威力相好、金剛薩埵に等同なり。

次に金剛三昧耶印を結べ。前印に準じて、進力の上の節を屈し、甲背相ひ合せ、禪智を以て並べて其の上を押す、眞言を誦して曰く　弱、嚩日囉二合　涅哩二合　瑟知、二合　娑野計、麼吒。

此の印を結ぶに由るが故に、能く微細の無明住地の煩惱を斷ず、即ち計里計羅三昧耶の印を結び、前印に準じて右の智、左の禪を押し、相交へて眞言を誦して曰く　吽、引嚩日囉、二合　計里吉麗、吽引

此の印を結ぶに由るが故に、能く一切受苦の衆生界を拔濟し護持して、みな大安樂三摩地を獲しむ。

次に愛金剛三昧耶の印を結べ。前印に準じて進力互相ひに忍願を握り、進力並べ合せて眼勢の如くし、戒方を豎てゝ相ひ合せ、檀・慧亦た然なり、眞言を誦して曰く　鑁、嚩日囉二合　扼娑摩二合　囉、囉吒。

此の印を結ぶに由るが故に、大悲解脫を獲得し、一切の有情を憐愍すること、猶如し一子の如く、皆な拔濟安樂の心を起す。

次に金剛慢三昧耶の印を結べ。次前の印を用ひ、其の二股に觸れよ、先づ右次に左なり、眞言を誦して曰く　斛、引嚩日囉二合　迦去引冥、濕嚩二合　哩、怛覽二引

此の印を結ぶに由るが故に、大精進波羅蜜を獲得し、刹那に能く無邊の世界一切如來の所に於て廣大供養を作す。

次に金剛薩埵三昧耶の印を(一)結び、大乘現證百字眞言を誦して曰く　唵、嚩日囉二合　薩怛嚩、二合　三麼耶、麼弩播引攞野、嚩日囉二合　薩怛嚩、二合　底尾二合　弩波、底瑟姹、二合　涅哩二合　住茶護の切　弭婆嚩、素覩史喻二合　冥婆嚩、阿弩囉訖覩二合　冥婆嚩、素補史喻二合　冥婆嚩、薩嚩悉朕冥、鉢囉二合　也瑳、薩嚩迦麼、素左冥、質多室唎二合　藥、句嚕、吽、呵呵呵呵、斛、婆誐梵、薩嚩怛佗引孽多、嚩日囉、二合　麼弭悶左、嚩日哩二合　婆嚩、麼訶引三麼耶、薩怛嚩、二合　惡。

即ち金剛薩埵三摩地に入り、並に大智印を結んで大乘現證金剛薩埵眞言を誦して曰く

嚩日囉二合　薩怛嚩二合

或は大智印に住し、或は數珠を持し限りなく念誦して疲(二)頓せしむること勿れ、三摩に住して此の眞言を誦するに由るが故に、現世に無量の三摩地を證得し、亦た能く本

(一)結　和本に住に作る。

(二)頓　壞なり、故に疲頓は疲弊な意味す。

尊の身を成ず、一切如來現前に五神通を證得し、十方一切の世界を遊歷して、廣く無邊の有情利益安樂等の事を作したまふ。

(一)瑜伽者、行●住●坐●臥常に四の眷屬を以て自ら圍遶せられ、大蓮華同一月輪に處す、金剛薩埵は是れ普賢菩薩、即ち一切如來の長子なり、是れ一切如來の菩提心なり、是れ一切如來の祖師なり、是の故に一切如來金剛薩埵を禮敬したまふ、經の所說の如くんば、金剛薩埵の三摩地を名けて一切諸佛の法となす、此の法能く諸佛の道を成ず、此を離れて更に別に佛あることなし、欲金剛とは名けて般若波羅蜜となす、能く一切佛法に通達して無滯無礙にして、猶ほし金剛の如く能く諸佛を出生す。

金剛計里計羅とは是れ虛空藏三摩地、無邊の衆生に安樂を與へて、無邊の衆生の貧匱の泥に溺るゝ者を拯拔して、所求の世●出世間の希願をみな滿足せしむ。

愛金剛とは是れ多羅菩薩、大悲解脫に住して、無邊受苦の衆生を愍念して、常に(二)濟拔を懷ひ安樂を施與す。

慢金剛とは是れ大精進波羅蜜、無礙解脫に住して、無邊の如來に於て廣く佛事を作し、及び衆生利益を作す。

(一)瑜伽者云云　五祕密。

(二)濟拔　和本には拔濟に作る。

(一)欲金剛云云　五智に約して五尊を釋す。

(二)欲金剛云云　五眼に約して五尊を釋す。

(三)圓成　圓成實性。

(一)欲金剛は金剛弓箭を持し、阿賴耶識中の一切有漏の種子を射て大圓鏡智を成ず、金剛計里計羅の金剛薩埵を抱くことは、第七識の妄りに第八識を執じて、我癡・我見・我慢・我愛とするを淨めて、平等性智を成ずることを表す。

金剛薩埵大智印に住すとは、金剛界より金剛鈴菩薩に至りて、三十七智を以て自受用佗受用の果德身を成ず、愛金剛は、摩竭幢を持し、能く意識の淨染を緣慮する有漏の心を淨めて妙觀察智を成ず。

金剛慢とは二金剛拳を以て胯に置き、五識質礙の身を淨め大勤勇を起して、無餘の有情を盡く、皆頓に成佛せしめ、能く五識身を淨めて成所作智を成ずることを表す。

(二)欲金剛とは是れ慧眼、染淨分依佗性を觀察して、一切の法の非有非無を知る。金剛計里計羅とは、無染智を以て淨分依佗の、果德中(三)圓成と不即不異なることを觀察して、一切の法は菩提涅槃と不即不異なることを知る。

金剛薩埵とは是れ自性身不生不滅、量虛空に同なり、則ち是れ徧法界の身なり。

愛金剛とは大悲天眼を以て一切有情の身中普賢の體不增不減なることを觀見す。

金剛慢とは淸淨無礙の肉眼を以て、一切の有情の、異生の位に處在して塵勞覆蔽すと

(一)金剛薩埵云云　五秘密即ち二十五尊。

(二)內の四供養云云　八供。

(三)欲金剛云云　四攝。

(四)乘　乘の字か

雖、本性淸淨なることを觀じて、若し大精進と相應すれば即ち離垢淸淨を得。

(一)金剛薩埵とは是れ毗盧遮那佛身、欲金剛は是れ金剛波羅蜜、計里計羅は是れ寶波羅蜜、金剛愛は是れ法波羅蜜、金剛慢は是れ羯磨波羅蜜なり。金剛薩埵とは即ち彼の薄伽梵阿閦如來、欲金剛とは即ち是れ金剛薩埵、計里計羅とは即ち是れ金剛王、愛金剛とは即ち是れ金剛愛、金剛慢とは即ち是れ金剛善哉、金剛薩埵とは即ち彼の薄伽梵寶生如來、欲金剛とは即ち是れ金剛寶、計里計羅とは即ち是れ金剛日、愛金剛とは即ち是れ金剛幢、金剛慢とは即ち是れ金剛笑なり、金剛薩埵とは即ち彼の薄伽梵觀自在王如來、欲金剛とは即ち是れ金剛法、計里計羅とは即ち是れ金剛利、愛金剛とは即ち是れ金剛因、金剛慢とは即ち是れ金剛語なり、金剛薩埵とは即ち彼の薄伽梵不空成就如來、欲金剛とは即ち是れ金剛業、計里計羅とは即ち是れ金剛護、愛金剛とは即ち是れ金剛藥叉、金剛慢とは即ち是れ金剛拳、(二)內の四供養とは即ち彼の四眷屬、外の四供養とは亦た彼の四眷屬なり。

(三)欲金剛は菩提心の箭を以て一切有情を鈎召して佛道に安置す、計里計羅の抱ける印をば大方便金剛(四)乘と爲し、不染智を證せしめ、愛金剛摩羯幢を以て大悲金剛鎖とな

し、無量劫を經て生死に處すれども心移易せず、一切衆生を度するを、以て其の道となす。金剛慢とは大精進を以て般若金剛鈴と爲して、無明の窟宅に在る隨眠の有情を驚悟す。

(一)普賢曼荼羅は五身を離れず、降三世曼荼羅は即ち金剛界に同す、蓮華部の徧調伏曼荼羅は此に依て之を例せよ、寶部一切義成就も亦た此の說に同じ。

(二)金剛薩埵五密を、如來部と爲す、即ち是れ金剛部即ち是れ蓮華部即ち是れ寶部なり、五身同一大蓮華にあることは大悲の義となす、同一月輪圓光は大智の義となす、是の故に菩薩、大智に由るが故に生死に染せず、大悲に由るが故に涅槃に住まらず、經の所說の如きは三種の薩埵あり、所謂る愚薩埵、智薩埵、金剛薩埵なり、金剛薩埵を以て其の二種の薩埵を簡ぶ、修行して此の金剛乘を得る人を即ち金剛薩埵と名く、是の故に菩薩の勝慧は、乃至生死を盡すまで恒に衆生の利を作して涅槃に趣かず、何等の法を以てか能く此の如くなることを得る、是の故に般若及び方便智度に加持せらるゝ所の(三)諸法及び(四)諸有一切みな清淨なり、諸法と及び諸有とを名けて人法二執となす、是の故に欲等、世間を調へて淨除なることを得せしむるが故に、有頂及び惡趣を調伏

(一)普賢云云　金剛頂初會四大品に約して釋す。
(二)金剛云云　五部に約して釋す。
(三)諸法　法執。
(四)諸有　人執。

して諸有を盡す、虛空藏三摩地に住するに由て、人法二執に於てみな平等清淨なることと、なほし蓮華のごとしと。是の故に蓮性の清淨にして、本と垢のために染せられざるが如く、諸の欲性も亦た然り、染せずして群生を利すとは、安樂利益の事を作し、大自在位に居す、是の故に大欲、清淨なることを得、大安樂富饒にして三界に自在を得能く堅固利益を作すとは、菩提心を因となす。因に二種あり、無邊の衆生を度するを因となし、無上菩提を果となす、復た次に大悲を根となし(一)兼ねて大悲心に住して二乘境界の風も動搖すること能はざる所、みな大方便に由る、(二)方便とは三密の金剛を以て增上緣となして、能く毗盧遮那清淨の三身の果位を證す。

(一)兼　一本に應の字に作る。
(二)方便　高本には大方便に作る。

國譯金剛頂瑜伽金剛薩埵五祕密修行念誦儀軌終

國譯佛說虛空藏菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法

金剛頂經の(一)成就一切義品に出づ。

唐三藏法師(二)輸波迦羅　譯す

爾の時に薄伽梵、諸波羅蜜平等性の三摩地に入りたまふて、定より起ち已て、即ち此の能滿諸願虛空藏菩薩の最勝心陀羅尼を說いて曰はく　南牟(ナウボ)、一阿迦(アキャ)去聲引　捨(シヤ)、舒可の切、二　揭(ギャラ)魚羯の切　婆(バ)去聲引　耶(ヤ)、余可の切三　唵(ラン)、四　阿唎(アリ)、五　迦(キャ)入　摩唎(マリ)、六　慕唎、七　莎縛訶(ソハカ)八

薄伽梵の言はく、此の陀羅尼は是れ過去・現在の一切諸佛の同じく說きたまふ所なり、若し能く常に此の陀羅尼を誦する者は、無始より來たの五無間等の一切の罪障、悉くみな消滅して、常に一切の諸佛菩薩と共に護念せらるゝことを得、乃至未だ成佛せざるより來た、所生の處に虛空藏菩薩、恒に隨て守護し、諸の有情をして、常に見んと樂はしむ、諸そあらゆる善願滿足せずといふことなし、一切の苦患みな悉く消除して(三)常に人天に生じて惡趣に墮せず、生生の處に常に宿命を憶す、設ひ如法ならずとも

(一)　一切義成就品。

(二)　輸波迦羅　善無畏。此の軌は大安寺道慈律師請來して善議、勤操、空海と相承し日本密教東流の元初なり、此の法の本意は憶持不忘を求むるにあり、然れども滅罪にも修す。

(三)　常に人天云云　此に淺深あり、淺は謂く大乘の菩薩人天の王となり天利益なり。若し深には人天とは地にあり天は空にあり、次の如く胎金兩部なり常在人天の思を作すべからず。

但し能く常に誦せば、福獲ること是の如くならん。若し法の如く此の陀羅尼を持し聞持を求めんと欲せば、當さに絹素白氎或は淨板の上に於て先づ滿月を畫き、中に於て虛空菩薩の像を畫くべし、其の量下至一肘には減せざれ、或は復た此に過ぐるも、其の力に任せて辨せよ、菩薩と滿月との增減相ひ稱しめよ、身は金色に作せ、寶蓮華の上に半跏にして而も坐せしめ、右を以て左を押し、容顏殊妙にして熙怡喜悅の相に作し、寶冠の上に於て五佛の像ありて結跏趺坐せり、菩薩の左の手に白蓮華を執れり、徽しき紅色に作せ、華臺の上に於て如意寶珠あり、(一)吠瑠璃色にして黃光焰を發す、右の手は復た與諸願の印に作くれ、五指を垂れ下して掌を現はして外に向ふる、是れ與願の印の相なり。像を畫き了已んなば、當さに空閑寂靜の處に於てし、或は淨室と塔廟と山頂と樹下とにあて、(二)隨て一處に在て其の像を安置すべし、(三)面を正しく西に向へ、或は北に向ふべし、淨き物を以て之を覆へ、別に一つの方なる木曼荼羅を作れ、下至一肘にせよ、此に過ぐるも亦た意に任せよ、其の壇の下に四足を安け、或は以て(四)編み附けよ、上面地を去ること恰も四指なるべし、其の板は若しは檀●沈を用て作らむ者は最も殊勝なりと爲す、爾らずんば或は栢等の香あらん木を以て之を爲く

(一) 吠瑠璃色　虛空の色なるが故に虛空藏に應ず、黃は黃金色なり。

(二) 築て一處云　此法には七日作壇等の法を須ひず、唯だ一日水壇の法に依て之を修す。(三) 面を云云　西に本尊に在りて東に向くなり或は西に向くなり北に向くなり。尊は寶部の故に南に尊あり、行者は尊に向く故に北に向くなり。

(四) 編み付けよ　是れ直に打ち付くるか。

(一) 華　和本に諸華に作る。(二) 粳米　白米にして小米を去るなり。

(三) 蕎麥云云　此は三角にして寶珠の形に似たり。又寶部の三點具足を表す、燒くことも亦火大南方寶部の故に。

(四) 筆　和本に筆に作る。(五) 手と面云云　以下に四度洗淨の法あり。

(六) 辨足　和本には辨之に作る、是れ辨供なり。(七) 即便云云　三度飲むは三毒を淨むるなり、飲み了りて日の內外各一度之を拭ふ、昇內の煩惱を拭ふ、昇內の煩惱を除く、日の外を拭ふは昇外の煩惱を淨むるなり。

(八) 虛空藏云云　成辨諸事の印なり

るも亦た得。如法に作り已て像の前に置け。次に應さに嚴く五種の供具を辨ずべし、所謂る塗香と諸華と燒香と飲食と燈明となり。塗香とは白栴檀を磨りて之を爲る、(一)華は隨時の藥草所生の者を以て充てよ、若し時華なくんば當さに(二)粳米を以てすべし、或は(三)蕎麥を燒き或は橘●栢●等の葉を取り、或は丁香を用て以て華に充てゝ用ひよ、燒香には但し沈●檀●龍腦を以て應に隨て之を用ひよ、食は(四)葷穢を除いて每に須らく新淨なるべし、燈には牛酥を用ひよ油も亦た通じて許す、具さに此の物を辨せんと欲するの時に當ては、必ず須らく晨朝に(五)手と面とを盥洗して、護淨すること法の如くにすべし、具さに(六)辨足し已て壇の邊りに置在くべし、然して後に外に出でゝ復た淨水を以て重ねて手を洗ひ已て、即ち手印を作りて掌に淨水を承けて、陀羅尼三遍を誦して(七)即便ち之を飲め、其の手印の相は、先づ右の手の五指を仰け舒べて、其の頭指を屈して大拇指と相ひ捻して、狀ち香を捻るが如くにす、此れは是れ(八)虛空藏菩薩の如意寶珠成辨一切事の印なり。復た此の印を以て前の如く水を承けて陀羅尼三遍を誦し竟已て、頂及び身に灑いで、即ち內外の一切をして淸淨ならしめよ。次に應さに像の所に往詣して、至心に禮拜して面を菩薩に向へて、半跏にして坐して(九)像の上に覆

へる所の物を擧げ去くべし、次に即ち須らく護身の手印を作るべし。其の手印の相は、先づ右の手を(一)擧にして然して後に頭指と大拇指とを以て相ひ捻して、狀香を捻るが若くし、其の頭指は其の第二の節を屈して其の第一の節は極めて端直ならしめて、方さに始め印相にせよ、法の如く此の印を作し已て、頂上に置いて陀羅尼一遍を誦して、次に右の肩に置け、復た一遍を誦して左の肩●心●喉亦た(二)復た是の如くせよ、此の護身の法を作し已れば、一切の諸佛及び虛空藏菩薩、此の人を攝受したまひ、一切の罪障即ちみな消滅して、身心清淨にして福慧增長し、一切の諸魔及び毗那夜迦みな便りを得ず。復た(三)前の印を作りて掌に淨水を承けて、陀羅尼一遍を誦して塗香等の諸の供養の物、並に壇及び壇に近きの地に灑げ、復た前の如く護身の手印を作りて塗香の上に置いて、陀羅尼一遍を誦せよ、餘の華香等乃至木壇にも各〻みな是の如くせよ、此の法を作し已れば華香等の物即便ち清淨なり。復た護身の手印を作して(四)右に轉ずること三匝せよ、兼ねては上下を指せ、但し其の印を運んで動搖せずして、陀羅尼七遍を誦して、其の自心の遠近の分齊に隨ひて十方界を結せよ。次に應さに目を閉ぢて思惟すべし、虛空藏菩薩の(五)眞身、即ち(六)此の像と等うして異ることあることなしと

(一) 擧　和本に擧に作る。

(二) 復　和本に皆に作る。

(三) 前の印云云　加持香水なり、但し瞥鑁鑁なし、

(四) 右の上、異本に「先づ左に轉ずること三匝して次に」の文あり。

(五) 眞身　三身即一なり、但し此の文は報身を眞身に合して眞應一身となす、眞身は法身。

(六) 此の像　應身。

復た護身の印を用て作意して虛空藏菩薩を請せよ、陀羅尼(一)二十五遍を誦し已て、即ち大拇指を擧げて裏に向ふて招くこと一度せよ、頭指は舊の如くして此の印を作して、陀羅尼三遍を誦せよ、(二)幢上の蓮華之を以て座と爲したまふと。復た(三)菩薩來りて此の華に坐したまふと。即便ち目を開いて菩薩を見たてまつり已て、希有の心を生じて眞身の解を作せ、又た三遍を誦して手印は前の如くして是の念言を作せ、(四)今者菩薩の此に來至したまへることは是れ陀羅尼の力なり、我が能する所に非ず、惟だ願くは尊者暫く此に住したまへ。次に塗香を取て陀羅尼一遍を誦して用て其の壇に塗れ。次に復た華を取て亦た一遍を誦して壇の上に布散せよ、燒香●飲食●燈明次第に之を取てみな一徧を誦し、手に持して供養し壇の邊に置在け。復た念言を作せ、一切の諸佛菩薩の福慧熏修の所生の旛蓋、清淨の香華衆寶の具、悉くみな嚴好なりと。復た手印を作して陀羅尼一遍を誦して、前の如く想念せよ、諸の供養物悉く成辨することを得、即ち持して一切如來及び諸の菩薩に供養したてまつると。是の如くの(五)運心は供養中の最なり、如し其の塗香等の供養の物を辨ずること能はずんば、但し第二の運心供養を作せ、法亦た成就す、即ち手印を以て珠を掐り陀羅尼を誦して明かに遍數を記せよ、

(一) 二十五遍　各五智を具する故に。

(二) 幢　はりがみ上に所謂る淨板なり、絹を張り畫く器、又は今の佛畫の類。

(三) 菩薩　報身。

(四) 今者云云　頌文口誦。

(五) 運心　四種供養の中に運心は第二なる故に今は第二運心といふ。

誦せん時には目を閉ぢて想へ、菩薩の心上に一の滿月あり、然も誦する所の陀羅尼の字、滿月の中に現じてみな金色と作る、其の字復た滿月より流出して行人の頂に澍ぐ、復た(一)口より出でゝ菩薩の足に入る、(二)始めて自ら發言して菩薩の足下に諮啓して、未だ止息せるより來た、想ふ所の字巡還往來して、相續して絶えざること輪の如くにして而も轉せよ、身心若し倦みなば即ち須らく止息すべし、至誠に瞻仰して便ち坐しながら禮拜せよ、目を閉ぢて復た滿月の菩薩を觀ずること極めて明了にし已て、更に運心して漸く(三)增長ならしめて、法界に周徧せしむべし、復た漸く略觀して最後の時に於ては量本の如くし已て、方さに始めて出觀せよ。又た前の手印を作して陀羅尼三徧を誦し已て(四)大拇指を舉げて菩薩を發遣して是の念言を作せ、惟だ願くは慈悲をもて布施歡喜し、後會の法事に復た降赴を垂れたまへ。是の如く陀羅尼を誦して、其の力の能に隨ひて、或は(五)一日に一上し、或は一日に兩上せよ、始めより終に至るまで毎に初日の如くせよ、遍數の多少も亦た初上の如くにして、增減することを得ざれ、前後通計して百萬遍を滿せよ、其の數終に(六)乃て亦た時の限なし、然して中間に於て間闕すべからず、復た日蝕或は月蝕の時に於て、力に隨ひて飲食・財物を捨施して三

(一)口　行人の口なり。
(二)始　原本に如の字に作る、今は和本による。
(三)增長　五相の中の廣歛の觀なり
(四)大拇指云云　大空指なるが故に即ち是れ虛空藏の義なり。
(五)一日云云　一日一座なり、一日兩上とは一日二座なり。
(六)乃　和本に及に作る。

寶に供養す、即ち菩薩及び壇を露地の淨處に移して安置せよ。復た(一)牛酥一兩を取て熟銅の器の中に盛り貯へ、並に乳ある樹葉七枚及び一條を取て壇の邊に置在け、華香等の物常の數に加へて倍せよ、供養の法は一一前に同じ、供養し畢已て前の樹葉を取り、重ねて壇の中に布け。復た葉の上に於て(二)酥器を安置せよ、還た手印を作りて陀羅尼三遍を誦して此の酥を(三)護持せよ、又た樹の枝を以て酥を攪せて其の手を停むること勿れ、目に日月を觀じ兼ねては亦た酥を看よ、陀羅尼を誦して徧數を限ることなし、初めて蝕するより後に退して未だ闋たざる已來に、其の酥に即ち三種の相現ずることあらん。一には(四)氣、二には煙、三には火なり、此の下中上の三品の相の中に隨ひて一種を得ば、法即ち成就す、此の相を得已りぬれば便ち神藥と成る、若し此の藥を食すれば即ち聞持を獲て、一たび耳目に經るゝに文義俱に解す、之を心に記して永く永く遺忘することなし、諸餘の福利無量無邊なり、今は且らく略して少分の功德を說く、如し却退し闋滿するに至るまでの已來に、(五)三相若し無くんば法成就せず、復た更に初めより首めて而も作すべし、乃至七遍すれば縱ひ五逆等の極重の罪障あれども、亦たみな消滅して法定んで成就す。

(一)牛酥　一兩大唐の一兩は日本の十錢目なり、天竺の一兩は百二十錢なり。
(二)酥　一本に蘇に作る。已下文中亦た同じ。
(三)護　一本に加に作る。
(四)氣　煙氣。
(五)三相云云　復更に初より乃至七遍罪障消滅して法定て成就す。

音譯　蕎巨驕の切　拇莫厚の切、大指なり。　捻奴協の切　指捻なり　𢢽猪孟の切、開き張て紺を畫くなり。　搔苦浩の切、爪刺なり。

國譯佛說虛空藏菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法終

震五、縮閻十、綴藏二奎。此軌は蓮華部の通法なり、若し法則を說かざる尊は此の法門を用ゆべしと。

(一)凡そ云云已下成就せしめんとす迄は序分なり。(二)推和本に摧に作る「サシナフ」の意となる。

國譯觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門

開府儀同三司特進試鴻臚卿蕭國公食邑三千戶賜紫贈司空謚大鑒正號大廣智大興善寺三藏沙門不空　詔を奉じて譯す

(一)凡そ此の門の中に於て修習せんと欲せば、須らく法式の次第を知るべし、若し備さに儀軌を解せずんば、徒らに功を爲して時日を(二)推乘つ、是に由て諸經の事法の法門及び瑜伽の門を參へ驗めて、相會して紐んで一部と成す、彼の初心の解脫を求むる者の爲めに、地位に階ることを得しめんが故に、我れ修緝して彼の行を成就せしめんとす、諸の習學の者は先づ應さに灌頂大三昧耶壇に入て、菩薩の戒行を受くべし、大悲の意を起して身命の財を捨て、有情を饒益し、專心に佛・菩薩の身を希ひ貪恚に着せず、勤心勇猛にして心を攝めて亂さず、慈悲喜捨して未だ嘗て暫くも息まず、無量の衆生をして彼の岸に度らしめ、內外淸淨にして極めて嚴潔ならしめ、諸の長宿和上阿闍梨等の處に於て、常に尊重して心諂曲せず、語するに必ず誠言し、乞人ありて來らば分に隨ひて布施すべし、空しく遣るべからず、四威儀に於き及び諸務を營め。是

の如くの刹那刹那の時分に、念を澄して諦かに諸行は悉くみな無常なりと觀せよ、略して之を言はば、(一)一切の諸法はなほし鏡像の如し、既に是を知り已て當さに精神の甲を破り、煩惱の軍を壞する祕明呪の劒を持し、蓋纏を破して生死の妄海を出で、菩提道場に至て金剛の座に坐すべし、決して是の心を作して退轉せしめざれ、是の如くの人は方さに修習すべし、此の大乘界の中、最勝の法門を(二)發す、是の故に我今次第に而も說く。諸(ナンジ)そ念せんと欲はん者は先づ(三)地を淨めよ、地を淨むるの法は、其の地或は四肘、或は八肘、或は十二肘、或は十六肘等、是の量の中に於て、力に隨ひて之を取り、掘て深さ膝に至れ、或は深さ一肘、蟲蟻及び諸の瓦礫、髮骨灰炭糠粃棘刺木根の屬(タグヒ)、諸の穢惡等の物を探り去り已て、淨土を塡め滿て堅く塞いで平に治し、後に當さに上に於て其の精舍を起つべし、淨く其の室を塗り先づ方面を定めよ、若し災を除くを求めんには、其の室はまさに南に向へて門を開くべし、面は北に向へて坐せよ、坐する時に當さに(四)兩の脚脛を交へて坐すべし、若し增益を求むる法を作さんには、當さに西門を開き、面を東に向へて坐して、結跏趺坐を作すべし、若し瞋怒の法を作さんには北門を開き面を南に向へて坐し、蹲踞して坐すべし、唯だ二足を以て左、右

(一)一切云云　後夜の傷なり、早朝に起き直に唱歎すべきなり。

(二)發　未詳

(三)地を淨めよ　擇地治地、其の方量は多分四、八、十、二十四等陰數を取り用ふ。

(四)兩の脚脛云云　賢座の如きか、

の上を押せ。若し友愛相親の法を作さんには、東門を開いて面を西に向へて坐すべし、坐せん時は兩脚を並べて竪て、二膝を開いて坐す、此を精舍を造る法及び事を求むる(一)坐の印法と名く、(二)如(モ)し是れ先より淨室ありて、或は露地に於て或は石山等の上に在ては、但だ其の壇をのみ作りて、亦た所求の事に隨ひて前の坐法に依て坐することを得。是の室を起て已て先づ牛糞を以て如法に塗り飾る時は、先づ呪を以て之を呪して、然して後に方さに用ふべし。初め掃地の時、當さに是の呪を誦すべし、呪に曰く

唵、一訶囉(カラ)訶囉、二囉儒揭囉(アラジュギャラ)二合　訶、囉拏(アラダ)去夜(ヤ)三娑嚩(サバ)二合引　訶引

是の呪を誦すること三遍して地を掃へ、地を掃ひ已て(三)地を除掃せんと欲ふの時に復た是の呪を誦すべし、呪に曰く　唵、一稅諦(シビティ)、二摩訶(マカ)去稅諦(シビティ)、三可達尼(カダニ)、四莎嚩(サバ)二合引　訶引五

是の呪を誦すること三遍して以て其の土を除け、土を除き已て牛糞を用て壇に塗るに是の呪を誦すべし、呪に曰く　唵、一羯囉(ヤラ)麗(レイ)、二摩訶(マカ)羯羅麗、三莎嚩(サバ)二合引　訶引

是の呪を誦し用て塗飾を爲せ、若し諸の供養の器及び香水の器を洗ふ時は、當さに是の呪を用ふべし、呪に曰く　娜莫悉底(ナウマクシッチ)二合一曳(ヤイ)、一墜(デビ)肥二合　迦南(キャナン)、二薩婆(サラバ)怛他(タタ)揭多南(ギャタナン)、

(一)坐の印法　身の威儀は皆是れ印なるが故に坐をも印法といふ。

(二)如　是れ云云　元來之れある壇場は何れの方に向ふも運心を用ゆべきなり。

(三)地　土か。

(一)摩訶の下、恐くは研鞞羅合の五字を脱す。

(二)印呪　恐くは是れ呪印か。

(三)呪印　即無能勝獨股の印。

(四)峰　拳の字か

(五)三昧　三三昧か。

(六)常　掌の字か。

三唵、肥羅耳肥羅耳、四(一)摩訶囉折哩、五薩多薩多、六娑囉帝娑囉諦、七帶囉帶囉八尾馱麼儞、九三伴闍儞、十多囉摩底、十一悉馱刈囉二合十二底哩養三合十三莎囉二合引訶引

是の呪を誦すること三遍して諸の供具を洗へ、是の呪を誦する所以は、三麼耶法を犯する一切觸穢の過咎を淨除せんと欲するが爲めなり、若し其の供養の物未だ供養せざる中間には、總べて一の淨處に置いて、是の明呪を誦して是の(二)印呪を作すべし、呪に曰く　唵、一始佉哩、二囉折哩阿引三

是の(三)呪印の相は、當さに右手の中指已下の三指を以て大指を握りて(四)峰と爲し、其の頭指を竪つべし、即ち成す、此の印を以て其の物の上を印して右に轉じて之を揮へ一切の香花燈及び飲食等を防護せんがためなり、然して後に浴處に往け、其れ是の法を作す時には、或は自ら作し、或は一りの弟子をして之を作さしむること俱に得。若し印を結ばんと欲せんの時は、先づ三三昧の印を結び已て然して後に方さに印を結ぶことを得、(五)三昧の相とは、第一には佛部三昧耶の印、先づ二手を以て並べ側めて中指相著けて(六)常に物を掬ふが如くし、頭指を以て各の中指の上の文に附け、次に二大指を以て頭指の下の文を捻せよ、即ち是れ是の印なり、呪に曰く　唵、一怛他揭覩、二

(一)是の呪云云佛部三昧耶の印言の功能なり。

(二)自在か。恐くは觀自在か。

(三)呪す　剩字か

婆囉也、莎嚩二合引訶引三

(一)是の呪を誦し、是の印を以て頂上に安し、當さに想ふべし、是の印即ち是れ如來の眞身なり、等しふして異りあることなしと。此の印を見る者は即ち爲れ佛を見るなり。

次に蓮華部三昧耶の印を說かん。二腕の本を以て相ひ著けて兩手を竪て、十指を散し開き、二大指を以て並べて頭相ひ著け、復た二小指を以て亦た然かせよ即ち成す、是の印を結び以て擧げて頭上に安して右邊に近づくが如くして、當さに是の想を作すべし、此の印は即ち是の菩薩聖(一)自在なりと。呪に曰く　唵、一鉢頭囉、二婆囉耶莎嚩二合引訶引三

次に金剛部三昧耶の印を說かん。當さに二手の背を以て右、左を押して、逆しまに相ひ重ね已て後、右の小指を以て左の大指に叉へ、又た右の大指を以て左の小指に叉へよ、即ち是の印を以て(二)呪す、呪に曰く　唵、一囉折嚕二婆囉耶、莎嚩二合引訶引三

當さに是の印を以て頭上に擧ぐべし、左邊に近づく如くして想へ、是の印は即ち是れ金剛藏菩薩なりと。是の三三昧耶印を作し已て、然して後に方さに通じて諸印を結べ、其の秘藏明呪に遵ふ者は、當さに是の次第に依るべし、即ち其の要を說かん。凡そ修行

の人初め晨朝の時未だ所爲することあらず、將さに(一)出入せんと欲せんには、應さに先づ印を結んで明呪を念誦して已て後、方さに起行すべし、是は明呪なり、呪に曰く

娜莫、囉怛娜、底哩二合　夜耶一　娜莫、室戰二合　荼、嚩折囉波拏曳、二　摩訶藥叉、細娜、跛多曳、三　娜莫、嚩折囉、骨嚕駄也、四　鄧瑟覩二合　迦吒、倍去　囉嚩去也、五　怛他他六唵、七　阿蜜哩多、軍荼里入佉佉、珂奚、珂奚、九　底瑟吒、二合十　畔陀畔陀、十一　訶那訶那、十二　刈嘌闍、刈嘌闍十三　肥悉怖吒耶、肥悉怖吒耶、十四　薩婆尾近那、微那夜迦、誐拏跛底、貳尾單多、羯囉耶、十五　吽沛十六　莎嚩二合引　訶引

是の呪印の相は、(二)兩手を以て各の大母指を用て小母指の甲の上を捻すべし、餘の三指を舒べ已て即ち臂を交へ(三)右左を押し各の膊の上に附け印成ず、心中に是の想を作すべし、兩の脚八字の如くして立て其の腮を脹らかし、右邊の脣を咬へ、其の瞋れる狀を作して、呪を誦すること七遍せよ、若し諸の障礙を作す鬼神等を縛せんと欲はば即ち拳を作りて、其の兩手の三指を以て即ち縛すべし、縛する時應さに畔陀畔陀と言ふべし、是の法を作し已て然して後に房を出でよ、若し諸の觸穢の處に入らんと欲ひ及び廁に上る等も亦た護身すべし、是の印相は、二手の二小指・二無名指を以て右、

(一) 出入　大小便處に出入するなり大小便處に出入する時は、時毎に印を明を結誦し竟て後に出入すべし。

(二) 兩手云云　此の印常に作す所は畔陀畔陀の句に至て臂を交へて胷の下に入れ、右は外、左は內にして今の說は聊か異るか。

(三) 右云云　右外左內なり。云云

左を押し、內に向へて相叉へて二中指竪て、頭相着けて、二頭指は二中指の上の文の背に附け、稍〻去ること一分許り、二大指を並べ竪て、其の中指の中の文を捻せよ、即ち護身印呪を成ず、呪に曰く　唵、嚩折囉祇儞、鉢囉二合捻多也、莎嚩二合　訶引

此の印を用て五處を印せよ、五處とは頭上と二の肩の上と心の上と及び喉の上と、是を五處と名く、此を護身の法と名く。若し廁に往かん時は、應さに彈指すること三度して、驚覺して然して後に之に上るべし、彈指の呪に曰く　唵、枳里枳里、囉嚩勢捺囉、吽沛。

一たび誦し一たび彈指して乃し三遍に至れ、若し手を洗はん時は心中に軍荼利の呪及び形を存想して、然して後に手を洗ふべし、手を洗ひ已て口を漱げ。漱口ぐ印は、右手の中指・無名指を以て掌中に屈して、大指と頭指と小指とを直く申べて、水を承けて用て三度之を漱げ、呪に曰く　唵、柱柱麗、矩嚧矩嚧、莎嚩二合引　訶引

是の印呪を用て口を洗漱し已て後、身中に形を隱して障を作す鬼神等を淨除する法を作すべし、印をいはば、二手を以て拳と爲し、即ち各の二頭指を舒べ、右頭指の頭を以て左の拳中の內れて之を握れ、左の頭指の頭を右拳に內るゝも亦た然り、呪に曰く

(一) 捻多也　若し跛の字を脫するか又た下の[illegible]を以て上の[illegible]字の入聲に合入するか。

(一)諸魔云云、轉法輪返しの印なり。

唵、訶娜訶娜、阿蜜哩諦、吽沛。

誦すること三遍して用つて、頭より徐徐として之を摩して、下に向へて三度之を爲せ、能く身中の一切の魔障をして悉くみな消滅せしむ、諸魔等出で已ると想知して後に、(一)諸魔を縛する印を作せ、當さに左手を以て外に向へて之を招け、即ち右手を以て背を翻して、左手の背上に於て八指を以て各の相ひ叉へ已て、即ち左に之に戻し翻じて心上に向へ、總じて拳と爲し已て、二大指を並べ堅てゝ心に當て之を安す。復た右肘を以て左肘の中に內れて外に向へ之を出し、印を以て頭上に安し已て即ち其の印を開き、徐徐として之を下せ、即ち成ず、呪に曰く　唵、枳里枳里、鼻勞達囉、鉢囉訖嘝底、摩訶骨嚧陀、肥闍夜、儞訖嘝多、吽沛、畔陀畔陀、莎嚩二合引訶。

是の印呪の力を以ての故に、能く一切の魔等をして縛を被らしむ、復た自身金剛の甲を被ると想へ、是の法を作し已て、若し澡洗の時は、呪律及び悉地の中の洗浴の法事に依るべし、當さに知るべし、若しは但唯し軍荼利の小心呪を用て、用ひて自ら浴し及び自ら灌頂することも亦た得。呪に曰く　唵、阿蜜哩諦、吽沛。

三部に用ふる印は、右手の大指を以て小指の甲の上を捻して、餘の三指直く舒ぶ即ち

(一)三云云、三部に通ずるなり。
(二)之　日の字か。

是れなり、是の印呪を以て身衣に灑ぎ、水を呪して澡浴し及び衣を著する等に、並に通じて用ふることを得。若し浴せんとするの時は當さに一心に佛・菩薩等を憶ふべし、散亂せしむること勿れ、本尊と自身と異ることなしと想ひて浴すべし、初めに本尊及び三寶等を想ふこと、目前に在すが如くして、所浴の水を用て三たび掬して獻ずべし。是の印は二手を以て常の如く掬をなすべし、但し二大指と二頭指とを以て頭相ひ捻すべし、先づ佛に奉る呪に曰く　(一)三に通ず　唵、諦囉諦囉、勃陀耶、莎嚩二合引訶

次に法に奉る(二)之を呪す三に通ず　唵、諦囉諦囉、達摩耶、莎嚩二合引訶。

次に僧に奉る呪に曰く三に通ず　唵、諦囉諦囉、僧伽耶、莎嚩二合引訶

次に本尊に奉て之を呪す、三に通ずる呪に曰く　唵、遏嘝鉗、婆伽伴、鉢囉底車、伊漫、莎訶。

其の本尊に水を奉る時は、或は本呪を誦することも亦た得。是の法已て力に隨ひて所浴の河水の中に於て本呪を念じ已て、徐徐として出でよ、衣を取て著る時、是の呪を誦して水を以て衣に灑ぎ、然して後取りて著せよ、呪に曰く　唵、薩婆怛他揭多、地瑟耻多、阿摩囉至儞囉、莎嚩二合引訶。

水を灑ぎ已て次に衣を着せんと欲する時、是の呪を誦すべし、曰く三に通ず 唵、肥摩羅、跋哩幡嘮多、幡折哩、吽。

是の呪印は但し二手を以て各の拳と爲す即ち是れなり、若し一切の衣服●瓔珞●頭冠●環釧及び諸の嚴身の具等を着るに、みな是の呪を誦すべし、是の法を作す時は瞋を起し及び邪思惟すべからず、穢惡及び一切の不吉祥等みな視るべからず、若し澡浴し了て精舍に趣く時、跣足にして往くべからず、心に想せよ、(一)八葉の蓮華ありて以て其の足を承けて、身本尊の形と同じく、左右みな備り、天龍八部前後に圍繞して行者に侍從すと。復た本尊を觀じて面前に在て儼然として分明なりと想へよ、經る所の路中に生せる草木、及び諸の形像、下畜生の形等に至るまで上を騎えて度るべからず、諸の供養の物及び諸の堪の影、尊像等の影、師僧等の影、みな踏むべからず、精舍の前に至らんには、更に須らく洗漱し如法にし已て入るべし、初め入らんと欲せん時、其の戸を開くに臨みて一の吽の聲を作せ、而して便ち之に入れ。室に入て佛前にして是の如くの心を作せ、三世の諸佛菩薩●大法王等、常住の眞身我が肉眼は親たり知見せず、願くは道眼を以て我が歸依を見したまへ。是の心を作し已て當さに三業を以て五

(一) 八葉云云より行者に侍從す迄は是は入堂の時の觀なり、此に二說あり一には金薩と觀、二には諸の通觀なるは本尊と成り天龍八部行者を圍繞す、今の文等之れなり。

體投地し、慇重に禮すべし、亦た當さに口づから言ふべし、我れ今敬禮すと。禮し已て常の如く懺悔隨喜して廣く大願を發し、善等を修せんと誓ふべし、即便ち燒香して是の香氣を以て(一)遂に諸の惡鬼神等を除く、燒香の呪に曰く 是より以前の法金剛等の一切の部に之を用ふ。 唵、鉢頭彌爾、慕訶耶、慕訶耶、闍刈慕訶爾、莎嚩二合 訶引

是の法を作し已て、復た水を呪して四方に散し、以て(二)護結を爲せ、是の法呪に曰く

唵、阿嚩力莎嚩二合 訶引

是の法を作し竟て、復た(三)觀法を作せ。先づ一の(四)紇哩二合 字を觀じ無量壽如來(五)是の字より起て身相圓滿す、如來の身より妙香乳水を流出して乃ち大海と成る、是の海水に於て一の(六)鉢囉字を想せよ、化して一の龜と成る、其の形縱廣無量由旬なり、色は黃金の如し、龜の上に於て一の蓮華を想ふべし、(七)其の花八葉なり、葉に三重あり、其の花は一の紇哩字より起ると想へ、是の花の中に於て一の(八)蘇字を想へ、是の字の兩邊に各の一の吽字ありと想へ、是の諸字等共に一の須彌盧山と作成る、山に八峰あり、衆寶合成せり、此の山の中に於て復た(九)五室を觀ずべし、是の室の外は五あるに似たれども、而も內は是れ一相なり、是の室中にして八大金剛柱ありと想ふべし、

(一) 遂 恐くは遂の字か。

(二) 護結 和本には結護に作る。

(三) 觀法 器界道場觀。

(四) 紇哩 [illegible]。

(五) 是の字より云云 三乘の意は文字は不相應にして文字互に隔をなす、又一乘の意は、文字性離即是れ解脫と云云。

(六) 鉢囉 [illegible]。

(七) 其の花云云 是れ三會の三業なり。

(八) 蘇 [illegible]字。

(九) 五室 外は五あるに似たれども內は是れ一相なり、五室とは五智を表す、五智は一心の中にあり、五智即ち一智の故に。

妙寶共に成じて鈿を廁へて間錯し珍奇瑩飾す、上に摩揭魚あり、首べ玉の衝に寶の鎖あり、懸くるに金鈴を以てす、周に瓔珞を垂れ(一)帳るに寶張を以てし、覺花莊嚴す、(二)繯佩網帶委蕤交はり連なり淨光相ひ映せり、頗黎等の寶を以て其の地となし、而も其の上に於て名花(三)拘蘇摩等を散し布き、淨戒の塗香郁馥殊特なり、解脫の燒香氛氳として超昇し、智の摩尼燈光彩昱耀せり、寶樹行列して香風微しく觸すれば、芳含俱に發す、綺幡繽紛として寶盤相ひ雜へ間ふるに寶瓶を以てす、種種無量の夜叉羅刹諸天等の類、前後に圍繞して諸の音樂を奏し、及び金剛の舞を舞ひ金剛の歌を讃し、瑞雲彌漫して雲中に於て無量の出世の香花を雨し、虛空の中に滿て歷く亂れ徐く墮つ、種種の芳饌・香飲・交羅し安置して而も供養を爲す、行法の人應當に是の如く澄渟して諦かに觀ずべし、心と相應して皎如として分明なりと、是の觀に入る時此の呪を誦すべし、

此は三部に通じて用ふ、及び前の想法も亦た通ず、然も少別あり。

娜莫、三曼多、勃陀南、一薩婆他、二嗢刈入諦、三悉頗二合羅哆漫、四伽伽那、縛、五涉嚩引二合訶引

是の明呪を誦すれば諸の三昧に入り、心の所觀に隨ひて皆な悉く成就す、是れ佛の誠言なり、妄なるべからざるなり、所以は先づ是の觀を作すは、內外の所緣を離れて、

(一) 幄　張か。
(二) 繯　環の字か。
(三) 拘蘇摩　黃白蓮華なり。
(四) 此は云云次下の轉明妃を指す及び前の想法とは前の器界の道場觀をいふ、少し別あり、今は蓮華部なる故に衆字を觀ず、此の字無量壽なる、若し佛部ならば吉字を觀じて大日となる字を、乃至羯磨部ならば、乃至羯磨部ならば、乃至羯字不空成就となる、故に別ありといふ。

清淨にして猶ほし虛空の如くなることを得て、一切に著せざらしめんと欲ふがためなり、復た當さに身を淨むべきが故に、又た是の呪を誦せよ、心印と俱なり、呪に曰く

此の明も三部に通じて用ふ。

唵、一薩婆婆縛婆、輸上馱、二薩婆達摩、三莎縛縛縛輸上馱舍。

是の明呪を誦して(一)身田を淨め已て、復た是の言を作すべし、無量劫より來た生死に淪流して、煩惱の泥に溺れて良友に逢はず、而も妄心に隨ひて出離すること能はず、無上道に於て祈求を起さず、是の故に今我れ菩提心を發して、當さに口に阿字を稱(二)列すべし、此の字を稱する所以は、謂はゆる阿字は是れ無生の義、(三)空寂に趣く門は唯し獨り此の門のみ、能く塵垢を遠かる、斯の法に順ずる者は能く行者の無量劫中の微塵數の罪を除くこと、譬へば淨空の明なる日普ねく照して、一切の幽暗自然に開曉するが如し、日といは慧日なり、空といは(四)呪空なり、斯の慧日を以て(五)呪空の深煩惱の暗を照して、澄淨の心を以て空界を觀せよ、其の中に遍滿して如來の形有す、大さ(六)胡麻の如くして相好周備せり、是の諸の如來みな悉く行者の前に在して彈指驚覺して、行者に謂つて言く、善男子、汝若し菩提心を發さんと欲はば、自ら心を觀ずべしと、爾の時に行者斯の言を得已て、應當に踊躍して座より起つべし、一一に諸の如

(一) 身田云云身は無盡莊嚴の佛果を成就するの良田なり。
(二) 列　和本になし。
(三) 空寂　涅槃のこと、不生不滅の位をいふ。
(四) 呪空　法性の理。
(五) 呪空云云法性の理体。深煩惱の暗、その中に遍滿す、澄淨の心を以て觀ずるに即ち是れ如來形なり。
(六) 胡麻　微細周遍の義。

來の前に於て五體を地に投じ、一心に敬禮すべし、諸佛を禮する時是の呪を誦すべし、呪に曰く　三部に通じて用ふ。唵、薩婆怛他刈多、婆陀、伴達那、羯嚧弭。

此の呪を誦して諸の如來を禮すと想ひ已て、即ち自の心を觀ずべし、自心を觀ずる時當さに是の呪を誦すべし、呪に曰く　唵、質多、鉢囉二合　底吠陀、羯嚧弭三部に通ず。

斯の明呪を誦して自心の中に於て一の月を觀ぜよ、形色圓素なり、未だ全く分明ならず、即ち佛に白して言さく、我れ已に心を見るに猶ほし月の如くなれども而も未だ分明ならず。佛の言はく、善男子、善い哉善い哉、汝已に心を見る、應當に是の明呪を誦して、重ねて其の心を觀じて極めて明淨ならしむべし、呪に曰く　唵、菩提質多、嗢怛波陀夜弭。

是の明呪を誦して心月を觀じて極めて清淨にし已て、復た菩提心を堅固ならしめんがための故に、其の月の上に於て(一)一の金剛蓮華を觀ぜよ、是の花を觀ずる時、應さに是の明呪を誦すべし　呪に曰く　唵、底瑟吒、二合　跋折囉、二合　鉢陀摩。

此の明呪を誦して用て花を觀ぜよ、其の花の上に於て一の金剛あり、是の相を以ての故に名けて金剛蓮華と曰ふ、當さに是の心を作すべし、即ち我が此の心、金剛蓮華と異

(一) 一の金剛云云　今は乃ち蓮華部なるが故に蓮花法界に遍滿すと觀ず、金剛蓮花とは、月の上に花あり、花の上に金剛あり、名けて金剛蓮華といふ。

(一) 漲　張又は暢の字か。

(二) 是事　是時か。尙ほ、恐くは闕文あらん。

(三) 諮屈　召請なり、廣觀の時、心蓮法界に滿す、此時法界心蓮の內に攝れるは是れ不來而來なり、欲觀の時、法界海如來を諮屈して心蓮の中に入れ、妙華を縮めて舊の如くして中に隨て能く是の身の大小を現して住す。

一、五、三、二、四、六、亂脫

(四) 光乃至盡ることなし、此の間恐くは脫落あらんか

(五) 句舍の上に必ず怛、摩の二字あるべし、何なれば其れは我なり、又は身の故に。

(六) 彼の天　本尊。

(七) 音　剎字ならん。

(八) 頭　中の字か。

なるに非ず、漸漸に開敷して(一)光熾にして盛滿して盡ることなし、是の金剛蓮華開敷三昧に入るの時、復た是の呪を誦すべし、曰く　唵、悉頗羅、鉢陀摩。

是の明呪を誦して是の花を觀せよ、花の光明無量恒河沙數の諸佛の妙刹を照す、是の光中に於て衍(二)諠す、蓮華部の中に修行者の所持に隨ひて(三)是の事天に清潤の音聲あつて、是の如くの一切の方土の如來を(四)諮屈して是の花中に入る、是の諸の如來斯の花に入り已て即ち復た徐徐として斯の妙花を縮めて舊の如くして異ることなし、力に隨ひて能く是の身の大小を現じて而も之に住し、是の斂花三昧を作すの時是の呪を誦すべし、曰く　唵、僧褐囉、嚩折囉、鉢陀摩。

此の明呪を誦して華を斂めよ、其の大小に隨ひて住し已て復た金剛蓮華の一身五三昧に入る、二此の四蓮華六以て我が身を成ず、是の觀に入る時復た是の呪を誦せよ。唵、嚩折囉、鉢陀摩、(五)句舍、三摩庾舍、摩訶三摩庾舍。

是の金剛蓮華の身を觀じ已て、即便ち身自ら(六)彼の天の狀に同ずと觀せよ、先づ(七)觀音に入る所以は、謂ゆる堅固に速かに金剛の身を發せんと欲ひ、復た生生に必ず聖者の身を得んと願ずればなり、觀に入る呪印をいはば、當さに二手の(八)頭指以下の三指

を以て外に向へ相ひ叉へ、二頭指を以て頭を以て相ひ拄へ、蓮華葉の如くし、二大指を並べ伸べ豎てよ、呪に曰く（以前と共に三部に用ふ。）唵、紇哩、二合 薩婆迦哩、阿地瑟他、二合 涉漫、紇哩、二合

是の印呪を以て四處を印すべし。心上と眉間と喉上と頂上となり、(一)呪是れを四處と爲す、(二)次に自灌頂の法を作し、能く行者をして速かに三昧の身を得て具足し成就せしむ、是の印相は當さに二手を以て常の如く合掌し已て、即ち頭指已下の四指を蹙めて、頭拄へて其の指背を偃ふして寶蓮華の形を作るべし、呪に曰く(朱)口 唵、地哩、摩儞、鉢頭摩、阿鼻詵者漫、紇哩二合

此の呪を誦して其の印を擧げ額上に拄へて、便ち散して手を分ち頭を遶らし、頂後に至り已て尋いで身を徐く下り、乃し心に至りて心上に住し、復た手を以て金剛拳に爲りて各の頭指を伸べ直からしめ、右の頭指の面に於て一の唵字ありと想ひ、左の頭指の上に於て一の(三)惡字を想へ、即ち二手を以て身を遶らし甲を擐る法を爲せ、是の法を作し已りぬれば一切の天●龍●人●非人等みな行者を見るに是れ金剛の身にして、金剛の甲を被るになんぬ、諸魔邪等敢えて正視せずして退散し馳走して、害をなすこと

(一) 呪 恐くは剰字か。
(二) 次に云云 蓮花灌頂の印、常の如く合掌して風以下の四指を蹙めて三角形に作す。
(三) 惡 砧の字か。

能はず、是の法を作し已て次に復た其の面前に於て本(一)法の像を觀せよ、自ら其の狀を爲すこと常の相好の如くせよ、又た前說の如く妙高山に五の寶室を觀ずる(二)中に、中室の內に於て(三)一心に諦かに無量壽如來を觀せよ、諸の相好を具して光明熾盛なり、佛の右邊に於て觀(四)世音自在菩薩あり、左邊に大勢至菩薩あり、若し更に部の中の餘の菩薩等を持せば、是の菩薩を安して稍〻前の右の畔に近づくべし、本法の所說の如く一切の天神使者及び一切の菩薩等、みな所樂に隨ひて安置すべし、是の觀を作し已て即ち所持に隨ふ明呪の字を用て、想して頭より足に至るまで一一に安布し、亦た其の義理に隨ひて方便して取れ、布地を想ひ竟て即ち立ちて、寶車の印を作して聖者を迎へよ、前の(五)所觀の者をば名けて法身の相となし、今の所請の者をば名けて慧身となす、彼の慧身を屈して法體に來り就かしむ、是の義に由るが故に先づ觀じて後に請す。是の印相は、先づ二手を以て平に仰けて、內に向へて相叉へ、二頭指を以て頭側めて相拄へ、大指を用以て(六)內に向へ、其の中指の頭を撥せよ、是れを寶車印と名く、想へ是の寶車五色の雲に乘りて妙刹に往いて、而して聖者を迎ふと。是の印呪に曰く

唵、都嚕都嚕、吽。

(一) 法 尊の字に非るか。
(二) 中 剰字か。
(三) 一心に云云 今は蓮華部に約するが故に無量壽を觀ず。
(四) 世音 二字剰字か、即ち世音は舊譯、自在は新譯の故に。
(五) 所觀者 道場所觀の者は是れ法身、所請來の者は是れ報身。
(六) 內 外の字か。

(一)本部の心及び印を以て聖者を請して降赴せしめよ。心印といは、二手の十指を以て内に向へ相ひ叉へて拳と爲し、即ち右の大指を抽き出して、内に向へて之を招け、呪に曰く　唵、阿嚕力、莎嚩二合訶引。前には寶車を用て往いて迎ふ、次には法を以て請し至す、寶車と相與に俱に行者の所供養の處に來り就きたまふ、是の處に臨至て(二)車を捨てゝ室に就きたまふ、復た鉤の印呪を用て之を召し、次に屈して室に入り、入り已て歡喜の印法を作して、諸の聖者をして歡喜せしめよ、歡喜せしめ已て即ち座を設けて坐せしめよ、座の印は是れ蓮華三昧の印なり、呪に曰く　唵、彌囉彌囉耶、莎嚩二合訶引

(三)座を設け竟て、即ち遏伽水を上りて供養すべし、本尊の呪印を用て之に上れ、上り了て尋で便ち結界すべし、先づ地界の印、次に四方結界、復た虛空界を結せよ、是は諸部と同じ、結界し已て即ち諸の供養の法等を結べ、復た香花飲食を以て供養せよ、食を供養する呪に曰く　唵、薩婆怛他刈多、囉娑囉娑、愚嚧怛囉、二合布闍、三摩曳、吽。

是の供養を作し已て、即ち聖者の前に對して懺悔し發願し廻向する等、常の如く知んぬべし、即ち(一)數子を取て心に安して念誦せよ、珠を執る呪に曰く　唵、嚩折囉、鉢蜜怛囉、三昧耶、吽。

誦すること七遍して、珠を執りて念誦せよ、念誦し竟て復た懺悔し、懺悔し已て發願し、發願し了て即ち諸の讃頌を誦して、如來及び三寶本尊等の無量の功德を歌詠せよ、復た諸の供養の印等の方便を結んで遏伽を上り供養せよ、供養し已て即ち解界すべし、解界し了て(二)即ち是の呪了て發遣すべし、呪に曰く　唵、訖嚂覩嚩、薩婆薩埵、遏嚂他、悉地、捺多、曳他、努伽、刈車、都含、勃陀、肥灑焰、布娜囉伽、摩娜耶、唵、鉢頭摩、穆。

是の明呪を誦して(三)合蓮華印を結んで、擧げて頭上に安して之を散し、復た前の如く寶車發遣の印呪を以てせよ、發遣の時は外に向へて之を撥せよ、斯の呪を誦する時亦た憶へ、自身に想ふ所の布字及び甲の法を解し已ると。然して後ち佛を禮して退け、念誦の門竟んぬ。

(四)願くは我れ斯の妙法門を傳ふ　之を遵修せん者、幸は速に成ぜんことを
此の微善を用て法界に周うして　三世の利樂窮盡なからんことを。

(一)本部の心別なり、今は乃ち蓮花部心なり。

(二)車を捨て云云　尊室に著くと雖も、未だ道場に入り給はず、故に復鉤の印呪を用ゐて召し屈して室に入らしむ、是の如く鉤鎖を說くこと甚だ希なり。

(三)座を設け云云　此に於て結界を用ふること普通の說にはあらず。

(一)數子　數子なり。

(二)即ち是の呪了て　此の字無しても可ならん。

(三)合蓮華の印　是れ發遣の印。此の印深密なり。

(四)願くは云云　已下流通分にして不空三藏の增加ならんか。